

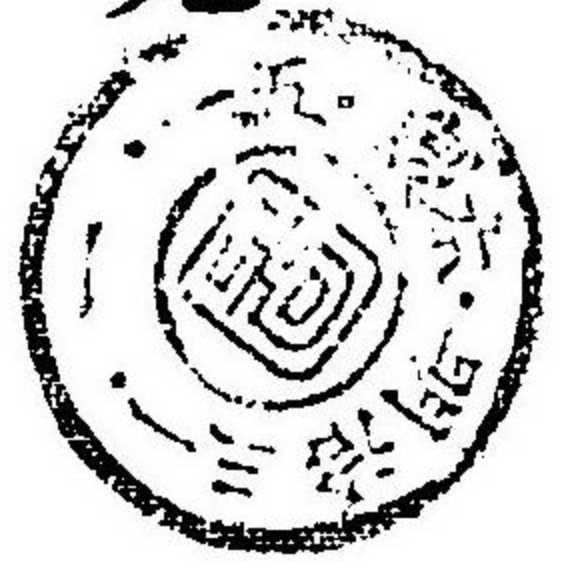
62
352

金子馬治講述



心理學

完



東京專門學校藏版

心理學目次

緒言並びに凡例

緒論

第一章

心理學の定義並びに其の問題

一

定義……………一

問題……………四

第二章

心理學の方法資料並びに區分

七

方法……………一七

資料……………一五

區分……………一六

本論

第一篇

心的生活の最も普通なる状態

第三章

意識及自意識

一七

意識といふ語義……………一七

自意識附注意力……………一八

意識の状態……………二〇

意識の版圖及其の變化……………二二

意識の條件……………二六

第四章

所謂能力

二八

所謂能力論……二九 能力分類の規則……三一

意識の現象の三区分……三五

第五章

原初の注意力

三六

注意力の性質……三六 注意力の生理的條件……三九

注意力の變化及分配……四一 注意力と智情意と

の關係……四三

第二篇

心的生活の元素

四九

第六章

感覺の性質及種類

元素の意義……四九 感覺の性質……五一 感覺

の種類……五四 感覺の區別法……五五 嗅感……

……五六 味感……五六 聽感……五七 視感……

……五八 皮膚感……六一 觸感……六二 温度

の感……六二 筋肉感……六三 關節感……六五

六六

第七章

感覺の量及質

感覺の質を定むる條件……六七 感覺の量及其の計

算法……七三 感覺量と刺激量との關係……七五

第八章

感覺の複合及場合の標示

七八

運動の感覺……八一 位置の感覺……八二 場所

の標示……八五 感覺複合の條件……八六

第九章

感情の性質及種類

九〇

感情の性質……九〇 感情の條件……九六

感情の種類……一〇〇

第十章

苦樂の感

一〇三

苦樂の情件……一〇五 刺激の強弱と苦樂との關係

……一〇七 苦樂の種類……一〇九 格律と反複

……一一二 彌漫と聯關……一一五

第十一章

發意と運動

一一六

發意の性質……一一八 發意の生理的條件……一二〇

六 發意の心理的説明……一三二 運動の分類……

……一二五

第十二章

想念

一二九

想念の性質……一三〇 想念作用の生理的條件……

一三四 原形に對しての想念……一三六 想念の

範圍……一四一

一四四

第十三章

想念作用の次第

聯關法……一四五 想念の連續……一四九 共存

の聯關……一五一 聯關法に關する諸説……一五五

想念の自在作用……一六〇 隨意的再現……一六二

想念作用の有意的發達……一六四

第十四章

原初の知識作用

一六五

判別的意識……一六五 知識作用の生理的條件……

一六七 類同の意識……一六八 不同の意識……

一七〇 原初の知識作用の性質……一七二 原初

の判斷力……一七五 時間の意識……一七九

第三篇

心理生活の發達

第十五章

知覺

一八一

知覺……一八一 知覺の大體の攷究……一八三

嗅感及味感より得る知覺……一九〇 聽感より得る

知覺……一九一 觸感より得る知覺……一九一

第十六章

知覺(前章の續き)

一九五

視感より得る知覺……一九五 視感的知覺は一種の

心的作用……一九七 運動の感覺……一九九

双眼の協力……二〇〇 第二段の幫助……二〇二

想念、感情、意志の影響……二〇三 迷像と幻像……二

〇五 視感的知覺の各作用……二〇七

第十七章

記憶

二一〇

第十八章

記憶と想像と思想との異同……二二一 記憶の三階段……二二三 再生の條件……二二六 回想……二二〇 再認作用……二二二 記憶の種類……二二二 記憶術……二二三

想像 二二四

想像……二二四 想像の制限……二二五 想像の種類……二二七 再び想像の種類……二三一 想像の養成……二三二

思想と言語 二三三

心理学と論理学……二三三 思想の性質……二三七 思想の階段……二四〇 概念……二四一 判断……二四三 言語と思想との関係……二四七

推理 二五一

推理……二五一 関係の意識……二五三 推理の

第十九章

第二十章

第二十一章

第二十二章

第二十三章

種類……二五七 推理作用の發達……二五九 同一の原理並びに充全智の原理……二六一

空間時間並びに因果 二六四

空間時間及因果……二六四 空間の概念の發達……二六六 時間の概念の發達……二六六 運動と數の概念……二六八 因果の概念……二六八

物の知識並びに我の知識 二七二

知識……二七二 實在の信仰……二七四 知識の種類……二七七 物我の別……二七九 我の知識の發達……二八〇 我の意識の發達……二八二

情並びに欲 二八六

感情攻究の四要件……二八八 情の單純なるもの……二九二 情と情緒との別……二九四 情の生理的條件……二九五 情の想念作用と思想との上に及

ぼす影響……二九八 情の複合……二九九 情の
本意論……三〇一 欲の本質……三〇三

第廿四章

情緒

三〇四

智力的情緒……三〇五 審美的情緒……三〇八
道徳的情緒……三一四 寫美的情緒と道徳的情緒と
の關係……三二〇

第廿五章

衝動、本能並びに願望

三二三

衝動……三二四 本能……三二六 願望……三二八

第廿六章

意志並びに品性

意志の性質……三三四 選擇……三三八 企圖……
三四一 意志の自由……三四四 品性……三四八

第廿七章

心の發達の模型と原理

三五一

心の模型……三五二 氣質……三五二 男女の兩
性……三五六 年齢及び人種……三五七 全心的

生活の原理……三五九 連續法三……六〇

關係法……三六一 合一法……三六二

本意法……三六四

心理學

緒言并びに凡例

一世間往々心理學を目して既に整然完備せる一科の學のごとく解する者ありされど實は然らず其のやゝ科學の形を具ふるに至りしは僅に近代のことにして今日尙未だ整頓せる一科の學とは稱しがたき趣あり。古來泰西諸國に於ては心理の攻究必すしも疎漏なりしにあらざされど今人の眼より見れば前代學者の手に成れる心理學は尙未だ忠實に心理を説明したるものとは言ふべからざる。否想像と憶説とより成れる説明頗る多しとなす。然るに近代に至り科學的精神の勃興せるにつれて心理を忠實に科學的に攻究せんとする學者輩出し種々なる經驗を積み様々なる方法に由り先を争うて新心理學を建設せんと努むるに至りぬ。されば斯學は今日尙整然完備せる一科の學とはならざるも諸學者が種々なる攻究の結果漸々科學の形を具へきたりて將來の進歩刮目して見るべきもの有るに至りぬ。就中輒近二十年間に於ける斯學の進歩は頗る顯著なるものあり種々なる材料様々なる新説現れきたりて正に新心理學の建設を催

さんとするものに似たり。吾人心理を攻究せんとする者焉ぞ此等新現象を等閑視して可ならんや。

一從來我が國に有りふれたる心理學書は皆悉く所謂舊派の手に成りたるもの、みにはあらざるも最近の學統に基きて最近の記實と説明とを加へたるものは甚だ稀なり。本講義は此の缺を補はんがため専ら米國エール大學の現任哲學教授博士シヨルシ、ツラムアル、ラッド氏が新著『心理學』に基きて此等心理學上の最新なる消息をも傳へ之れと同時に實際に的切にして取りわけ心理の初歩を心得たる者には特別の裨益あらんを期す。

一ラッド氏が新著心理學『サイコロジャー、デスクリプチャー、エンド、エクスプラネトリ』に記實的兼説明的心理學は七百頁に近き浩瀚の書にしてエール大學々生に心理學を教授せる際特に種々なる攻究と様々なる實驗とを悉して自ら工夫し出だせるところを一巻に編纂せるものなり。序文の中に曰はく「近來英語にて記されたる燦爛、該博、浩瀚の心理學書少からずと雖も尙斯學に關して他の一層進歩せる所説を出だすの餘地あり否實際其の必要あり」密にみづから信ずらく本書の

書の一葉又一行と雖も殆ど皆書中所載の事柄の悉皆新に一種特別なる解説の組織中にあみこまれたることを示さざるは無かるべしと。以て本書の特質を知るべし。

一本講義は紙數に制限あるを以て逐一上の新著を講ずる能はず因りて其の特に専門的殊別的なる部分又は其の所説の複雑煩瑣なる部分を除きて大體のみを講ぜり故に本講義はラッド氏が新著を縮寫せるものとも見るべし。

一元來ラッド氏の書きぶりは一見頗る紛糾錯雜や、文の秩序を等閑に附せる趣あり隨うて本講義も勢ひ其の弊を免れず。されど其の紛糾錯雜せる所以は實は心理其のもの、紛糾錯雜せる所以、精細に熟讀翫味し行かば却りて心理の實相を窺ひ得るの便あらん。

一本講義中特に人名を引かずして引用のまゝし、()を附せるものは皆ラッド氏が語を其のまゝに翻譯せるものと知るべし。

心理學

金子馬治述

緒言

第一章 心理學の定義並びに其の問題

如何なる學にもあれ之れに確實なる定義を下ださん難事なり心理學に於ても亦然り其の充分なる定義の如きは全般の科學の進歩を俟ちて後に期すべし假に斯學研究の當初にこれが定義を下だせば左の如くいふを得。

心理學とは意識の現象そのものを記述し且説明する一科の學を謂ふ。

此の定義の中には下の如き假定を含む

一 意識といふ一種の現象は確實に存在するものなり 物理學が其の攻究を始むるに當たりて先づ物質的變化といふ一種の現象は確實に存在するものなりと假定することく心理學も亦先づ意識といふ一種の現象は確實に存在するものなりと假定す。蓋し意識の現象は心理學が攻究すべき目的のもの

にして之れが實在を假定せずば初より心理學の成立たゞん由なければなり。然らば意識の現象とは何ぞやといふに正當に言はゞ吾人は意識そのものを言ひ説きがたし意識其のものはたゞ各人が直接に自己に反省して知るべきものなればなり。たゞ假に意識中の事柄を指示せば彼の耳目口鼻等を媒として我れに知られたる諸の象、又は種々の事柄を思量し考察する所以の諸の想、又は彼の苦樂を感じる所以の諸の情、又は彼の事物を願望し若しくは行爲を決する所以の諸の意、などすべて謂ふところ心の事實即ち心念は皆これ意識の現象なりといふを得べし。されば意識の現象は謂ふところ心に屬する一切の事實にして心理學は斯くの如き現象の確實に存在することを假定するものなり。

二 意識の現象は科學的に攻究せらるゝを得 これまた心理學の必ず先づ假定せざるべからざることなり。之を言ひかふれば吾人は意識の諸の現象を取りて其が相互の關係を定むる所以の一定の條件と法則とを見出だし得べく又諸の複雑なる現象をば單純なる心的元素に分析するを得べく又意識の

現象の漸々發達進歩する形跡を詳にするを得と假定せざるべからず。一言を以て蔽へば意識の現象は科學的に攻究せらるべき整然たる組織を具ふるものと假定せざるべからず。整然たる組織を具ふるものは意識の諸の箇々殊別なる現象は其の間互に何等の關係もなくしてひとへに孤立的に存在するものにはあらで各現象間には互に密接なる關係ありて其の裡に整然たる一定の規律あるをいふ。若し意識の現象は其の間に何等の規律もなき混沌たるものなりとせば心理學は如何にして之れより一定の法則を見出だし得べきか否心理學は如何にして成立するを得べきか。之れを實際自己の意識に徴するに吾人は其の現象の妙に統一せられて其の間に一定の規律あるを認めずばならず即ち我が意識の現象は他人のとは別なり又他人の意識の現象は我れのとは別なり我が意識の現象は常に我が意識の現象にして幼時より老成に至るまで曾て異なることなし即ち我が意識の現象は他人のものに變ずといふが如きことなしこれ吾人が意識の現象間には一種特別な統一ありといふ所以なり。古來此の一種特別な統一を見て其の本源を心又

は靈魂又は我と呼べる學者少からずされどこれは哲學上の問題にしてこゝに謂ふ心理學は姑くこれに關係せず心理學はたゞ意識の現象間に斯くの如き整然たる統一あるを知れば足れり。さて意識の現象は斯くの如く我れのと他人のとは別なるが故に嚴密に言はゞ整然一系統をなせる意識の現象とは、一個人が意識の現象の義なり隨うて心理學は個人が意識の現象の學なりともいふを得べし。されどさばかりにては心理學は未だ其の本領を悉したりといふべからず必や殆く衆個人が意識の現象を研究し廣く一切の心的事實を考察して以て全個人に通ずる意識の現象(能ふべくは一切の動物にまで通ずる意識の現象を其のあるがまゝに記述し且説明せざるべからず。されば心理學は皆に一個人のみならず衆個人に通ずる意識の現象の科學的に攻究せらるべきものなると即ち一切の意識の現象は整然として一定の組織を具へたるものなるとを假定せる所以明らかなるべし。

次に心理學の攻究すべき問題は何ぞと問はゞ意識の現象を記述し且之れを説明すること是れなりと答ふべし。換言すれば謂ふところ心に屬する現象條件並び

に法則を示すは是れ心理學の攻究すべき問題なりといふべし。蓋し如何なる學にもあれ其の攻究を始むるに當たりては先づ其の攻究すべき目的の物を精細に記述するを要す即ち詳密なる觀察と正確なる試験とによりて現存の事實を及ぶべきかぎり精細に記述するを要す。心理學も亦然り心の法則を繹ぬるに先だちてまづ實際の事實即ち意識の現象其のものを精細に記述するを要す直接の經驗に訴へて心的現象を有るがまゝに記述するを要す。されど心理學は單に之れのみにて止まるべきにあらざ其の精細に記述せられたる諸の事實を基として之れより一定の法則を歸納せざるべからず即ち心的現象の支配せらるゝ規律並びに其の發達する形跡を説明せざるべからず。詳言すれば心理學が努むべき説明に二種あり(第一)複雑なる意識の現象を單純なる心的元素に解剖し且件の心的元素の或は離れ或は合する所以の法則を發見すること(第二)意識の發達する形跡を詳にすること是れなり。而して第二種の説明はあつから亦二種に分かる(第一)意識の各種の現象は如何なる生理的狀態に基きて起こり如何なる前存の心的状態を受けて起こるべきかを詳にすること(第二)個人が心的生活の進化を支配する普

遍法を明示することは是れなり。此に於てや知るべし心理學の攻究すべき問題は一切の意識の現象を精細に記述し且之れを正確に説明することなるを。尙他の諸學との關係を見る時は心理學の本領一層明らかなり諸學の中こゝには特に第一或近き關係の科學及び第二通常所謂哲學を取り出で云へば是れなり。心理學が廣義に所謂物理的科學の中特に生理學又生物學と密接の關係あることは明らかなり生理的狀態の變化が心的狀態の變化に應ずべきものなることは諸學者の共に認むるところ就中腦の作用と意識の現象と密接の關係あることは到底拒むべからざるの事實なり。されど此の故をもて心理學を或は腦神經の學と會し或は生物學の一部と見做さん非なり廣く云ふ物理學は物質に關する學にして心理學の意識の現象を攻究するとは全く異なれり若し單に關係あるの故のみをもて同一の學なりと會すれば孰れの學か全く孤立して些も他に關係なきものあらん一切の科學は皆同一なりと言はざるを得ざるべし。故に假令生理學等と心理學とは密接の關係あるも心理學がやがて生理學等にはあらざるを知るべし。又人に關する諸科學例へば經濟學政治學社會學史學等は皆人心を基として

立てる學なり故に心理に通ぜざる者にあらずば正當に此等の學には通じがたし以て人に關する諸科學の如何に心理學に關係するかを知るべし。次に哲學と心理學との關係に至りては最も注意すべきものあり嚴密に言はば兩者は實際互に接觸するが故に其の間に明らかに區劃を立てがたし。少しにても深く心理を探らんとすれば次第に哲學の本領に近づき又哲學を研究せんとすれば先づ心理學に頼らざるべからず故に心理學は哲學に入るべき預備の學たる趣あり。詳言すれば心理學は哲學と異なるも一步を進むればやがて哲學の範圍を侵すべし是れ兩者の動もすれば混交して判別せられがたき所以なり。さもあらばあれ心理學は意識の現象を記述し且説明する科學にして哲學は件の現象の本體又は其の窮極の意義を闡明する哲學的攻究とは異なれり心理學者は須からく經驗を根據として心的現象を科學的に攻究し其の以上の事はこれを純理哲學に譲るべし。

第二章 心理學の方法資料並びに區分

前章の定義並びに問題にまたがへば心理學は第一意識の事實を觀察し第二解剖し第三歸納し第四且其の生起の次第を詳にすべきものなり。故に心理攻究の方

法は此等心理學上の問題を解釋するに便なるものならざるべからず。故に今日まで採用し來たれる心理攻究の方法は(第一)觀察(第二)解剖(第三)歸納(第四)生起法オプザベーション アナリシス インダクション ジェネレーションこれなり。

第一觀察 觀察を分かちて二となす曰はく直接觀察曰はく間接觀察これなり。直接觀察とは直接に心的現象を觀察することにして彼の自省イントロスペクションと稱する方法之れに屬す又間接觀察とは他物を媒として心的現象を觀察する方法をいふ。下に之れを略説せん。

直接觀察(自省) 自省とは直接に意識の現象を觀察して親しく其の事實を察知するをいふ。此の方法に關しては古來幾多の異論あれど吾人は下のごとく斷言するを得べし。曰はく「直接に心的事實を觀察するとはたゞに此等の事實をして吾人が知識の眞實の目的物たらしむるのみならず又或一定の度までは彼の發達せる意識の複雑なる現象を其の單純なる組成元素に分析するを得べし」と。蓋し心的事實が眞に知識の目的物即ち眞實に吾人に知らるべきものならずば心理學は初より成立し得べきにあらず心理學の成立し得るは心的事實を眞實に吾人に知

らるべきものと假定すればなり。然り而して心的事實即ち意識の現象は所謂内インナー部のものなるが故に之れを考察せんとするには唯直接に其の事實を觀測するの外に途なし。心理學は直接觀察即ち自省の外に種々の方法を採用すと雖も其等は要するに此の直接觀察を幫助すべきものたるに過ぎず。故に心理攻究の唯一方法はたゞ直接觀察即ち自省ありと言はんのみ而してまた此の直接觀察は吾人をして眞實に心的事實を考察せしむる唯一方法なりと言はんのみ。此の方法にして非ならば心理學は初より成立するを得ざるべければなり。

勿論自省を用ふる者の巧拙によりて攻究の結果に大なる相異を來たすべきは明らかなり。人によりて天賦の能力を異にするが故に或者は自己の意識を觀察することさながら他物を觀察するがごとく巧に、或者は其の拙なること容易に自己の心的生活を考察する能はざるものあり。されど其の拙なる者も屢々之れを實行して鍛練の功を積まば遂には巧に心的事實を觀測し得るに至るとあらん。故に直接觀察を爲すは困難なりといふの故を以て直に之れを排斥すべきにあらずむしろその困難を冒して漸次試練の功を積むべきなり。

斯くのごとく直接観察は心理攻究の唯一方法なりと雖も亦之れに伴ふべき種々の困難あることを忘るべからず。如何なる學に於ても其の攻究法を正當に使用せんは常に吾人の難事とするところ、憎悪、偏嫉、誤解、臆測等動もすれば其の間に混交し來たりて吾人が正當の攻究を妨ぐることも少からず。就中心理研究に至りては其の困難あること他學の比にあらざるは職として意識の現象其のもの、攻究しがたきに由らざるばならず。即ち意識の現象は極めて複雑なると同時に極めて敏活、極めて微妙なると同時に極めて迅速、其の變化の駿速なること電光石火の疾きに似たり。就中苦樂の情に至りては其の變化の複雑迅速なる容易に観測すべからざるものあり。されば古來自省は到底心理攻究の方法にあらざると論ぜし者さへ少からず即ち曰く假に我れ我が心狀を観察すとせよ例へばいたく激昂せる我が心情を観察すとせよ然るに我れみづから既に大に激昂し居らば争で精確に件の心狀を観測するを得んやさればとて其の冷然として正確に之れを観測し得る時はもはや甚しく激昂せるの時にあらざるなりと。げに自省の困難なるとは到底否むべからずされど之れが爲に此の唯一方法を排斥せば心理學は全く成立する能はざるべし。否斯くのごとき困難は其の度に大小こそあれ他の諸科學にも亦免るべからざるの困難なり。例へば顯微鏡を用ひて或小虫を観察するにも其の観察者の心狀正しからずば充分精確に之れを観測する能はざるがごとし。我れみづから我が心的生活を觀察せんは甚だ難事なり而も或は記憶によりて過去の心狀を回顧し或は諸の經驗を基として或心狀を推考することは必しも爲しがたき業にあらざ。故に充分精確に心的生活を自省せんことは今日尙望むべからずと雖も人智歲月の進歩と共に自省といふ方法の漸次完備せらるべきものなることは疑ふべからず。

間接観察 次に心理學は間接の觀察を用ひざるべからず間接觀察とは他人の容貌、顔色、態度、舉動等によりて他人の心的現象を推測するをいふ。即ち他人の外形を媒として其の者の心狀は斯く／＼まか／＼なるべしと自己に引きくらべて間接に觀察するをいふ。蓋し直接觀察のみにては自己といふ一個人の心的現象を考察し得るのみにて廣く衆個人の心的現象を考察するを得ず一切の心的現象を考察せんとするには必ず間接觀察の方法を用ひざるべからず。而して間接觀

察を用ふるに就きて注意すべきは(一)意識の状態は形體其の他之れに關係ある事物に現はるゝこと(二)此等形體に現れたる表彰を觀察者が自己に引きくらべて解釋し得ること、是れなり。若し觀察者にして此等の表彰を解釋する能はずばげにツルゲニエフの言へること、他人の心は闇の森なるべし。以て間接觀察は直接觀察即ち自省に關係せる、むしろ附屬せる方法に過ぎざるを知るべし。

第二解剖 解剖とは吾人が觀察せる現象を更に細に分析することなり。彼の試験エクスペリメントと稱する方法は件の解剖と觀察とを兼ねたる方法なり。下に少しく之れを説かん。

試験 觀察兼分析の方法に屬する試験とは近來盛行はるゝ物理學的實驗をいふ即ち種々の器械を用ひ様々なる工夫を案出して物理學的に心的現象を實驗する方法をいふ。此の方法が心的現象の説明に少なからざる幫助を與へしとは何人も認むるところ、今日に至りてはこは心理攻究に缺くべからざる方法なりとさへ思惟せらるゝに至れり。されどこゝに注意すべきは餘り過度に此の方法の効果を信ずるの不可なること、又餘り過度に此の方法の効果を貶するの不可な

ること、是れなり。物理學的に心的現象を實驗するの效果や決して少小なるにあらずされど此の方法のみによりて吾人は心理上の至深至難なる問題をも解釋し得べしと信ずるは非なり。之れに反して件の方法は心理攻究に些の便をも與へずと貶するも亦非なり蓋し吾人は此の方法によりて多少心的現象の生起上の關係を知り又如何なる生理的狀態には如何なる心的状態が伴ふか等をも知るを得べければなり。故に心理攻究より全く此の方法を排斥するの非なると同時に此の方法を以て心理攻究の唯一方法となすの非なることも亦明らかなりといふべし。

然りと雖も此の方法を使用するに就きて確然たる一定の限界を附せんは難し。たゞ試験といふことが心理攻究の方法となり得る要件のみを示さば下のごとし。曰はく(一)試験は自省に伴はれて始めて心理學の攻究法となるを得(二)曰はく試験に如何なる生理的狀態の存在するところに如何やうに心的現象が離合變化するか等に就きて大體の説明を與ふるに過ぎず其の詳密なることに至りては到底試験の指示し得るところにあらずと。

第三歸納 如何なる科學も歸納法を用ひざるはなし心理學が此の方法を用ふるさまは些も他の科學と異なることなし。觀察と解剖とによりて諸の心的事實を集めさて此の中より普通の法則を發見し又は假定を立て、此等の諸事實を説明する等皆歸納法に頼らざるはなし。故に歸納法は觀察と解剖との後に來たるべき必然の方法ともいふべし。歸納法によりて發見せられたる法則は往々後に至りて不充分なりと認めらるゝことありされど吾人は幾度も之れを改善増補すべし。單より複に簡より繁に漸次概括し行きて止まざるは是れ歸納法の特質なり。然り而して吾人が斯く歸納法を心理攻究に使用し得るは複雑なる心的現象には一定の秩序即ち整然たる規律ありと假定すればなり。此の假定にして正しからずば皆に歸納法の無要なるのみならず心理學は全く成立する能はざるべし。第四生起法 生起法とは心的生活は如何やうにして起こり又如何やうにして發達するものなるかを究むるの方法をいふ。發達デベロプメントといふ概念は此の方法の根據なり。今日のところにては此の方法は未だ充分に使用せられずと雖も心理攻究の進歩につれて吾人は終に人類全體の進歩の跡を探求するに至りぬべし。故に

此の方法は觀察し解剖し歸納せる後に來たるべき最後の必要の方法なりといふべし。

次に心理學の資料といふことを説明すべし。心理學の資料とは心理攻究の資料といふ義なり。而して斯くのごとき資料は何ぞと言はすべて心的現象の現れたる表彰は皆これ心理攻究の材料なりといふを得べし。下に其の重なるものを指示せん。

(一)一切の美術品 詩歌、小説、繪畫、音樂、彫刻等は皆これ心的生活の表彰なり就中上乘の劇詩、小説、傳奇等は心理攻究の好資料なり。

(二)社會上の諸現象其の他之れに關する歴史的評論 例へば野蠻人又は外國人の生活其の他各國各人種の様々なる制度、習慣、法律等

(三)疾病的現象 健全なる心的現象を究むるには健全を失へる疾病的現象を、取りて之れに對照するを要す癡癲、白痴等皆これ心理學の好資料なり。

(四)嬰兒小兒等の心的現象 是れ發達せる心的現象の生起を知るに便あり近來「嬰兒心理學」の名あるこれがためなり。「比較心理學」と稱するものまた之れ

に屬す動物の心的現象を探りて人心に比較する學なり。

(五)心理書 古來現れたる幾多の心理學書は皆先人が攻究の結果なり
次に心理學を大別すれば二となる曰はく經驗的心理學曰はく理論的心理學(又は
心理哲學)これなり。前者は經驗の範圍内にて心的現象其のものを攻究するの學
後者は深く心理上の哲理を論ずるの學、本講義は前者に屬す。而して經驗的心理
學は從來大抵智情意の三門に區別せられたり即ちさながら智情意は獨立せる三
種の能力のごとく分論せられたり。されどこは誤解なり智情意は決して互に獨
立して存在せる能力にあらず互に相關係せる意識の現象なり。故に吾人は心理
學を區分して三門となす曰はく心的生活の最も普通なる状態曰はく心的生活の
元素曰はく心的生活の發達これなり。此の區分の正當なりや否やは以下の講述
によりておのづから明なるに至るべし。

本論

心的生活の最も普通なる状態

第三章 意識及自意識 (Consciousness And Self-Consciousness)

意識といふ語義 意識といふ語の大要はほゞ前に説明したりされどさばかり
にては未だ其の意義を悉したりと謂ふべからずよりて更に下に詳説せん。嚴密
に言へば吾人は意識の何たるを定義しがたし意識に屬する語を用ふるにあらず
ば意識其のものを解釋する能はざればなり。故に假に比喻をもて言はば意識は
猶一切の心的事實を含める溶解液のごとし心に關する一切の現象は皆意識の中
にありといふを得べし。苟も心的現象の存するところには輒ち意識あり意識の
存するところには輒ち心的現象あり意識を離れて心的現象なく心的現象は皆意
識の中なる現象なり。尙之れを彼の「無意識」と稱するものに較べなば其の意義さ
らに明らかならん。無意識とは心的現象全くこれ無きと即ち心的生活の皆無な
るをいふ故に意識は其の反對の状態を指すの語なり。例へば熟睡の時に反して
醒覺の状態にあるは吾人の意識ある時なり次第に眠りゆくに反して漸々に醒め

來たる時は是れ吾人が意識ある者となる時なり。されば心に屬する一切の事件、一切の状態、一切の事實は皆意識に屬せるもの意識の中に含まれたるものといひ得べし。漠然たる齒痛といふ感情も又は神に關する森嚴なる考察も又は嬰兒の感ずるがごとき體機感も將たまた心理學者の精密なる攻究も皆これ意識の現象ならざるはなし。以て意識の無き所には心的事實なく意識の有る處には必ず心的事實の存するを知るべし。

自意識附注意力 吾人は知る意識は常に事實として存在せるのみならずまたしか存在せりと知らるべきものなることを。換言すれば意識は常に心理學によりて攻究せらるべき問題として存在せるのみならずまた吾人が知識の目的物として存在するものなり。此の點より考ふる時は吾人は假に意識を分かちて知らんとする意識と知らるべき意識との二となすを得べきに似たり。即ち斯くくの意識ありと認知する意識としか認知せらるゝ意識との二となすを得べきに似たり。されどこゝに注意すべきは件の兩種の意識は別なるものにあらずして共にひとしく意識なること、是れなり。換言すれば互に別なる二の現象が斯く別々

に起こるにあらずして同一不二の意識の裡に斯くのごとき二様の現象が起こること、是れなり。故に意識は常に事實として存在せるのみならず此の同一不二の意識がまたみづから自己を知るものといふべし。意識の此の状態を名けて、自意識といふ蓋し意識が意識みづからを意識せるの時なればなり。

尙他の點より説明せんによそ意識は或は知り或は感じ或は欲する等種々の能力を具へたるものなるが此の知るといふ作用のうち最も單純なるものは事物を判別する意識なり此の事實と彼の事實とを對照し甲の現象と乙の現象とを比較して能く之れを辨別する作用なり。而して意識が意識みづからを意識する時即ち自己を知る時は必然件の判別力が意識に伴ふべきを知る蓋し意識が意識みづからを認知するには必ず其の意識を斯くくのものにしてまかくのものにあらずと辨別するを要すればなり。然り而して斯くのごとき判別力が意識に伴ふには必ず先づ注意力といふことを假定せざるべからず注意といふ作用伴ふにあらずば吾人は事物を辨別する能はざればなり。こは日常の經驗に照らして明らかなるごとく注意力の大小によりて判別に明不明ありいよゝ大なる注意力を

用ふればいよ／＼明らかに彼の事實と此の事實とを判別し得べく注意力いよいよ小なれば甲の現象と乙の現象とを辨別することも亦いよ／＼不明なり。さて斯くのごとき意識に注意力伴ひ随うて判別力加はりて或一定の意識を認知し更に我といふ念之れに伴ふ時はこゝに自意識といふ状態成る。詳言すれば注意力によりて我れが斯く／＼まか／＼の現象を辨知すと感ずる時は其處に自意識と稱する状態起こる。

されば意識と自意識とは全く異なるものにあらざ同一意識に判別力の伴ひたる時は件の意識が自意識となるに外ならざるを知るべし。之れを區別して全く別種の存在物のごとき解するは大なる誤謬なり。

ステート、オブ、コンシャスネス 意識の状態といふことを説明するには先づ意識は如何なる様に存在する者なるかを知るを要す。一言もて之れを蔽へば意識は多を含める一なりといふを得べし。詳言すれば意識の現象は極めて複雑多様なれども皆な同一不二なる唯一の意識に統一せらる即ち意識は常に一なり此の心的現象は彼の意識に屬して彼の心的現象は此の(別なる)意識に屬すといふがごときことなし。若

し意識にして、一ならずば吾人は争で心的生活の全體の發達といふが如きを究むるを得んや。夫れ然り意識は一なりと雖も亦此の一は多を含めるの一なることを忘るべからず複雑多様な一切の心的現象は皆此の一に含まれたる多なり多を含まざる一には何等の變化も何等の發達も無かるべし。故に意識は種々の變化流轉を具へたる一、躰の流ともいふべきなり。

されどこゝに注意すべきは意識の各状態に具はれる多と一とは互に相撞着するものにあらざること是れなり。意識は一なりと雖も之れがために其の多なるを妨げず又其の現象は多なりと雖も亦之れがために其の一なるを妨げざること是れなり。否雜多の現象あれば其處に必ず唯一あり唯一あれば其處に必ず雜多の現象あり一なる意識は必ず多なる現象を含み多なる現象は常に一なる意識に統一せらる。而してまた斯くのごとき多と一とは數學的に空に考出だされたる多と一とはあらず實際個々の多なる現象には一なる意識あり實際一なる意識には多なる現象の具はれるを見る。こは實際各自の意識に徴すれば明らかかなり苟も意識の一現象あらんか件の現象は全く他の現象を離れて(關係なくして)單獨に

存立し得るものにあらず必や一、一、の流をなせる意識中の一分として存立す。吾人が個々なる現象と稱するものは判別力を用ゐて一、一、の意識より假に之れを分別せるものゝみ一切の個々なる現象は皆一、一、の意識中に含まれたるものにして意識は衆現象を具へたる一、一、の大流とも稱すべきなり。

故に意識の一、一、の状態とは判別力を用ひて他の全體の意識に關係ある一分を假に分別せる一、一、現象に外ならざるを知るべし。換言すれば意識の一、一、状態とは意識全體の流の中なる一分といふ義に外ならざるを知るべし。

意識の版圖並びに其の變化　意識の一、一、版圖とは前に所謂意識の一、一、状態に同じ故に一、一、の流をなせる意識の一分を名けて之れを意識の一、一、版圖といふ。而して意識の版圖は第一、一、廣さ、第二、一、強さ、第三、一、速度、第四、一、性質等によりて變化す下に其の大要を略記せん。

(一) 廣さ エクステンシブ

吾人が特に意識する現象(即ち版圖)には或は廣きあり或は狭きあり。

例へば鳥空中に飛ぶと云一、一、版圖と破雲の間に月現れし時群鳥其の前を通過すといふ一、一、版圖とを比するに前者は後者より狭く後者は前者より廣し。

斯くのごとく其の中に辨別せられたる現象愈、多ければ其の版圖は愈、廣しといふべく其の中に辨別せられたる現象愈、少なければ其の版圖は愈、狭しといふべきなり。

(二) 強さ インテンシブ

吾人が特に意識する現象(即ち版圖)には或は強きあり或は弱きあり。

例へば昨日は甚だ活潑に事物を考察し得たれど今日は殆ど何事をも明瞭に考察し得ずといふがときは是れ昨は意識の版圖強くして今は意識の版圖弱きに基けり。故に意識せらるゝ現象愈、活潑なれば意識の版圖は愈、強しといふべく之れに反して意識せらるゝ現象愈、不活潑なれば意識の版圖は愈、弱しといふべきなり。

(三) 速度 スピード

速度とは一定の時間に意識の現象の流轉する遲速をいふ。例へば

昨は種々なる思想種々なる感情交、相連続して迅速に起こり來たりしが今は思想感情の流轉甚だ緩慢にして一定の時間に僅に二三の意識の版圖を感ぜしのみといふがときは是れあり。斯くのごとく一定の時間に流轉する版圖の數、多ければ其は速力強き時といふべく之れに反して流轉する版圖の數、愈、

少なければ其は速力弱き時といふべきなり。

(四)性質又は調子 吾人が意識する現象は時と處とによりて其の性質様々に異なり。例へば或時は吾人は全く外物にのみ見取れて所謂客觀的感情外界にのみむかへたる感情に支配せらるゝことあり又或時は疾病に苦悶し又は自己の不運を悲嘆する等所謂主觀的感情自己に關する感情に支配せらるゝことあり。前者と後者とは其の現象の性質大に異なり全軀の調子おのづから別なるを知るべし。

上に記せし四條件は皆意識の版圖に變化を起こさしむるものなるが此の中廣さ強さ並びに速度は互に相關係するものゝことし。蓋し物理界の規律を假りて言はゞ意識の版圖に廣狹強弱遲速等あるは心的エネルギーの種々なる變化に基く而して定量のエネルギーは一方に消費せらるゝこと多ければ他方に之れに應ずる減少を來たすべきと勿論なればなり。例へば意識の版圖を廣うして一時に數多の事に注意せんとすれば各版圖に及ぼすべき注意力減少するため件の意識は薄弱とならざるを得ず。之れに反して意識の版圖を強うせんとすれば勢ひ多數

の版圖に注意力を及ぼす能はざるが故に其の版圖はおのづから狹隘とならざるを得ず。又明瞭に強く或事物を考へ若しくは感ぜんとするには意識の流轉の緩慢なるを要す流轉の速力強き時は明瞭に強く其の事物を考へ若しくは感ずる能はず。之れに反して流轉の速度を早めんとすれば其の經過の餘りに迅速なるため其の事物を考へ若しくは感ずることおのづから不明瞭且薄弱ならざるを得ざるべし。

意識の版圖の廣狹其の強弱其の遲速には斯くのごとき關係あるを以て心理學者中には往々物理的規律を應用して下のごとき心理的規律を立つる者あり

意識の版圖の強弱は其の流轉の速度に反比例す

意識の版圖の廣狹は注意力の強弱に反比例す

げにも斯くのごとき規律は應分の價值を有すべし吾人が日常心的エネルギーを消費する上に應用するも幾分の効を奏すべく又單純なる心的現象に應用するも其の價值を顯すべし。されど斯くのごとき數學やうの單純なる規律が果して廣く彼の複雑深遠なる心的生活に適用せらるべきや否や甚だ疑はし。例へば疾病

的狀態を具へたる異様の心的現象又は美術上學術上の大天才のごとき吾人は如何にして之れに上の如き規律を適用すべきか。同時に廣く深く強く且速に考へ若しくは感ぜしアリストートル、カント、シェークスピア、ギョテ等の心をば吾人は如何にして之れを觀測すべきか。

されば版圖の廣狹、強弱、遲速は其の間互に深く關係するところ有りて雖もまた之れを物理的規律やうに數學的に表示すべきにあらざるなり。

意識の條件コンディション 意識の條件とは意識の因りて起るべき縁又は意識の因りて變化すべき縁をいふ即ち意識の因りて生起し若しくは變化する所以の要條をいふ。斯くのごとき意識の條件二種あり心理的と生理的とこれなり一は意識の現象其のものにして意識の條件となるものをいひ一は生理的變化にして意識の條件となるものをいふ。而して上來說明せし意識の廣さ、強さ、速度等は皆これ意識の因りて變化すべき條件なればこゝには單に生理的條件のみを略説すべし。

およそ意識は生理上の變化即ち身軀の或狀態を條件として生起し若しくは變化するものなり生理的變化といふ條件なくば意識は生起し若しくは變化すること

なかるべし。だゞし意識の現象と生理上の變化との間には元來如何なる關係あるか即ち心身の關係如何といふことは哲學上の問題にして現象其のものを記述し且説明する心理學の充分に説明し得るところにあらず。吾人はたゞ意識は生理的状態を條件として生起し若しくは變化すとのみ會すれば足れり。

生理的状態中特に意識の條件となるものは神経系統なり。神経系統は三種の機關より成る曰はく末端機關ペリネウロン曰はく接續神経系統アキソン曰はく中樞機關セントラルオージェンこれなり。末端機關は外界の刺激を受くるとを掌り中樞機關は意識の現象を起すことに與り接續神経系統は兩者の接續をなすを掌る。實驗に徴するに中樞機關たる腦が意識の條件となるには新鮮なる動脈血を供給せらるゝを要す此の供給中絶せらるゝ時は意識の現象また中絶するを見る。疾病其の他不意の事變によりて腦に供給せらるべき動脈血腐敗せんか意識の現象も亦多少錯亂すべし。意識の現象の活潑なる時は腦機關の作用も亦之れに應じて活潑なるを常とす。故に吾人は下のごとく言ふを得べし曰はく意識の強弱は神経作用の強弱に緣り神経作用の強弱は其の組織の不完に基くと。

今日泰西にて盛に行はるゝ生理的心理學は重に生理的條件を基として以て精密に意識の現象を計らんとするものなり。其の盛なる攻究は今日まで心理學に應分の裨益を與へざりしにあらす又今後如何ばかり大なる裨益を與ふべきか預知すべからず。而も生理學の進歩が深遠微妙なる意識を説盡し得べしとは信するを得ず或程度以上は物的説明をもて心的説明に換ふべきにあらざればなり。

第四章 所謂能力^{フニカルティ}

意識の現象は極めて複雑多様なり之れを科學的に記述し且説明せんとするには種々の觀察と種々の解剖とによりて先づ意識の現象を區分するを要す。即ち複雑なる現象に就きて其の類似のものと相異のものとをそれ〴〵探檢して之れを各種の部門に分類し遂に複雑なる現象の組成せらるゝ單純の元素に及ぶを要す。然るに斯く心的現象を區分することは之れを口にするは容易なれど實際誠に至難の業なるを感ぜずんばならず。蓋し物理學のごときは客觀的に存在する事物を分類するに過ぎざれば其の事比較的に容易なりと雖も心理學に至りては然らず自己の意識を觀察して之れによりて其の異同を類するの外に途なければなり。詳言すれば心理學に於てはたゞ我が意識を觀察して斯く〴〵の我が意識の状態

はまか〴〵の我が意識の状態に類似す又は類似せずといふを基としさて其の異同を類別するの外に途なきなり。心的現象の類別豈容易ならんや。

所謂能力論 古來心的現象を類別せんとして知らず識らず誤謬の説明に陥りし例少なからず其の著きものは彼の所謂能力論これなり。能力論とは種々なる意識の状態を取りて之れに各々特有の能力ありとなし之れによりて心理を説明し得たりとなすの説なり。例へば我れ今年今日見たる富士山を記憶すとせよ能力論者は之れを説明して曰はく我れには記憶といふ能力あり故に昨年今日見たる事物を今も尙意識に想浮ぶるを得と。又例へば我れに嫉妬といふ情ありとせよ能力論者は之れを説明して曰はく心には他を嫉妬する能力あり故に我れは此の情を起こすを得と。されば彼等は記憶、知覺、想像、推理等を皆殊別の能力となし單に此等の名目のみを以て心的現象を説明し得たりとせり。斯くのごとく心的現象を觀察して其の類似の状態に〴〵特有の能力ありとなし之れによりて心理を説明し得たりと思惟せる是れ所謂能力論なり。

されど斯くのごとき論は未だ充分に心的現象を類別し又之れを説明し得たりと

はいふべからず。蓋し心理學は單に意識には斯くくしかくの能力ありといふのみを以て足れりとせず如何にして其の如き心的作用のあるかを説明すべき學なればなり。換言すれば吾人が攻究すべきは意識には幾何の能力あるかといふにあらざして何故に又如何にして斯くのごとき意識の状態あるかといふにあればなり。前の例を取りて細説せんに我が意識に富士山を記憶すといふ作用あることは明らかなりされど件の事實は是れ意識の一状態にして密に他の種々なる状態と關係せり。即ち記憶といふことは意識の他の状態を離れて單獨に存立する一個の能力にあらざり意識の種々なる状態より起これる一状態これ記憶なり。故に記憶といふ心理を攻究せんとするには單に記憶といふ能力ありとのみにては充分ならず如何にして又何故に斯くのごとき能力あるかを説明せざるべからず。能力論は不完全なる分類をもて直に説明に代へたるものといふべし。されば所謂能力論は未だ以て心理の説明とすべからざるや明らかなり。此の能力論の缺點を指摘して心理に眞正の説明を與へんとするに至りしはやうやく近代のことなり。獨逸のヘルバルトが能力論を以て心理説明に無効なりとし其の

研究に生起法を採用するに至りしこと是れ在來の能力論を打破するに與つて大なる力ありし重因なり。さもあらばあれ能力論は如何に不完全なりとも之れがために全く其の功績までを埋没すべきにあらず。蓋し複雑なる意識の現象を觀察して之れに記憶といふ作用あり嫉妬といふ作用あり推理といふ作用ありとやうに不完全ながらも其の異同を分類して之れに一定の名稱を附せし功は没すべからず其の同類の意識の各状態を直に孤立せる能力と解せる點は誤謬なり而も斯く同類の状態を探索し出だせるの功は没すべからず。故に吾人は古來の習慣にしたがひて尙能力といふ語を用ふべしと吾人は之れを孤立せる特有作用の義に用ひずして意識の一状態の義に用ふることを忘れずんば可なり。能力分類の規則　しからば吾人は如何にして各種の能力を分類すべきか何等の規則によりて複雑なる現象を分類すべきか是れ困難なる問題なり。蓋し眞實に心的現象の複雑多様なるを見ば吾人は先づ如何にして之れを分類すべきかに就きて頗る惑はざるを得ざればなり。先づ單純なる心的現象を分類せんとすとせよ例へば机に觸るれば滑に平にして且堅き感あり氷に觸るれば冷にして且堅

き感あり樹木に接しては青紅の感あり食物に接しては甘味不甘味の感あり。此の場合に吾人は何等の規則によりて此等單純なる現象を分類すべきか。假に此等單純なる現象の媒なる機官と其の機官を刺激すべき物體とをもて此等を分類すとせんか。しかるに所謂物の味には嗅感、筋肉感、温度、接觸等種々の感の其中に混交せるもの多し。しからは吾人は如何にして之れを分類すべきか頗る感はざるを得ざるべし。又堅し、冷し、青色なり、紅色なりなどいふ諸の感をば如何にして之れを分類すべきか。何が故に堅しといふ感と冷なりといふ感とは類似し若しくは相違せるか如何なる理由によりて青色といふ感と紅色といふ感とを類似し若しくは相違せりといふべきか。又同じ紅色といふ感の中にも櫻花の紅あり梅花の紅あり桃花の紅あり此等をば何等の規律によりて類似せり或は相違せりといふべきか。吾人は頗る惑はざるを得ざるべし。若し夫れ更に複雑なる現象に就きて之れが分類の規則如何と尋ねる時は其の困難一層大なるを感ずべし。例へば我が記憶に留まれる心象は如何なる點に於て之れを受けし當時の心象に類似し若しくは相違せるか又考ふることゝ想像することゝは如何なる點に於て

類似し若しくは相違せるか又想像することゝ記憶することゝは如何なる點に於て類似し若しくは相違せるか。此等の疑問に答へんは頗る難事なるべし。一言もて之れを蔽へば心的現象を類別するの規則如何とは頗る困難なる問題なりと評すべし。されど困難なる問題は必しも解きがたき問題にあらず吾人は心的現象類別の規則を下のごとく假定するを得べし。

第一單純なる心的現象の類似、又は相違はたゞ直接吾人が自己の意識を觀察して以て之れを知るべきのみ。單に甘しといふ感のみに就きていふも甘しとは如何なることぞと問はれれば何人も之れに答ふる能はざるへしたゞ我が意識にて甘しとは斯く／＼にして甘からず、とは志か／＼と自識するの外に途なし。盲者にむかひて色の異同を説く能はず聾者にむかひて音の異同を示す能はず。各人はたゞ自己の意識に徴して其の現象の或は類似し或は相違せることを自識すべきのみ。

第二單純なる現象に就きては大體の上にて顯著なる特質の同じきものは之れを同類に編入し然らざるものは他の種類に編入すべし。詳言すれば或顯著なる特

質の同じきものは或他の顯著なる特質の同じきものより區別して之れを同種類に編入すべし。例へば各種の色の感は皆眼球に關係せる筋肉感接觸感等に伴はれ又は物躰の表面に置かるゝと等に於いて相同し故に皆同一種類に編入せらるゝを得。此の他各種の音に就きても又は他の各種の感に就きても皆之れに同じ大躰の上にて最も顯著なる特質を同うするものは皆同一種類に編入し然らざるものは他の種類に編入す。

第三既に單純なる現象の類別を終らば之れより發達せる複雑の現象を類別することば比較的容易ならん。蓋し諸の單純なる現象の結合せるさまに就きて其の顯著なる特質の互に同じきものは之れを同類に編入し然らざるものは之れを他の種類に編入するを得べければなり。語を換へて言へば發達せる意識の現象は其の複雑なること固より極まりなかるべし而も吾人は其を支配する法則(單純なる元素より複雑なる現象の出で來たる法則)は比較的僅少なを認めずばあらず。隨うて此等の法則によりて成れる所謂能力(即ち複雑なる現象も亦比較的に類別し易きものなるを知るべし)。

意識の現象の三區分 スライフオホトシロシロ 現象類別の結果吾人は三區分といふことに達す。三區分とは意識を大別して智、情、意の三種となすをいふ。此の三元素は意識を構成せる根本事實にして一切の心的現象は皆此の三元素の種々なる作用に外ならずとす。詳言すれば智は情と全く異なり情は又意と全く異なり三元素互に全く其の質を異にせり故に彼れと此れとを混同すべきにあらず。智は如何に之れを分析すとも常に情にして意となることなし。吾人は意を以て智を解く能はず智を以て情を解く能はず情を以て意を解く能はず三者は到底其の以上に分析すべからざる根本元素なり。然りと雖もこゝに注意すべきは件の三能力は所謂能力論者の説くがごとく互に孤立して存在せるものにあらざることを是れなり。語を換へて言へば智、情、意は互に相關係せるものにして偏へに智、偏へに情、偏へに意のみといふがごとき現象なし。智の在るところには必ず多少の情あり意あり情の在るところには必ず多少の智あり意あり又意の在るところには必ず多少の智あり情あり。たゞ其の重なるものに就きて之れを智なり情なりといふに過ぎず偏へに智(又は情又は意)のみ

といふがごとき現象なしと知るべし。故に智情意は意識の三面ともいふべし智を離れて情なく情を離れて意なし。これを意識の三區分といふ。

第五章 原初の注意力 (Primary Attention)

近代に至るまで多數の心理學者は注意力アテンションを會してさながら一種特別の能力の如く稱するを常としき。これは必しも理由なきとにあらざ日常の實驗之れを證する所あるが如し。蓋し注意力の大小は顯著なる影響を心的現象に與ふ吾人が専ら一事物に心的エネルギーを注ぎて其の間他の事物に留意せざるやうなす時は如何に意識の版圖に大なる影響を及ぼすぞ又これは實際吾人に如何に必要なとなるぞ。單に所動的にのみ事物を見聞し受收すると能動的に之れを見聞し受收するとは其の差甚だ大人の常に大なる注意力を尊ぶもの故なからんや。而して斯く殊更に意を用ひ力を盡して或事物に心的エネルギーを注ぐの力は一種特別の能力と稱する必しも不可ならず。たゞし此の場合に注意すべきは斯くのごとき能力は最初より吾人に具はりたるにあらずして漸々吾人が涵養したる能力なること是れなり。換言すれば特に意を用ひ力を盡して或事物に注意するは頗る

發達せる複雑の能力にして初より吾人に具はれるにあらず智情意の發達と共に漸々増進すべき複雑の能力なること是れなり。これは斯くの如き注意力の働くごとき意識の状態を見れば明らかなり。吾人は一種努力の感を持って隨意に自己が注意せんとする事物に心的エネルギー(心力)を注ぐ而して意識の状態は之れがために其の版圖、強弱、遲速等に變化を受く。例へば今我れは故郷の夢に恍惚として漠然たる感想に満たされ居る時醜然一切の夢想を拂拭して讀書に専念せんと努むることあり。而も尙夢想我れを追ふ時は我れは更に努力の感を強うし勇氣と鼓して以て書に對す此に於てか前に見えざりし文字は明らかに見え前に會しがたかりし意義は明瞭に理會せらるゝに至る。斯くのごとき隨意なる注意力アテンションは焉ぞ發達せる智情意の作用ならざるを得んや其のあまたいひ鍛鍊せられたる能力なるは明らかなり。

上に記せるごとき發達せる隨意的注意力は之れを一種特別の能力と稱すること不可なしと雖も之れと同時に殊に注意すべきものあり他なし斯くのごとき隨意的注意力の素となるもの、即ち注意力の最初の状態プライマリ、アテンションこれなり。そも

原初の注意力は其の發達せるものゝ如く隨意的ならず而もおよそ意識の現象の始めて發生するに當たりては之れに伴うて必ず多少の注意力なかるべからず。彼の嬰兒が外界の事物を其の意識に上ぼするや之れに隨意的な注意作用ありとはいふべからざるも兎に角外物を意識するだけの注意力は無かるべからず。而して斯くのごとき注意力は之れを不隨意的な注意と稱するも不可なし。若し最初より件の不隨意的な注意力なからんか意識の現象は全く起る能はざるべし蓋し不隨意的な注意力は意識の現象を起さしむる根本作用即ち精神の受容力に外ならざればなり。不隨意的な注意力はたゞに意識發生の最初の條件なるのみならず亦實に一切の心的生活を發達せしむる所以の要件なり。吾人は常に多少事物に注意す若し全く注意すといふこと無からんか何等の意識も起らざるべし意識の漸々發達し行くは其の間常に多少の注意作用あればなり。通常吾人は或徒を指して彼れは課業に注意せずといふ。げに彼れは課業には注意せず而も其の課業に注意せざるは是れ即ち大に他の事物例へば遊戲に注意する所以なり。

故に如何なる意識の現象も其の中に注意作用なくしては些も發達するを得ず。物に注意す故に種々なる意識の現象起る全く注意作用なきは全く心的活動なきなり全く心的活動なきは全く意識の現象なきなり。されば原初の注意力は諸の能力の發達、一切の心的生活の生長に絶えず伴ふべき必須的條件なりといふべし。故に吾人は原初の注意力を稱して一切の心的生活の最も普通なる状態とす。

斯くのごとき原初の注意力は心理研究の最初に注意せらるべきものなるに近代に至るまで多数の心理學者の之れに注意せざりしは異むべし。英國にては博士ワード教授サリ一等早く之れに注意しワードの如きは之れを印象を受容すべき活力と名けたり。ロック、ヒューム、ハートレー、スペンサル等の諸家が此の點に就きて教授シエームス(米國現今の心理學者)に攻撃せられしも已むを得ず。原初の注意力は心的生活の最初の状態なればなり。

注意力の生理的條件 注意力の生理的條件は一般の心的活動の生理的條件に同じ。即ち神經組織の完備せること、大動脈血の適當なる供給、所謂心的神經細胞並ひに神經纖維(心的活動に關係ある神經細胞並ひに纖維)の微分子活動してボテ

ンシアル、エチルギーがカイネチック、エチルギーに變すること、此等は皆注意力の因りて働く條件なり。而して原初の注意力の生理的條件と一般の心的生活の生理的條件と同じきは是れやがて原初の注意力は一切の心的生活の最も普通なる状態たるの適證なり。更に詳しく注意力の生理的條件を記さんに大動脈血の循環を或局部に集注すること即ち特に腦の或一面の神經細胞と神經纖維とを働かしめて割合に他の部面を働かしめざること、是れ其の要件なり。他語をもて言へば特に神經作用の或一状態にのみ専らエチルギーを消費せしめ随うて神經作用の他の状態には多くのエチルギーを消費せしめざること、是れ其の要件なり。猶注意力は意識の或一状態にのみ特に心的エチルギーを集注するところにある如く其の生理的條件も亦之れに應じてエチルギーを特に腦の或一局部のみに消費することにあるなり。たゞし吾人が一時に意識の多數の状態に注意せんとする時は其の生理的條件はエチルギーを廣く腦の多くの局面に消費せしむるにあること勿論なり。

注意力の尙他の條件は筋肉の組織に關係す。吾人が特に或事物に注意せんとするや必ず先づ其の場合に關係ある筋肉を働かしむ。例へば或事物を凝視せんとする時は先づ全軀の筋肉を確固ならしめ殊に眼球に屬する筋肉を張りつめて之れに對するを常とす。是れ或心理學者が心理學の研究は先づ筋肉の生理を以て始めざるべからずとさへ唱へし所以なり。注意力と筋肉と關係あることは吾人が事物に注意する際著く呼吸に變化を與ふるにて殊に明らかなり。我が好める書物に熱心注意せる時のごとき吾人は心臟の鼓動激しきたり數多たび大息して然る後之れに對せざるを得ざるなり。

注意力の變化及び分配 エリエンション、ディストリビューション 日常の經驗によれば吾人は長く同一の力を以て意識の一事物又は一状態にのみ注意する能はず必や注意の力或は増し或は減ずるを常とす。或は暫時の間は能く同一の力を以て同一の事物に注意し得べしと雖も心的エチルギーは絶えず上下に動搖するが故に其の注意せらるゝ現象もあつから或は強大となり或は薄弱とならざるを得ず。之れを注意力の變化といふ。吾人は如何に同一の力を以て同一の事物に注意せんとするも暫くにして變化の來たるが故に到底同一調子を以て之れに對するを得ず。例へば懷中時計を耳に

當て、其の音を聞くに或は高く或は低く其の高低殆ど一定せざるものあり是れ音其のものゝ高低するよりはむしろ注意力の高下するに基けり。老練なる天文學者が天躰の觀測を誤るがときは亦注意力の變化するに基くこと多し。されば一上一下一高一低は心的エネルギー活動の特質なり知るべし心的生活にリズム(高低の律)ありといふものは實にこゝに基けるを。

注意力の變化と密接の關係あるは其の分配なり。専ら或事物に心的エネルギーを消費すれば同時に他の事物には之れを消費するを得ず。意識の或一状態に注意力を分配すること多ければ其の他の状態は注意力の之れに及ぶこと少きため吾人に意識せられざるものとなる。吾人は同時に意識の一切の状態に等分の注意力を分配する能はず必ず其の中の二三を撰みて重に之れに注意力を分配す。心性に撰擇の力あるはこゝに基けりといふべし。然り而して注意力の分配は隨意的と不隨意的とによりて其の趣頗る異なれり。吾人が隨意に鍛鍊せられたる注意力を用ふる時は割合に長き間一事物にのみ注意するを得べしと雖も隨意的注意力を用ひざる時は今は彼の一事に注意し居れるにやがて又此の一事に注意

を轉ずるに至る其の分配せらるゝ意識の状態絶えず變化するを常とす。是れ隨意的注意力は發達し鍛鍊せられたるものなれど不隨意的注意力(即ち原初の注意力)は一切の心的生活に必然伴ふべきものなるとの證なり。

注意力と智情意との關係　注意力の變化と其の分配との間には互に離るべからざるの關係あり。注意力變化して智又は情又は意の一面強めらるれば其の強められたる一面は是れ注意力の分配せられたる處なり。之れに反して注意力の分配せられたる處は即ち注意力の變化によりて智又は情又は意の強められたる一面なり。故に變化と分配とを合して言へば、原初の注意力は意識の一版圖に於ける様々の方面元素事物に消費せらるゝ心的エネルギーの様々に相關係したる程度に於いて分配せられたるものなり。而して意識の一切は智情意の三方面に分かつを得るが故に注意力は智情意の各方面に種々の關係あり注意力の多小は智情意の各元素に影響し又智情意の種々なる變化は注意力に種々なる影響を與ふ。下に之れを分説せん。

注意力と智　注意力強ければ感覺印象概念等一層強く且明瞭となり感覺印象

概念等強く且明瞭なる時は注意力を引くことも亦一層大なり。是れ殆ど説明を俟たずして明らかなる事なり日常の實驗之れを證す。例へば注意力を用ふると大なれば一時想起こそ能はざりし人の姓名をも容易に想起こそを得べく又強く我が念せる事柄は注意を引くことも亦大なるが如し。此の種の注意力の中に預期の注意力プレパトリアンシヤンと稱せられたるものあり。例へば對手によりて投げられたる球は將に我が頭上に來たるべしと預期して之れに注意するがごとし。斯くのごとき預期の注意力は此の事に關係ある感覺又は念を一層明瞭にすべきことは明らかなり。さて注意力は斯くの如く智の元素に關係あるものなりとせば吾人は之れによりて緊要なる一眞理を發見するを得べし。其は他なし人智に解剖力と總合力との具はる所以これなり。前に言へるごとく注意力は其の變化によりて吾人に撰擇力を與ふ而して件の撰擇力を智力作用に配すればこゝに解剖作用成る。而して又注意力が吾人をして増し事物を解剖せしむる時は其の解剖せられたるもの混和してこゝに總合作用成る。以て注意力の智に對する密接の關係を知るべし。

注意力と情 情の元素の注意力に極めて密接の關係あることは常人と雖も之れを知る其の關係の密接なること注意力を情より引離ちては殆ど之れを考ふべからざる程なり。吾人が事物に注意するや大抵の場合に於ては一種の感情を交ふ。所謂興味インテレストの感これなり。吾人は或事物に興味を感じるが故に容易に之れに注意し或事物には興味を感じざるが故に之れに注意すること難し。夫れ百般の人事は殆ど皆興味を基として起る興味之感なくば注意力起りがたく注意力起こらずば複雑なる意識の現象も亦起こらざるべし。そも興味之感は人によりて異なり隨うて其の種類も亦甚だ多し。單に快感を覺ゆることのみが興味之源にあらず強く感情を刺激することが是れ興味之感の起る源なり。されば最初は却りて不快感を與ふる事柄なりとも敢て此の不快感なる事柄を破せんとするところに興味を覺ゆることあり。又其の事柄は假令非常の恐怖、嫌惡、反抗を與ふるとも激しく吾人の感情をだに激昂せしむるものは愉快なるもの愛憐すべきものと一般吾人に興味を與ふること多し。例へば小兒は最も恐怖すべき物に對してすら尙所謂こはい物見たさの感即ち興味之感を覺ゆるにあらずや。吾人は

恐怖すべきもの嫌悪すべき事柄に満ちたる小説を如何に熱心に繙讀するぞ暗瘡たる佛國革命の歴史すら吾人に最大の興味を興ふるにあらずや。

されば強く感情を刺激せらるゝ時は多少の興味を覚え又隨うて注意力の喚起せらるゝなり。故に注意力は感情の強さ感情の新奇なること、苦樂の調子其の他感情に伴ふ心的エネルギーの強弱等によりて變化するものといふべし。感情の新奇なるとは吾人が平生見慣れたる同一調子のものには興味を覺ゆること少くして成るべく見慣れざる新奇なるものに興味を感ずること深きをいふ。苦樂の調子によりて注意力變化すとは或は快感を興ふるものには深き注意力を及ぼし不快感を興ふるものには敢て之れに注意せざらんと努め或は不快感を興ふるものは注意して快感を興ふるものには故らに注意せざらんと努むるがごときは是れなり。又心的エネルギーによりて注意力變化すとはエネルギー強ければ注意力も亦之れに應じて強く又注意力を高めんとする時は心的エネルギーの増加するを謂ふ。要するに注意力と感情との極めて密接なるものなり。

注意力と意との關係は近代に至りて特に諸學者の着目するところとなれり。既に其の語の示すがごとく通常謂ふ注意とは意を注ぐの義、即ち注意力は意の一作用なりといふを得べし。故に心理學者の中には注意力を意の一作用として説明せんとする者あるなり。夫れ意には狹義に所謂意と廣義に所謂意との二あり。之れを狹義に解すれば隨意的に能動的に事物を撰擇して之れを決定するの心的活力なり。されど之れを廣義に解釋すれば一切の心的活力は皆之れを意なりともいふを得べし。然り而して注意力は廣義に所謂意の中に含まるゝは勿論狹義に所謂意の作用も亦注意力の中に含まれたることは明らかなり。故に特に注意力を意の中より取出だして其の關係を見んとするには狹義に所謂意の關係と廣義に所謂意の關係とを區別するを要す。

狹義に所謂意と注意力との關係如何と言はゞ能動的に事物を決定するの心的活力の變化にしたがひて注意力も亦變化し分配せらるゝといふを得べし。即ち或事物に力を入れ、或事物を決定し、或事物を獲んと努むるがごとき心的作用は皆意の活力即ち能動的に多少努力の感を具へて我れの活動する心的活力に基く。故に此の活力の大小又之れによりて變化せられたる意識の状態の變化にしたがひて

注意力の或は増減し高低し或は此の事物若しくは彼の事物に分配せらるべきは明らかなり。尙此等の關係は後に至りて明瞭なるべし。

心的生活の元素

第六章 感覺の性質及種類

元素の意義　心理の攻究には屢々「心的元素」といふ語を用ふ。されど心理學上所謂元素又は因子ファクトルの用義に就きては殊に注意すべきことあり。其は他にあらず心的生活は彼の物躰の如く實際其を構成する各元素に分かち得べきものにあらざること是れなり。心的生活は一なり其の中の種々なる因子は互に獨立して存在するものにあらず隨うて實際之れを其の各元素に分かち得べきにあらず。其の内容は如何に複雑なりとも一切の心的生活は常に一にして人爲をもて自在に之れを分割し得べきにあらざるなり。たゞし心理學上假に「元素」といふ語を用ふべき理由はこれ有り。蓋し心的生活は一なりと雖も其の内容は甚だ多様なり即ち智情意の三方面に屬せる内容は複雑多種を極む。而して意識の状態は件の内容の如何によりて變化す。故にその内容の種々の方面(即ちその全體を形つくる而も相離れざる局部)を假に分拆して之れを心的元素と稱するは、不可なし。吾人は此の元素の種々なる和合によりて意識の状態を測知し得べければなり。故に

心理學上所謂元素とは箇々別々に存在する因子の謂にあらずして一なる心的生活の内容をなせる殊別の局部をいふに外ならず。

吾人が自省して容易に發見する所の心的作用の殊別の局部は之れを必ずしも最も單純なる終極の元素とは云ふを得ず。たゞ試験法と觀察法との精巧となるに従ひてますます終極の元素に近きものをば發見するを得べし。例へば或試験と或注意とによりて未だ曾て分拆せざりし音を更に單純なる元素に分拆すといはんが如し。然り而も心理學上所謂元素は終極の元素にあらず蓋し終極の元素とは更に分つべからざる最も單純なる最終の元素なりされど所謂心的元素は斯くのごとき終極のものにあらずればなり。例へば通常青といふ色の感覺は最も單純なる元素と會せらるされど吾人は單に青色といふのみの感覺を想浮ぶるを得ず必や青き色をなせる或物若しくは青色の宿るべき多少の廣袤の此の感覺に伴はざるを得ず。全く青色のみの感覺といふがごときは便宜の爲め吾人が未か抽象し出だせる感覺にして實際斯くのごとき單一なる感覺有るにあらざるなり。又例へば通常味感は一の元素なりと會せらるされど所謂味ひの中には舌の感

覺あり鼻の感覺あり皮膚の感覺あり筋肉の感覺あり決して單一なるものにあらず。されば心理學上所謂元素は吾人が分析作用の極まる所吾人が認めて以て比較的單純なりとするもの、吾人が分析して最も單純なりと見做せるものに過ぎざるを知るべし。然り而して其の最も單純なりと稱せらるゝ元素も實際さる單純の元素が獨立して存在せるにあらず便宜のため多少複合せる元素の中よりさる單純の元素を抽象せるに過ぎずと知るべし。單に青色といふのみの感覺はたゞ之れを考ふるを得べきのみ實に孤立して存在する者にあらざるなり。

感覺の性質　心理學上所謂單純の元素は便宜のため假に抽象せるものなること上の如し。而して又此の元素は物理學上所謂元素の如く實體エンチテイを具へて別存せるものにあらざること亦上に説けるが如し。さて心的現象中上の如き意義にて所謂單純なる元素を感覺と名づく。更に分析する能はず又多くの他の元素より成れりど吾人の思惟する能はざるもの之れを稱して單純なる感覺といふ。吾人は如何に感覺を分析すとも竟に感覺ならざるものに分析し了する能はざるなり。然らば此の感覺の性質は如何。

感覺の性質を究むるに先だちて注意すべきこと二あり曰はく感覺は心的現象にして物的現象にあらざること曰はく感覺は心理學の範圍にて言へば心以外の他物の屬性にあらざること是れなり。外界より五官にはたらく刺激又は件の刺激の統合せられたるもの又は件の刺激に應じて活動する神経作用は物的作用にして感覺にあらざり。感覺は全く心的現象にして刺激は物的現象なり焉ぞ彼れと此れとを混すべけんや。或は末端機官によりて傳へられたるもの之れを感覺と稱する者あるも是れはた誤れり。末端機官によりて中樞神経に傳へられたるものは物的作用にして感覺は未だ知る時に妙に引起こさるゝ別種の心的現象なり。又例へばフアルクマン(獨逸の心理學者)の如きは感覺を會して外界の刺激に接して靈魂の發し出だせる情態となす。斯くいはんには靈魂と名くる實體の存在を許容せざるべからず。されど靈魂有否の論の如きは哲學の本領にして經驗的心理學の關せざる所なればこゝには感覺を會して意識の現象以上なる或實體の屬性とは見ざるべし。故にこゝには感覺を或は物的現象と會し或は意識以上の他物の屬性となすを排斥す。證する所感覺は嚴密に意識の現象の一分なることを忘るべからず。

斯くの如く感覺は心的現象なるが故に其の本質如何を知らんとせば直接若しくは間接に自己の意識を顧るの外に途なし。而して此の方法に二種あり一は感覺の起こる生理的條件に就きて間接に其の本質を知ると一は全く心的現象の範圍内のみにて其の本質を探ると是れなり。前なる方法によりて言へば感覺とは外界の刺激によりて官能の活動せられたる時に起こる一種特別の意識の状態なり。其の一種特別の状態の何たるかに至りては各自其の意識に問ふべし。次に後なる方法によりて言へば感覺とは依りて以て其の感ぜらるゝ物の性質の吾人に認めせらるべき底の意識の状態をいふ。故に感覺は全く我が心に屬する現象なり我れの意識に屬せる單純の現象なり。詳しく言へば末端機官は外界の刺激を接續機關に傳へ接續機關は之れを腦の神経中樞に傳ふ而して此の場合に起こる一種特別の單純なる心的現象は是れ即ち感覺なり。若し或は末端機官を缺き或は接續機關を缺き或は中樞神経を缺く時は生理的條件具はらざるが故に感覺は起こらず感覺は通常外界の刺激を俟ちて起こるが故に殊に所動的なりと稱せらる。

外界の刺激を俟ちて起こるの點より言へば感覺は所動的なりと雖も而も外界の刺激に應じて起こり得る力を具へたるの點より言へばまた之れを能動的アクティブともいふを得べし。如何に外界の刺激は強くとも若し之れに應じて心的現象の起こり得る力心に具はらば何等の感覺も起こらざるべし。故に感覺を或は偏に所動的といひ或は偏に能動的といふは非なり感覺には能動と所動との兩面ありと謂ふべきなり。

感覺の種類 通常感覺は其の依りて以て起こる生理的機關就中末端機關の種類によりて區別せらる。即ち耳、目、口、鼻、皮膚の五感又は聽、視、味、嗅、觸の各感これなり。されど此等の區別法は尙未だ充分ならず近世ますます生理的研究の進むにつれて尙別種の感覺あることを發見せり。即ち所謂皮膚の感の中には單に皮膚の感のみならず尙別種の感覺あり又身軀内部の諸構造によりても通常の區別法の認めざりし別種の感覺あるを發見せり。温度の感、筋肉の感、關節の感等これなり。故に今日の所にて感覺の依りて起こる生理的機關を以て之れを區別すれば感覺は耳、目、舌、鼻、皮膚、筋肉、關節、温度等の諸感となる。

感覺の區別法 およそ感覺を區別するに二の方法あり生理的區別法と心理的區別法と是れなり。生理的區別法は感覺の依りて起こる生理的條件の種類に従ひて區別す。即ち(第一)始めて外界の刺激を受くべき機關(所謂五官等)の種類(第二)五官によりて受けられたる刺激を腦の中樞機關に傳ふべき接續機關の種類(第三)接續機關によりて傳へられたる神經作用を受收し之れを取纏めて以て一定の感覺を起こさしむべき中樞機關の種類、此等三種の機關の種類に従ひて感覺の種類を分別す。次に心理的區別法は純粹に意識の範圍内にて感覺の種類を區別す即ち注意力の變化、分配等によりて其れ々々感覺の模様は異なり此の模様によりて感覺の種類を區別する之れを心理的區別法といふ。若し夫れ一定の生理的條件のもとには何故一定の感覺起こるか物的變化のもとには何故心的現象起こるかに至りては吾人科學的心理學者の知り得ざるところなり。即ち身心の關係如何といふが如きは哲學上の問題にして心的現象其のものを攻究する心理學の答ふる能はざる所なり。

以下先づ生理的區別法によりて感覺の各種類を分説せん。

嗅感 嗅感とは外界の空氣又は蒸發氣の如き氣体が鼻孔の上部なる粘膜を刺激するより起こる一種の意識をいふ。たゞし通常所謂嗅感は單に鼻の感のみならず其の中に觸感、筋肉感、軀機感(身軀内部の營養機關全體の與ふる感覺)等をも混せることを忘るべからず。又通常嗅感は他の感覺の如く其の種類を區別すること難しと稱せらる。例へば色の感は青、紅、白など區別せらるべきも臭は物を異にするによりて各異なるが故に之れを區別すること難しとす。近來或は物質の化學的分類法によりて物の臭を分類せんと試むる者ありされど未だ充分なる効を奏せず。蓋し嗅感は所謂智的なる所少き劣等の感覺なるが故に其の種類を分別することも亦困難なればなり。

味感 味感の依りて起こる末端機關は重に舌なり又屢、上顎の前部の之れが機關たることあり。概して味感は味はしるべき物質が唾液其の他の溶解液によりて多少溶解せられし後舌の末端を刺激するより起こる。舌の如何なる部分が如何なる味感を起こし又味はしるべき物の如何なる質が如何なる味感を起こさしむるかは頗る困難なる問題なり。又所謂味感の中には嗅感、觸感、筋肉感、軀機感等

の交はることをも忘るべからず。例へば飲酒家が口あたり宜き薄き杯にて酒を飲む時は其の味一層美なりなどいふは觸感の之れに混ざればなり。又味感は嗅感に比しては其の種類を分別するの困難少なけれど尙其の種類は頗る漠たり。通常吾人が區別する重なるものは甘、苦、鹹、酸等の四種なるがヴァント(獨逸の心理學者)は件の四種に亞爾加里性と金屬性との二種を加へて六種とせり。

聽感 聽感とは極微分子が振動して耳より聽神經を刺激する際に起こる一種の感覺をいふ。耳官は三部より成る外耳、中耳、内耳これなり。外耳と中耳とは極微分子の振動を取纏めて内耳に送り内耳は其の中に極めて精密なる機關の具はるありて外界の刺激を受收し之れを聽神經に傳ふ。又吾人は耳の外よりのみ音を聽かず軀内より直接に之れを聽くことあり例へば心臟の鼓動、欠伸をなしたる時の響、キナインを服したる際の鳴音、耳に指を附けたる際の響等これなり。又一切の音は諧音と噪音との二種に大別せらる音聲調和して快き感を與ふる之れを諧音といひ其の諧和せずして不快なる感を與ふるもの之れを噪音といふ。内耳なる前房が噪音の機關にしてコルチの機關(螺旋狀機關)が諧音の機關なりとは多

數の學者の唱ふる所なり。げにユルチの機關の精妙複雑なる構造は精微なる諧音を分析し總合するに堪へたり。されど果して兩音は斯くの如く別種の機關によりて起こさるゝものなりや否やは尙不明なり。吾人は諧音と噪音とは大體に於て區別せらるべきも兩者の間に截然たる區劃の立てがたきを主張する者なり。所謂諧音は單一の感覺にあらざして種々なる音の調和せるものなり而して吾人は此の中に音の高低(即ち音階)強弱並びに其の質の三様あるを見る。音質とは例へば同階の音にてもピアノの音と人聲と異なるが如く其の質の異なるをいふ。音の高低は空氣の振動の遲速に基く即ち波動の長くして遅きは其の音低く短くして速なるは其の音高し。而して此の振動に規律あれば諧音を起こし規律なき時は噪音を起こす。又音の高低は一定の音階に並列するを得。是れ聽感の分類が他の感覺の比して精確なる所以なり。

視感 眼球内の視神經を刺激することに依りて起こる感覺を視感といふ。目は水晶液、レンズ、眼孔、網膜等より成る。外界より來たる光線は種々の媒介物と種々の屈折作用とを経て網膜に集注しよりて一定の物象を成す。されど光線は瞳

の前面に達せる時直に視神經を刺激せず瞳の前面を通過して其の後面なる網膜に一定の變化を起こさしむる時特に視神經を刺激するものとす。さて視感には光の感覺と色の感覺との二種あり件の兩感覺は互に相混交するを以て全く色のみの感若しくは光のみの感を想浮ぶること難し。即ち各種の色は皆多少明暗の模様を帯び又明暗なる一切の光は一として多少青、紅、綠等の何等かの色を帯びざるはなし。故にたゞ人爲によりて若しくは便宜のため抽象して兩者の別を立つるのみ。其の生理的條件に至りても兩感全く異なれりとは見えす否瞳の各部分は常に此の兩感を起こさしむるものゝ如し。

色の種類は其の數甚だ多く且各種の色の關係甚だ奇異なるを以て之れを分類すること甚だ難し。音の場合にありては單位を定めて或は之れを並列し或は之れを分析し或は之れを總和するを得れど色に至りては全く異なり。吾人は如何なる色が單純のものにして各種の色の間には元來如何なる關係あるかを詳にせず故にまた之れを科學的に區別するを得ず。ヤング、ヘルムホルツ等は綠、紅、青の三色をもて最も單純なる根本色と唱へたり。即ち曰はく網膜には此の三種に應ず

べき三種の構造あり一切の他の色は皆此の三種の種々なる混和に基くと。されど今日の研究によれば此の説は精確なりといふべからずされば或は緑、紅、青、黄の四種を根本色と唱ふる者あり或は之れに黒と白とを加へて六種の根本色を立つる者あり要するに根本色の何なるかは尙不明なりとす。たゞ吾人は知る二の異なりたる色を混交する時は其の中間の色を得ることを、即ち一の色より他の色に眼を轉じ行く時は其の距離に應じて漸々其の中間色の度を異にすることを。されどまたこゝに奇異なる現象あり(第一例へば青より緑に緑より莖菜色に眼を轉ずるも紅色を感じ又黄と柑とより緑を経るも同じく紅色を感じるが如きことあり。(第二)或種類の二の色の光線結合する時は白色を呈す例へば緑の光線と紫の光線との結合の如し。吾人は未だ其の間に如何なる定理の存するかを詳にせず。要するに色の分類は音の分類の如く單純ならずと知るべし。

二の色が結合して白色を呈する時は一方の色は他方の色に對して、補充の色と稱せらる。其の何故に斯くの如き現象を呈するかは生理學上並びに心理學上尙不明なり。補充の色の對表は左の如し。

紫	……	綠
赤	……	青綠
柑	……	青
黄	……	濃青
黄綠	……	莖菜色

皮膚の感覺 皮膚の刺激に基きて起る感覺は種々あり又その或ものはその性質と起原とに於て殆ど究め難し。然れどもそが經驗の増進に與りて重きをなせるとは疑ふべからず。皮膚より起る感覺は其の種類甚だ多しと雖も其の中最も著きは壓抑の感と温度の感との二なり。此の兩感は共に皮膚に基き又一見皮膚の同一部分より起るが故に彼れと此とを混同視する者ありされど壓抑の感即ち觸感と温度の感とは全く異なれり一は圓滑なめらか又は粗雜ざら等の感にして一は暑さ又は冷さ等の感なり。生理的心理學の證する所によれば觸感と温度の感とは同一皮膚より起るも互に其の局部を異にし又各其の中樞神經作用をも異にせるが如し。此の研究に就きては尙不明なる所あれど兎に角兩感の全く相異なれることは事實なり。而して此等皮膚の感によりて物の精粗を判かち物の寒熱を辨し以て複雑なる知識の構成に資する所甚だ大なり。皮膚の感を缺ける者が完

全なる知識を具へざるは屢目撃する所なり。

觸感 觸感は皮膚の一端に外物の觸るゝ時或は強く或は弱く壓抑を感ずる是れなり。我れより能動的に強く外物を壓する時殊に強く此の感を意識す。通常吾人はさして此の感覺到注意せざるも其は重に我れに觸れたる外物に注意するが故のみ經驗の増進に關して此の感覺の重要なことは殆ど意外なるものなり。皮膚に幾多の定まれる微小の點ありてこゝに強く明らかなる觸感を覺す之れを名けて觸覺點ツェッセンアクトといふ。觸覺點は身軀の各部に見出だすを得べきも其の散布せられたる繁疎は相同じからず又その覺する觸感の敏捷の度も處によりて異なれり舌端若しくは指頭の如きは其の最も敏捷なるものなり。

温度の感 温度の感とは皮膚の刺激に基きて起こる熱冷の感なり。物理學によれば熱冷は性質上異なるにあらざ同一運動の度量の差に外ならずとなす。

されど生理學及び心理學に於ては熱冷は全く相異なるものとなす。即ち生理學は皮膚中の熱さを感ずる部分と冷さを感ずる部分とは全たく異なるを證しヒート・スポット熱感の點は冷を感ずることなくコールド・スポット冷感の點は熱を感ずること無しと説く。又意識

は嚴密に熱冷の兩感を區別して其の質は全く異なれりとなす。素より同一物を身軀の諸部に觸れしむるに此の部分には氷の如く感ずれど彼の部分には唯冷しと感ずるに留まるとあり。こは身軀の諸部によりて熱冷を感ずるの力異なるに基く。又冷熱の度を檢して終に零點即ち何等の温度をも感ぜざるの點を見出だすとあり。こは唯刺激の度弱きが故に温度の感の起こらざるのみ。冷熱兩感の同一性を證するに足らず。又エーベル等の主張する所によれば温度の上る時には熱さを感じ其の下たる時には冷さを感ずと。例へば華氏五十五度の水に接したる後六十五度の水に接すれば暖さを感ずべしされど七十五度の後に六十五度に接すれば冷さを感ずるが如しと。されど或病人の如きは其の身軀些も冷さを感ずること無くして尙も熱さを感ずることあり。故に冷熱の兩感は全く異なれりと言はざるを得ず。

筋肉感 筋肉感とは筋肉によりて起こさるゝ一種の感覺なり。筋肉感に關しては種々の異説あり或は筋肉組織に起こる感覺を心的生活の根本要素と解する學者あり或は今尙筋肉感と云ふが如きものなしと考ふる學者もあり。案するに

筋肉感は他の諸感と混交せり即ち皮膚の感又は關節の感等と密に相混交せり故に吾人は特に筋肉感のみを意識すると難し。されど之れが爲に筋肉より起こる感覺なしとは言ふべからず。生理學上より見るも特に筋肉の感を起こさしむべき感覺神經ありと云ふことは殆ど疑を容るべからず。又心理上より言へば自省は明らかに筋肉感の存在を證す。試に指端を強く或外物に觸れしめよ手腕の筋肉より始まりて全身の筋肉に深く且強き感覺を起こすべし。又病理的研究によるに觸感並びに關節の感を缺ける者だに尙筋肉の感を感じるとあり。皆是れ筋肉の存在を證するものなり。又我れ我が體を知るには筋肉の感を基となす筋肉によりて一種の深く且廣がれる感を感じゆるにあらざれば我が肉體を知るべからず。發達せる自我の感の如きは大に筋肉感に基けりと言はざるを得ず。筋肉感の種類如何は甚だ困難なる問題なり。筋肉の運動の強弱によりて様々な種類の感を感じゆるが如しと雖も筋肉感は常に觸感並びに關節感等に伴はるゝが故に其の種々の類と見ゆるものも實は他の感覺の混交物なるか知るべからず。たゞ極めて大體の上にて筋肉感の種別を語るを得るのみ。而して筋肉の中最も

差別力に富めるは眼球を動かす筋肉なるべし。

關節感 關節感とは關節によりて起こさるゝ一種の感覺なり。特に斯くの如き感覺を起こさしむべき神經組織ありと知らる。我が身軀の位置又は運動等を意識するは此の感覺に基けり故にこれは觸感又は筋肉感等と共に吾人が心的生活の發達に資する所大なるものなり。此の感覺も亦常に筋肉感等と混交するが故に通常之れに注意すること少なしされど之れが爲に此の感覺の重要なことを忘るべからず。

以上の外別にオルガニツクセンション「軀機感」といふものを説く心理學者あり身軀内部の營養機關(心臓肺等)全體に基きて起こる漠然たる而も深く強き一種の感覺をいふ。斯くの如き感覺の有ることは明らかならざれば之れを以上列舉せる諸感覺以外のものと言ふは不可なり。所謂軀機感は筋肉感、觸感、溫度の感、關節感等の混交湊合して成れる複雜の感なれば之れを特種の感覺として數へんは不可なり。此の外また飢渴の感、男女の性慾の感、其の他吐氣の感等を立つる者あれど皆以上の諸感覺の變態と見て可なるべし之れを獨立の特殊感となさんば非なり。

以上の諸感覺を能動的差別力の度に應じて配列すれば下の如し。

- 第一類 視感 觸感(能動的)
- 第二類 味感 嗅感 筋肉感
- 第三類 聽感 温度の感 關節感 觸感(所動的)

第一類なるは自在に其の機關を動かして種々の感を判断し差別するを得べく第二類に至りては多少所動的となり第三類なるは其の機を左右すること殆ど無きものなり。

第七章 感覺の質及量

單純なる感覺に質と量との具はれることは明らかなり。通常吾人は如何やうに感じ又如何ほどに感ずなどいふ是れ感覺の質と量とを指せる語なり。甘味は酸味と質を異にし音階の2は5よりも其の量少なし之れを感覺の質及び量といふ。そもく感覺の質と量とは互に如何なる關係あるか。サリ一のいふが如く質と量とは全く異別のものなりとするも其の間に緻密の關係は無きか。吾人の經驗によれば感覺の質と量とは互に離るべからざる關係あり質の變化は量に影響し

量の變化は質に影響するが如し。故に此の間の關係を明らかにすること緊要なり。

感覺の質を攻究すといふとも徒に其の種類を列舉せんは益なし。たゞ如何なる條件に基き又如何なる法則に基たがひて感覺は起こり且繼續し且消滅するかを究むるを要す。之れと同じく感覺の量を攻究すといふとも徒に其の強弱の度を臆列せんは益なし。唯其の強弱の度の變化する普通の條件と法則とを知れば足らん。既に質と量とに關する條件と法則とを攻究し終らば次には兩者の關係を明らかにするを要す。

感覺の質を定むる條件 感覺の種類は多く其の質はた無量なれど一切の感覺と一切の種類とに通じて其の質を定むる重要な條件は下の如し。

第一 感覺の質は刺激を受くべき生理的機關の特質によりて變化す。例へば盲者の視感を缺き聾者の聽感を缺くが如きは皆其の機關の特質に基けること説明を要せず。多少色に盲なる者あり多少音に聾なる者あり多少味嗅の感に不具なる者あり多少觸感筋肉感を缺ける者あり此等は皆感覺を起こすべき機關の不

具なるに基けり。故に感覺は各個人の特質即ち各個人の末端機關の特質と中樞機關の特質とに従ひて其の質を異にすといふべし。而して此等特質は或は生來の遺傳に基き或は周圍の境遇に基く故に全く之れを變更すること難しと雖も適當なる教育の方法に頼る時は多少之れを變更するを得べし。例へば色盲者の中には赤に盲なる者青色(又堇菜花色)に盲なる者最も多し此等は眼球の不具なるに基くが故に充分に之れを治癒せんこと難しと雖も適當なる習練は多少の効力を奏すること無きにあらず。

第二 感覺の質は刺激を受くべき機關の各部の特質によりて變化す。蓋し各機關は常人の思惟する如く單純なるものにあらず種々なる各部分相合して一の機關を成す。故に人によりて其の各部分の構造異なれば亦感覺の質も異なり。例へば目は内部と中部と外部とに分かるゝとせば或人は内部の構成に或特質を具へ又或人は中部の構成に或相違を具ふ隨うて其の視感の質は各々互に相異なるべきや明らかなり。

第三 新なる刺激を受くるに當りて機關の前の状態又其の隣接せる部分の状

態は感覺の質に影響す。換言すれば末端機關並びに中樞機關は絶えず種々の状態に活動す故に新に刺激を受くべき前の時の機關の状態によりて感覺の質も亦變化す。元來意識の各現象は互に相關係して存在す前の意識の状態は後の意識の状態に影響し今の意識の状態は前の意識の状態の影響を受く。全く前後左右の各状態を別にしては一状態だに考ふべからず。生理的機關も亦斯くの如し其の間に嚴然たる關係の法則あり機關の孰れの状態も皆其の前後左右の状態に關係す。末端機關の細分子が絶えず種々の状態に活動するは勿論中樞機關に至りては殊に甚しく時々刻々に活動して靜止することなし。故に或一の新なる刺激を受くるや其の前の機關の状態は必ず其の新に起こるべき感覺に影響す是れ其の質を變化する所以なり。充分に各感覺の質を説明せんと思せば必ず生理上並びに心理上其の前と其の當時との感覺の質を會せざるべからず。

二三の例を擧げんにレモン水の酸味を口にせる後砂糖を味へば全く甘味を失ふが如き又は甚しき不諧音を聞ける後の耳には通常の不諧音も諧音と聞こゆるが如き皆是れ前の感覺の影響の結果なり。視感に至りては此の現象殊に著し。例

へば光輝ある物を凝視せる後眼を閉づればその光輝ある象暫く眼前に留まる之れを積極的遺象ポジティブ・イメージと名づくこれは網膜の惰性に基くと思はる。かゝる白色の遺象を凝視すればこれは忽ち緑青色と變じ更に濃青色と變じ漸次萱菜花色又は薔薇花色と變ずるを見んこれを消極的遺象ネガティブ・イメージと云ふこれは網膜の疲勞に基ける現象なりと思はる。又黒色の傍に白色を視る時は白は愈々白に黒は愈々黒に見ゆること皆人の知る所なり之れを對照に基ける現象といふ。すべて此等惰性疲勞對照に基ける現象は皆網膜の前の状態又は隣接せる他部分の状態の影響を受けて起るものなり。

第四 感覺の質は刺激物の質に應じて變化す。こは説明を俟たずして明らかならん刺激物の質異なれば感覺の質も亦異なるべきは勿論なればなり。心理致究上便宜のため通常刺激物を大別して二となす曰はく器械的刺激曰はく化學的刺激これなり。聽感と觸感とは器械的刺激に基き視感嗅感味感等は化學的刺激に基くと會せらる。たゞし聽感と觸感とは器械的刺激に基くといふとも之れに伴ひて末端機關には種々の化學的變化の起ることを忘るべからず。要するに

「感覺の特質は末端機關を興奮せしむる分子的變化の種類と多寡とによりて異なるべし。」

第五 感覺の質は刺激が機關に働きて一定の感覺を生ぜしむるに至るまでの時間によりて異なる。總じて機關は前の活動の惰性を具ふるが故に新なる刺激を受くるも直に感覺を生ぜしむる能はず必や多少の時間を費やして後に一定の感覺を起さしむ。一定の時間の後にあらずば末端機關は刺激を受くること難く中樞機關に至りては其の組織の複雑なるだけに一層長き時間を要す。如何に駿速に意識に現れたりと見ゆる感覺も實は皆生長し發達せるものなり。斯くの如く感覺は或一定の時間を経て起るものなれば充分の時間を費やして起れるものと不充分の時間を費やして起れるものとは其の質おのづから異なり。例へば不圖物を見たる時の感覺と充分に之れを凝視せる時の感覺とはおのづから其の質を異にするが如し。

第六 刺激の強弱は感覺の質を變化す。量は質と異なりと雖も量の多少は必ず質に變化を與ふ。蓋し刺激の力強き時は常に當の機關に屬する神經を衝動す

るのみならず廣く其の他の神經組織をも衝動す。例へば強き光、高き聲、激しき壓抑等は皆廣く末端機關と中樞機關との分子的震動を波及せしむる場合には種々の震動に應じて種々の新なる感覺を起さしむるや必然なり。假令其の大體の質を變化することなきも他の元素の混交し來たるがために多少其の質を變化すべきや明らかなり。故に量の變化は質に影響なしとは言ふべからず。

感覺の量　　感覺の量又は強度とは感覺を起す所以の心的エネルギーの強弱をいふ謂は、感覺の意識に出現するの度なり。通常吾人は「強く感ぜり又は弱く感ぜりなど言ひ又大に或は少しく感ぜりなどいふ皆これ感覺の量を計算するの語なり。感覺の量を漠然強弱大小などいふ語にて示さんは容易なりと雖も之れに科學的計算を與へんは甚だ困難なるべし。心的現象の複雑にして精微なるは到底物的現象の比にあらず例へば吾人は如何にして此の感覺は彼の感覺に五十八倍し彼の感覺は此の感覺より十二倍弱しなど計算するを得べきか。妄に之れを物質的に計算せんとする時は終には笑ふべき結果を來たさるを得ざるべし。

近世精神的物理學起るに及びて學者争うて感覺の量を計算せんとし或は心的

現象を悉皆數理的に計算し得べしなど唱ふる者有り。されど之れに反して一方の學者は心的現象には到底數理的計算を與ふべからずと主張す。全く之れを計算する能はずと言ふは非なるべけれど亦一切の心的現象を悉皆計算し得べしなど言ふは更に非ならん。故に感覺の量は多少之れを計算し得べしと雖も其の精密なることは今日到底望むべからず。

感覺の量の計算法　　感覺の量を計算するには二の緊要なる事あり。(第一)量の定限を見出だすこと即ち一感覺の最高度と最低度とを見出だして其の間の變化の法則を立つること、尙換言すれば感覺の最少量と最多量とを檢出して其の間の變化を説明すること。(第二)感覺量の大小と外界なる刺激力の大小との關係に就きて一定の法則を立つること是れなり。而して此等の事を決定するには種々の試験を要す然るに此の試験には種々の困難あり。其の重なるものを擧ぐれば計算の基となるべき單位を定むるの困難、一機關に刺激を施すの際試験せんとする當の感覺の外に他の感覺の起り來たるを拒くの困難、其他試験の結果を精密に計算するの困難等これなり。且や多數の感覺の中には之れが量を計算するに

甚だ困難なるものあり。例へば觸感と筋肉感とは稍、精密に計算し得べきも視感に至りては精細に試験せんこと難く又味感、嗅感、温度の感等に至りては更に難かるべし。况や計算する者と計算せらるゝ者と共に同一人なるに於てをや。

感覺の最多量と最少量との間を感覺量の範圍といふ。感覺量の範圍は感覺の種類によりて異なり又人により處により時によりて頗る異なり必しも一定せず唯最も便利なる状態を選び最も精巧なる試験法によりて之れを計算するに過ぎず。而して最少量を計算するには種々の方法あれど重なるは二なり。第一法は當の機關に薄弱なる刺激を與へさて其の刺激力を漸々に薄弱ならしめて終に感覺の消滅するに至る時の最少量に注意することなり。次に第二法は前の例に何等の感覺をも生ぜざるほどの微弱なる刺激を施し漸次之れを強めて始めて最も微なる感覺を覺えたる時に注意することなり。例へば額の上に最小の觸感を覺ゆるには一グラムの千分の四の重さを置くを要し眼球を動かす筋肉の收縮すること一ミリメートルの万分の六に及べば件の收縮を感ずるを得又一ミリグラムの重さのキルクの球は一ミリメートルの高さより落して始めて其の音を聞くを得と

いふが如きは皆試験によりて略ぼ知られたる感覺の最少量なり。たゞし最少量の刺激を施す時にも身軀の各機關は絶えず活動して當の機關の試験を妨ぐるの困難あり。最多量の感覺に至りては殆ど之れを計算するに途なし過大なる刺激を加ふれば苦痛のため我れ我が感覺を明らかに意識する能はざればなり。

感覺量と刺激量との關係　感覺の強弱と刺激の強弱との間には如何なる關係あるか。ゴッペル、フェヒテル等は此の間に一定の關係ありとなして其の關係を定むべき法則を立てたり之れをゴッペルの法則又はフェヒテルの法則といふ。ゴッペルが法則の要旨は下の如し。曰はく感覺量が算術的比例に増加する場合には刺激量は幾何學的比例に増加せざるべからずと。即ち刺激量と感覺量との關係は不規律不定なるものにあらずして確定不變に規律を具ふ故に之れを數學的比例に計算し得べしと。其の感覺量を算術的比例に増加するには刺激量を幾何學的比例に増加せざるべからずと言ふは倍數の刺激量を施したるのみにては必しも感覺量を倍數に増加する能はず一層強き刺激量を増加するにあらずば感覺量を増加する能はざればなり。例へば1の感覺はAといふ刺激によりて起こりたりと

も更に之れにAの刺激を増加したりとて2の感覺を起す能はず之れより一層強き刺激を興ふるにあらざば2の感覺量を起す能はざるなり。即ち刺激量を幾何學的比例に増加せずば感覺量を増加する能はざるなり。要するに感覺量と刺激量との關係を數學的に計算し得べしと唱へたる是れ、ゴッヘル法則の世に知らるゝ所以なり。

フェヒテル等はゴッヘルの精神を襲うて更に上の法則を完成せんと務めたり。蓋しゴッヘルの法則を應用するには先づ計算の單位となるべきものを定めざるべからず單位なくしては數學的計算を爲すべからざればなり。フェヒテル等は下の如き方法によりて單位を定め以て悉皆の感覺量を計算せんとしたり。其の法先づ二の同質の感覺に就きて兩々相比し兩者の量の最も少なき差を見出だして之れを單位となすにあり。換言すれば二の感覺量に就きて最も少なしと觀察せられたる差を見出だして之れを計算の尺度となすなり。此の最も少なしと觀察せられたる差を見出だすには種々の試験法あり又此の最少の差は感覺の種類を異にし事情を異にするによりて種々に異なり。其の種々なる感覺と種々なる事情

とに就きて種々なる試験を行ひ以て刺激量の増減と感覺量の増減との關係に一定の數學的計算を施す。之れをフェヒネルの法則といふ。

されどゴッヘルの法則又はフェヒネルの法則には少なからざる困難あり。刺激量の大小は感覺量の大小に應ずること勿論なりされど感覺量は單に末端機關に施されたる刺激のみによりて定まるものにあらざ其の以外の種々なる條件の影響を受く。故に刺激量のみを以て感覺量を計るべき唯一の標準とはなすべからず其の以外の種々なる事情をも悉皆計算せざるべからず是れ至難の事柄なり。且やゴッヘルの法則は餘り小ならず又餘り大ならざる感覺量には應用し得べきも餘り強き感覺又は餘り弱き感覺には適用すべからざるの難あり。蓋し數學的感覺量を計算するには一定の單位を標準として之れによりて其の強弱を測るを要す然るに最も少なしと觀察せられたる差は感覺量の大小によりて其の比例頗る異なる中位の感覺量に就きて得たる標準をもて直に或は強き或は弱き感覺を推すべからざればなり。况や此の法則を種々なる事情に伴はるゝ種々なる感覺に悉皆適用せんとするに至りては其の困難尋常一般にあらざるに於てをや。

フエヒテル等はゴーベルの法則を以て物理と心理との關係を最も精密に觀察する普遍法則と思惟せり。されど公平なる學者は刺激量と感覺量との關係は寧ろ生理的に説明せらるべしと思惟せり。其の故に末端機關に施されたる外界の刺激は直に感覺量を確定するものにあらず一刺激が一感覺となるは其の間に種々の生理的作用あり。先づ末端機關は其の受けたる刺激を種々に變化して之れを接續機關に送る接續機關はまた之れを少なからず變化して中樞機關に送る中樞機關は亦之れを變化すると更に著し斯く著るき變化を受けたる後始めて感覺起こる。故に感覺量は單に刺激量の大小のみを以て測定し得べき單純のものにあらず種々の事情に伴はるゝ種々の生理的條件を算入せずば其の多寡を測度し難し。而して各種の生理的條件は皆相互に關係せり其の中の一條件を確知するには精密に前後左右の悉皆の事情影響を知らざるべからず。是れ刺激と感覺との關係を生理的に説明すべしといふ所以なり。

第八章 感覺の複合及び場處ポイカクの標示サイシ

通常單純の感覺と稱するものは絶對的に單純の元素にあらざること前にも説明

しつ吾人が最も單純の感覺と稱するものだに實は種々なる元素の複合せるものに外ならず。通常同一感覺と稱するものさへ必しも同じ唯一種の機關に基きて起これるものにあらず。意識の現象に就きて考察するも吾人は純粹に全く唯一種のみなる感覺の孤立せるを見ることなし。例へば通常吾人は味の感覺と稱するものをば單に味感のみの如くに解すされど實は然らず味感の外に嗅感觸感等をも交ふるが常なり。否單に嗅感觸感を交ふるのみにあらず或は營養氣管の下部より起こる一種の感覺或は食物の肥臆連想等より起こる様々の感覺等をも交ふるとあり。故に通常所謂味感は味感、嗅感、觸感、温度の感等種々なる元素の複合して成れるものなり特に之れを味感といふは其の重なるものを指して言へるのみ。此の他の感覺に至りても皆同じ一として種々なる元素即ち種々なる感覺の複合して成れるものに非るはなし。

心的生活は上の如き感覺の複合によりて漸次發達し行くものなり後章知覺の部に至りて感覺の複合といふことを更に詳説すべし。本章に於て考究せんとするは感覺の最も單純なる複合なり單純なる感覺の原初の複合なり其の發達せるも

のは後章に至りて詳説すべし。

夫れ一切の感覺は皆更に單純なる様々の感覺の複合より成る一として單に一元素のみより成れりといふが如きものなし。而も一感覺には必ず之れに固有なる特質あり例へば諸感覺の複合せる甲といふ感覺は同じく諸感覺の複合せる乙といふ感覺とは其の趣異なり甲には甲の特質あり乙には乙の特質あり全體の複合體の上に於て其れ固有の特質を具ふ。而して諸感覺の複合體に其れ固有の特質あるは諸感覺の依りて起こる生理的機關が各殊なる場處を示すに基く即ち夫れこの機關が刺激を受けたる夫れこの場處の感覺を起さしむるに基く。此に於てか所謂場處の標示の根據を知るべし。場處の標示とは生理的機關が刺激を受けたる箇處(點)の感覺を示すをいふ。故に感覺の複合體が其れ固有の特質を具ふるは少くとも一部分は異なる機關が異なる場處を示すに基くといふべし。以下一層詳細に感覺の複合體に場處の標示あることを説明すべし。

單純なる感覺の原初の複合の中重なるもの二あり運動の感覺と位置の感覺と是れなり。此等は單純なる感覺と知覺後に詳説すべしとの中間にあり單純なる感覺の複合して未だ完全なる知覺の境に進まざるものとも謂ふべし。此等感覺の複合は下等動物にありては殆ど本能の形を取り人類の場合には自然の技能と稱せらる全般の感覺の複合の發達には必然缺くべからざるの階梯なり。

運動の感覺 所謂運動の感覺は瞳又は皮膚の表面なる神経を刺激して之れに屬する筋肉感又は關節感に伴はれたる場合に起こる。味、嗅、聽等の他の複合感覺は之れに屬する皮膚又は筋肉より起こる感覺を交へずしては運動の感覺となることなし。一言を以て約すれば運動の感覺とは變化を意識する複合感覺なり眼又は皮膚より起こる感覺(筋肉感及び關節感)を交へたるもの(の複合體)に變化を感じる之れを運動の感覺といふ。之れを各生理的機關に就きて説明せんに皮膚が運動を感じることに頗る精微なることは日常の經驗に照らして明らかなり生理的心理學者は種々の試験法によりて皮膚が一定の時間に感じ得る運動の速度を計算す。關節が運動の感覺を起さしむること少なからざるは殆ど説明を要せず。又筋肉の活動は直に運動の感覺を起すものなること前に説明せしが如し。

或學者は運動の感覺は悉皆筋肉に基くと公言し又或學者は運動の感覺を説明するに當たりて頗る筋肉を輕ずる傾あり。兩者共に謬れり蓋し運動の感覺は悉皆筋肉のみに基きて起こるにあらず而も運動の感覺には一として筋肉感の混ぜざるなし故に眞理は兩説の中間に在りといふべし。又瞳の表面を刺激する時は色と光とに關する運動の感覺起こる險を閉ぢ眼球を運轉せざる時は光と色との種々なる幻象の運動を感ぜし之れを運動の視感といふ。運動の視感に眼球に屬する筋肉の活動に基けりと思はるれど筋肉の活動に伴はれざる時も尙運動を感じ得べきや否やは不明なり。

要するに運動の感覺は筋肉と關節との活動を伴へる皮膚又は眼によりて起こる感覺の複合なり而して運動の感覺は全般の覺感の發達に與りて重要なる關係を有するものとす。

位置の感覺 ポジション 位置の感覺とは刺激の與へられたる機關の場處を示し又は各機關の位置の相互の關係と其の周圍の外物に對する位置の關係とを示すべき複合感覺をいふ。其の基く所を尋ねるに筋肉又は關節の活動を伴へる眼又は皮膚の

複合感覺が其れ、其の場處を示すに依る。例へば皮膚は其の刺激せらるゝ個處點を異にするに従ひて異なりたる感覺を起し眼は其の位置の上下左右等なるに従ひて各異なる感覺を與へ支肢も亦其の位置の異なるに従ひて各異なりたる感覺を與ふ。此等諸種の感覺が複合して以て吾人に位置といふことを覺せしむるもの之れを位置の感覺といふ。さて位置の感覺は元來本來的のものなりや將た他の感覺に基きて起これる第二段のものなりや是れ注意すべきことなり。本章に於ては未だ此の問題に明答する能はざれども下の二點は須からく記載すべきことなり。(第一)位置の感覺は運動の感覺の如く本來的にして獨立せるものにあらずむしろ他の感覺に依れる第二段のものなり。蓋し人體は原初より絶えず活動して靜止することなし神經統の一切の微分子又は各機關の一切の組織は初生の當時より常に活動して全く靜止すといふことなし。活動は意識の根本條件にして運動の感覺は意識の現象の最初なり。故に位置の感覺は人心自然の發達の順序より推せば運動の感覺に依れるものなり。(第二)位置の感覺は漸次發達するものなり原初の位置の感覺と發達せる位置の感覺とを比較す

るに其の間著き差異あるを見ればなり即ち差別力の精疎に於て彼此大に異なるものあるを見ればなり。

皮膚が如何ほど精密に局部(位置)を差別し得るかの試験法はゴebelに始まり。其の最も簡易なる法は先づコムパスを取りて其の二尖點を當の皮膚に觸れしむ明らかニコムパスの二尖點を感じ得る其の距離の大小に従ひて差別力の精疎を定む。例へば舌端は一ミリメートルの距離にて尙二尖頭を感じ得べく指頭は二ミリメートル、背の中部、腕又は足の上部の皮膚は六十八ミリメートル以下にては二尖點を差別し得ずといふが如き是れなり。ゴebelは明らかに二尖點を差別し得る最少の範圍を「感覺の圈」と名けたり。「感覺の圈」は身體の各部によりて異なり又同一局部にても人によりて大に異なり蓋し神經元素の質量を異にするに基けるが如し。

眼が位置の差別力に精しきこととは何人も知る所なり光又は色に關する感覺に其れは位置場處を與へて意識の版圖の差別に便ならしむ。瞳の種々の面(局部)に種々に散布せられたる元素の刺激、眼球の運轉より生ずる筋肉及び壓抑の活動等

は眼の場處の標示作用の基なるが如し。

場處の標示 以上運動及び位置の複合感覺を略説したり場處の標示の義のづから明らかならん。蓋し運動及び位置の複合感覺は其の感覺の依りて起くる場處を我れに覺せしむるもの我れは此等複合感覺に頼りて種々なる空間的關係を判別するを得ればなり。一切の感覺は皆其れは我れに外物の空間上の關係を判別認識するに當たりて一切の感覺は皆其れは我れに外物の空間上の關係を判別せしむ。たゞし諸感覺の中或機關に基けるものは直接に場處を標示せず唯之れに伴ふ他の機關に基ける複合感覺の補助を得て間接に之れが場處を標示するのみ。即ち味感、嗅感並びに聽感は之れに伴ふ筋肉感と觸感とによりて間接に場處を示すのみ其れみづからにては場處を標示するの力なし。場處の標示は重に視感と觸感となり眼及び皮膚が如何に明らかに感覺の起これる場處と之れによりて知られたる外物の位置とを指示するかは特にこゝに詳説するを要せざるべし。場處の標示に關して尙一の注意すべきことあり即ち支肢體軀の所在を知るとこれ也。これを知り得るも亦視觸、筋肉等の諸感覺の複合によりて種々の空間的關

係を辨別するに基く。此等の複合感覺によりて我れは何處に存し我が支軀は何處に位し外物は何處に在るかを識別するを得。若し此等複合感覺の中何處にか變異又は缺損あらんか全軀の場處の標示に著き缺點を生ずべし。腦の何處にか缺損を生じ若しくは腦の或部面(就中小腦)に強き電流を注ぐ時は全軀の場處の標示に著き變異を生ず。頭部の位置如何は支肢軀の所在を知るとに少なからざる關係あり。頭の外部に屬する筋肉と皮膚とのみが全く位置の感覺を起すものとは見えず。近頃の試験によれば内耳なる半圓管の状態並びに此の機關の中に保護せらるゝ液腔の運動及び壓抑は多少此の種の複合感覺に關係あるものゝ如し。體軀の内部機關の一部分が他部分を壓抑し若しくは液腔が其の附近の部分を壓抑することが位置の標示に關係あるとも少からぬが如し。

感覺の複合の條件 通常吾人は感覺複合の條件を一定不變なるが如く思惟す即ち複合すべき感覺の種類を一定せるものゝ如く思惟す。されど詳細なる經驗によれば必しも然らず或は耳を以て見或は指を以て物を味ふが如きは有るまじきに似たれど心理研究者は斯くの如き異常なる現象にも適當の説明を加へざる

べからず。蓋し斯かる異様の現象を究むるには實際複合すべき感覺の種類如何を究めざるべからず。即ち如何なる種類の感覺と感覺とが複合するか感覺の種類は果して一定不變なるかを究めざるべからず。若し感覺複合の條件は必しも一定不變にあらずとせんか其の結果も亦あつから異ならざるを得ざらんざる場合には甚だ異様なりと見ゆる現象も單に感覺複合の取合せが通常のに異なれるのみにて心理上些も異むべきものにあざらん。例へば音を聞きて色の感を起し物を嗅ぎて音の感を起すが如きは或は聽感と視感と結合し或は嗅感と聽感と結合せる結果のみ心理上さして異むに足らざるべし。一感官の複合感覺が他の感官の複合感覺に影響を及ぼし又時に奇異なる複合感覺の形つくられてあるは疑を容れざるが如し。

第九章 感情の性質及種類

意識の方面中吾人が感情といふ名を下だせる現象は心理研究に最大の困難を與へしもの攻究の當初より今日に至るまで學者を苦めしと少なからざるものなり。其の理由種々ありと雖も重なるもの二三を擧ぐれば第一感情と呼ばれたる意識

の現象を攻究しこれが分析を試みたる者の少なきこと並びに感情は倫理學、美學、宗教等に至密の關係あるため此等倫理上若しくは宗教上の爭論は此の方面の攻究に少なからぬ私心偏頗心を起こさしめしと。(第二)感情といふ現象を記述し且説明すべき言語の性質が感情の攻究に少なからざる不便を與ふること。蓋し言語は重に事物に關する知識を標示するもの、吾人に必要缺くべからざる事物に關する知識の標示なり之れに頼りて感情をも標示すれど其は直接に感情其のものを標示するにあらず唯比喩的に不精密に之れを表彰するに過ぎず。(第三)感情其のものゝ性質、條件並びに法則の攻究しがたきこと是れ感情攻究中最大至難の理由なり。先づ其の性質に就きて言はん第一之れを記述すること至難なり之れを記述すべき言語は重に知力上の念を標示せり然るに敢て之れに頼りて一切の複雑なる感情的現象を記述せんとす充分其の性質を記述して遺憾なきを得んや。且夫れ感情といふ現象を観察し記憶し試験することは容易の業にあらず。感情其のものゝ性質は最も敏捷最も迅速最も變化し易く最も深く又最も複雑なり假令注意力を集めて之れを観察し得るとも精密に之れが現象を記述せんとするに

至りては常に吾人の無能を感ず。否注意力を集めて其の真相を窺はんとする時は或は感情其のものゝ状態著く變じて其の真相を失ひ或は全く意識の範圍外に逸出す。されば自己の感情を観察するとだに容易の業にあらず况や他人の感情を観察せんとするに於てをや。感覺の場合に於ては吾人は或程度までは試験法を用ひて多少精密に其の變化の状態を測るを得べし感情に至りては殆ど之れに試験法を施しがたし。啻に感情の性質の斯く攻究に至難なるのみならず其の條件並びに法則に至りても亦然り。最も顯著なる情緒の生理的條件は多少明瞭に之れを示すを得べしされど感情のいと微妙なるもの並びに種々複雑の關係を具ふるものに至りては殆ど其の各條件並びに法則を知りがたし。是れ今日に至るまで尙感情に關する心理の漠として捕捉すべからざる所以なり。

アリストートルこのかた近世の初に至るまで學者多くは心的能力を區別して智及び意の二さなし情といふ特殊なる方面に想及ばざると久しかりき。今日の心理學が此の方面に重きを置くに至りしかの好んで己が心情を記述分析したりしルソーに負へる所多し。カントが一たび知情意三方面の類別を採用せし以來屢々此の區別法を排斥せんと試みし者あるに係らず今は學者概ね感情を心的生活の一方面と解するに至れり。

殊に近世生物學の進歩は著く感情に重きを置かしめたり蓋し生物の研究上感情は最も普遍なるものにして又最も至要のものなるを發見したればなり。

感情の性質　感情の眞性は定義すべからず又感情其のものゝ眞性を示すが如き記述は爲しがたし。感情は心的生活中の原初的又根底的のものなれば感情に屬せざる他の語を以て之れが眞性を定義するを得ず。諸の感情は如何なる點に於て一致するか所謂苦樂の感は如何なる點に於て相同じきか。此等の疑問に對して吾人はたゞ下の如く言ひ得るのみ曰はく一切の感情苦樂等は思想又は意志等とは異なりて凡て感情の種類に屬する點に於て相一致すと。感情を定義すべき言語が實は思想の標示にして感情其のものゝ標示ならざることとは亦感情の眞性を定義しがたき所以なり。之れを要するに感情は直接自己の意識を觀て其の眞性を知るべきもののみ。吾人は感ず是れ感情の眞性なり故に感情の眞性は感せらるゝにありといふべし。但し心理學者は感情の生起し變化する所以の條件種々なる感情の相互の關係並びに其の發達の狀態を研究し得べし。心理學者多くは感情の性質を説明して曰はく智の客觀的なるに反して情は主觀

的なりと。例へばホルド井ンは感情と云ふ語は意識の主觀的方面を示すものなりと言ひ又サラーは感情は純粹の主觀的經驗なりと言へり。主觀的とは内なるもの、内部に屬するもの、我れに屬するものゝ義なり。されど心理學の攻究する一切の心的現象は皆主觀的なり特に感情のみを主觀的と稱するは如何。感覺は我れの感覺又我れの意識なり其の主觀的なると何ぞ感情と異ならん。故に特に感情のみを指して主觀的といふは其の義頗る漠然たり然るに敢て之を主觀的といふには特別の理由あり殊にサラーの如く純粹の主觀的經驗といふには正當の理由あり。夫れ感覺と感情とは二ながら主觀的なりされど兩者もど其の質を同じうせず。感覺は之れを外界の事物に關係せしむるを得例へば我れの感覺せる物は青し赤し酸し甘しなど之れに客觀的の性質を附するを得。故に此の點より感覺を客觀的なりといふ必しも不可ならず。感情に至りては全く異なり例へば頭痛を感じ若しくは音樂を聞きて悲しく感ぜる場合に件の感情が客觀的に(外に存在すといふべからず)純粹に内部に純粹に我れの奥底に存せりと言はざるを得ず。我が感覺せる事物は客觀的に存在すれど件の事物が我れに感せしめたる

る情は純粹に主觀的なりと言はざるを得ず。是れ感情は心的生活中の最も深きもの即ち純粹に主觀的なるものと謂はるゝ所以なり。

世間往々感覺センセーションと感情フィーリングを混する者あり否心理學者の中にさへ兩者を同一視し若しくは混同する者あり。心的生活の原初の状態は甚だ漠たり感情と感覺と殆ど別がたき場合少なからず。否發達せる心的生活に就きて見るも彼の嗅感と味感との如き若しくは其の他の聴機感の如きは著く主觀的なり殆ど感情と區別すべからざるものあり。されど斯くの如き場合に於ても感覺と感情とは全く相異なる現象なり一は客觀的にして一は主觀的、決して兩者を混同すべきにあらず。嗅感と味感との如きは著く感情を交ふるが故に兩者の區別判然しがたしされど此の故をもて感情即ち感覺なりとはいふべからず。感覺は智の元素にして感情とは全く異なれり。

近世の學者中感情は第二段のもの、他の心的元素に基きて起ると主張する者あり。其の説分かれて二となる一は生理學的フィジエーション一は想念的ファンクショナルなり。生理學的とは感情を以て一種の神經作用と解する者をいふ。其の説に曰はく感情とは神經作用を意識すること又は神經作用の關係又は刺激の量に應ずる神經組織の活動を覺することと是れなりと。げに神經組織の活動は感情の發動に主要の關係あるべし而

も直に感情は即ち神經作用の意識といふは非なり。若し神經作用を意識することありとせば其は單に斯かる作用行はると意識するのみにて斯く意識することがやがて感情なりとはいふべからず。斯くの如き説を立つる者は感情の條件と感情其のものを混同視せるなり。次に想念的とはヘルバルト派の解説をいふ此の派は感情を以て智に屬する種々の想念の關係に基けりとなす。詳言すれば想念は互に相競争して自己の力を逞うせんと努む此の際其の關係を意識すると即ち想念の互に相衝突し軋轉するさまを意識することと是れ感情なりと。故にヘルバルト並びに其の流を汲める者は感情を以て想念(即ち智)より發現するものと會す。されど此の説亦誤れり假令想念上の關係は感情に密接の關係ありとも之れがために感情は即ち想念より發すとはいふべからず。想念上の關係を意識することとは感情其のものは全く異なり想念上の關係を意識したればとて其は斯くの如き關係を意識せるのみにて其れかやかて感情其のものに變すべき理由なきなり。

されば感情を以て第二段のもの、他の元素より發現するものとなすの非なるを知

るべし。感情を以て心的生活上第二段のものとなすに反し之れを以て一切の心的現象の根本と立つる學者少なからず彼等は心的現象の原初のもを悉皆感情と名けたり。されど未か解することは同じく極端に失せるものといふべし。博士ワードと共に吾人は心的生活のはじめ感情の存在すると同時に多少の判別力(智)の存在することを主張すべき也。

近世の學說中尙感情の性質に關する誤解あり他なし一切の感情を以て快感と不快感とに外ならずとすることは是れなり。詳言すれば苦樂といふ語は一切の感情を蔽ふ一切の感情は快と不快とに外ならずと。此の説に従へば種々なる快感と不快感とは種々に度を異にせる苦樂の感のみ而して苦樂の感は唯其の量に大小強弱の差あるのみ故に一定の標準を以て一切の感情を量るを得べく度の強弱にまたがひて苦樂の感の列を造るを得べしと。されど此の説にまたがひて正當に言はれ感情には種類なきなり其の故は感情は快感か不快感かの二の外に出でずとせば其の種々に異なれりと見ゆるものは實は唯強弱の度を異にせるものに過ぎざるか若しくは種々異なる感覺又は想念に伴はれたるもののみ感情

其のものに至りては依然として苦樂の感なり。故に感情には種類なし唯度の大小あるのみと謂ふべきなり。

今日感情を説く者にして上の苦樂説を取る者多し。されど予輩は此の説の誤れるを明言すべし。今こゝには此の説を細評しがたけれどこれは到底感情の全方面を盡したる説にあらずして却りて數多の缺點あるを見る。斯くの如き説明は簡單はすなはち簡單なりと雖も甚しく事實をあやまれり。試に重なる缺點二三を擧げんか(第一)感情には種類なしといふこと非なり。諸の感情其のもの互に相異なるにあらずば吾人は如何にして種々なる感情を辨別するを得べきか。之れを直接意識に徹するに例へば驚愕の感は預期の感と異なり又勿論疑懼の感若しくは確信の感とも異なり其の質互に相異なれりと言はざるを得ず。(第二)感情即苦樂といふは自家撞着なり何となれば苦樂は共に感情たるに於て相同じ即ち其の相同しき所に感情の感情たる所は存すべし故に苦樂は感情の種類なりとはいふべきも苦樂即感情なりとはいふべからず。(第三)苦樂即感情なりといふは非なり其の故は苦の感と樂の感との間に苦にもあらず樂にもあらず中間の感情あら

んも圖られざるに此の説は斯くの如き疑問を全く無意味のものとなせばなり。蓋し斯くの如き中間の感情ありやなしやは事實問題にして感情の性質上また全く無しとは言ふべからざればなり。然るに苦樂即感情説は初より斯かる中間の感情をあり得べからざるものとなす。

感情の條件 感情の性質を明らかにせんとせば感情の依りて起こり又は變化する所以の條件を知るを要す然るに感情の條件は複雑にして知り易からず。所謂身軀ボディの感フィーリングの快と不快との條件の如きは多少之れを試験的に研究するを得べきも高尚複雑の感情に至りては能く生理的心理學者の研究し得べき所にあらず。例へば戀愛の痛苦の如き、宗教上の狂喜の情の如き、若しくは死者を追想する悲嘆の情の如きは誰か能く其の複雑の條件を指示し得る者ぞ。ゴッセルが法則も到底此の場合には用をなさず。吾人は唯廣く世人の行爲を觀察し其の他文學、美術、歴史、人種學等によりて感情の出沒變化する様を知るべきのみ。

感情の生起する條件は委しく知悉し難しと雖も生物學上就中生理學上吾人はその大躰の趣について多少推測し得る所あり而して此の事について先づ注意すべ

きは生理的條件は單に一の物質的變動に過ぎざるに之れによりて起こる心的現象は智情意の三方面なること是れなり。詳しく言へば一切の心的現象は神經作用を必須の條件となす神經組織の活動は眞に複雑精微を極む而も其の微分子の變動は其の多寡、速度並びに運動の方向に約するを得べし。故に生理的條件は究竟するに凡て同じく唯物質的變動なるに之れに伴へる意識の現象は三様なり。その何故に然るやは吾人の説明し得る所にあらず唯之れを事實として承認すべきのみ。

夫れ感情の發動や人により事情によりて著き差異あると感覺の發動の比にあらず感覺は一定の刺激に應じてほゞ一定の状態に發動す感情は然らず人により事情によりて著き差あり。此等の事實によりて考ふるに感情は神經組織の種々複雑なる關係を其の發動の條件となすものゝ如し。詳しく言へば其の時の一斑の神經作用と其の前及び共存の種々なる状態との關係により又中樞機關に於ける種々なる神經活動の相互の關係等によりて發動するが故に時により人によりて甚しく其の趣を變するものゝ如し。彼の末端機關に施されたる刺激に應じて直

に規律的に活動する條件の如きはほゞ之れを數量的に測定するを得べし即ち彼の感覺の條件の如きは之れを看定むると甚だ難きにあらざ。感情の條件に至りては然らず上の末端神經組織の定まれる作用以外の神經活動是れ感情の條件なること其の變化の一定せざる所以なるべし。定まれる作用以外の神經活動とは末端神經作用の外に腦の中樞に起こる神經活動の混沌たる殘餘をいふ。換言すれば末端神經活動又は脊髓神經活動等に基きて腦神經中に起こる殘餘の模糊たる微分子的活動をいふ。此の混沌たる殘餘の神經活動が其の前の状態と之れに附隨せる共存の種々なる状態とに影響せられて以て腦の中樞に起こす微分子的活動は是れ感情の條件なるが如し。果して然りとせば感情の條件の頗る不明にして人によりて甚しき差ある所以を察知し得べし。腦の中樞に於ける神經活動や極めて複雑精微なるべし其の一局部の活動は顯著なる影響を他の局部に及ぼすべし。

感情の生理的條件は右陳ぶる如き腦中樞に於ける神經活動の餘波にありと思はるゝが今之れを心理的方面より見んに其の心理的條件の重なるものは氣質性根

若しくは氣風等の語によりて言あらはすを得べし。夫れ各個人は皆固有の氣風を具ふ即ち各個人は由來生理的條件に基きて種々の氣質を具ふ。或は高慢なる者或は理屈ずきなる者或は激烈なるたちの者或は沈着なるたちの者或は快活の人或は陰鬱の人等各全軀の氣質に特定の模様あり。此等の氣質が感情の生滅變化に著き影響を與ふることは日常吾人の實驗する所なり。假令感情を發動すべき刺激は同一なりとも快活なるたちの人の感するさまと陰氣なるたちの人の感するさまとは大に異なり猶眼鏡の色を異にするによりて同一物を異様に見るが如く各個人の特徴は著く感情の模様を變化するものなり。彼の道德上、審美上、哲學上、宗教上の判斷の如きすら各個人が氣質の殊なるに従ひて著き差あること皆人の認むる所なり。厭世又は樂天に關する最も抽象的なる哲學上の判斷さへ重に「氣質」の如何に基くと稱せられたり。されば感情は單に當の刺激によりて變化するのみならず氣風によりてまた著き變化差異を生ずるもの也。

感情の心理的條件に尙一の重要なるものあり他なし注意力の分配是れなり。蓋し感情は注意力の大小強弱と注意せられたる事物の如何によりて種々の差を來

たす。殊に注意力を強めたる場合と然らざる場合とによりて感情に種々の差あることは皆人の知る所なり。

苦樂に關する一層詳細の條件は尙後章に説明すべし。

感情の種類 感情分類の根據は何ぞや吾人は如何にして感情の種類を分別すべきか。從來心理學者の慣用せる所によれば感情と結合せる他の元素に應じて客觀的に之れを分類するを常とせり。換言すれば感情は智の元素と結合して種々の状態を取る故に其の結合せる智の元素に應じて之れを類別するを常とせり。彼の生物學的若しくは生理學的分類の如きは到底正當に感情を類別するの法にあらざる各種の感情が一々各種の生理的狀態に應ずとは思惟するを得ざればなり。上の如く感情を分類するには之れと結合せる他の元素に據るとせば先づ感情と他の元素との結合の性質を明らかにするを要す。苦樂即感情説を唱ふる者及び此の説を排斥する學者すらまづ上の結合の性質を説きて曰はく感情は唯他の元素の結合するを俟ちて始めて種々の形を取るのみ他の元素と結合せずば感情に種類なしと。げに感情は他の元素と結合す。されど之れが爲に感情は常に

他の元素に附屬するもの、其の自己の種別を有せざるもの、如く會するは非なり。情は智及び意と並立して吾人の心的作用の一の特殊の方面をなす、さるを情は他の元素に附隨して始めて種々の性質を附せらるゝと會するは謂はれなし。意識中の各元素が互に相結合するは豈ひとり感情のみに限れることならんや。例へば我れ頭痛を感ずとせよ此の場合に或は之れを「不快の感覺」ともいふを得べく或は之れを「感覺上の不快」ともいふを得べし。必しも感情が感覺に附隨せるにあらざる唯感情と感覺と若しくは感覺と感情とが結合せるのみ之れを以て直に感情は常に他の元素に附隨すと會すべからず。要するに感情は意識の一般の法則にまたがひて他の元素と結合す吾人は便宜のため件の結合元素を借りて感情分類の基となすのみ。

感情と他の元素と結合するや其の模様さまざまなり。結合の次第明らかなるものあり又明らかならざるものあり例へば不快なる壓抑の如きは其の結合の次第明らかならば身軀全軀に關する漠然たる不安の感の如きは其の結合のさま甚た漠たり。又感情と他の元素と結合するや感情が他の元素に附隨することあり又

他の元素が感情に附随することあり。例へば感覺上の激烈なる變化の際の如きは先づ驚愕の感に撃たれて他の元素は之れに伴ふが常なり。されば感情は常に他の元素に附随するものにあらざりて他を率ゆる場合甚だ多しといふべし。感情の分類に關して尙一の注意すべきことあり其は相結合せる智の元素と感情との強弱の度及び複雑の度が其の感情との變化を起すことと是れなり。例へば感情の度を強むる時は殆ど別種の感情を生ずることあり。穏和なる奇異の感を強むれば其の結果驚嘆若しくは驚愕の情を生し得べし。是れ單に度の強まりたるのみに頼れるにあらざり之れと同時に種々別種の感情の浸入せるに基けり。されば快感變じて忽ち不快感となるさへ往々これ有り皆これ強弱の度と複雑の度との變化が別種の感情を生ずるの實例といふべし。

以上の考察に基きて感情を分類すれば下の如し。

第一 感情と結合する智の元素の種類によりて分類すれば曰はく(一)感覺的感情、曰はく(二)智力的感情、曰はく(三)審美的感情、曰はく(四)道德的感情是なり。感覺的感情とは種々なる感覺の結合して種々なる形を取りたる感情を言ひ智力的感情

とは想念又は思想に結合せる感情をいふ。正當に言はば以上四種の感情は皆智力的感情即ち智力皆元素の影響を受けたる感情といふを得べく又後の二種は前の二種に基くこと深しと謂ふべきなり。

第二 感情と智的要素との結合の模様によりて感情を分類すれば二となる。

一は其の結合の次第孰れを先とし孰れを後とすべきか判然たらざる底の感情、一は明らかに智的要素が先にして感情のそれに伴ひて起されるものをいふ。

第三 最後に吾人は感情を分かちて單純感情と複雑感情との二となすを得べし。單純感情とは更に其の以上に分析すべからざるものを言ひ複雑感情とは種々の單純感情が複合して成れるものをいふ。

第十章 苦樂の感

古來心理學者並びに哲學者の多數がひとしく苦樂の感に重きを置きしことは皆人の知る所はた近世の學者が苦樂の感を以て感情の全軀と説きなすこと多きよしも前章に略説しつ。苦樂の感が果して感情の全軀なるか否かは假りにこゝに問はずとするも兎に角苦樂といふことが人生に重大なる關係あることは何人も

否むを得ざるべし。試に世界より一切苦樂の感を排除したりとせよ人生は如何に乾燥無味なるものとなるらん苦樂の感が人生を支配する動力の主要なるものなることは殆ど説明を要せじ。近世の生物學者又心理學者が動もすれば苦樂の感を根本と立て、以て一切心的現象の生起を説明せんとする豈偶然ならんや。苦樂の感が果して感情の全躰なりや否やは論理上の問題にあらずしてむしろ事實上の問題なり。リード(蘇國の學者)は苦にもあらず樂にもあらずる中間の感存すと説きハミルトン(蘇國の學者)は之れを承認せずペインは中間の感の存することとは更に疑ふべからずとなし日常吾人が經驗する苦樂の感は概して苦にもあらず樂にもあらずる中間の境を経て之れに達したるものなりと言へり。ヴントも亦曰はく苦樂は互に相反する感にして各強弱の度を具へたれば其の間に必ず中間のもの無かるべからずと。之れを實際に徴するに吾人は如何にしても中間の感なしとは斷ずる能はず幾多日常の微弱なる感情の如きは之れを苦とも樂とも意識しがたし。且や一切心的現象の生起を悉皆苦樂の感に基くとす如きは頗る早急に失せるの説明と言はざるを得ず。所詮苦樂を以て感情の全躰を盡せ

りとなすが如きは未だ精確に心理を説明したるものといふべからず。さもあれ感情中苦樂の現象が如何に主要なる位置を占め又如何に重大の影響を他に及ぼすかは精考するに従うて益々明になる也。されば本章に於ては苦樂の感に果して感情の全躰なりや否やは姑く問はず専ら苦樂の感其のものに就きて之れが現象を究むべし。即ち苦樂を感情の互に相反せる調子として之れが現象を攻究すべし。

苦樂の條件　苦樂の感の生滅し若しくは變化する生理的並びに心理的條件は何ぞや。吾人は此の疑問に對して未だ確定せる一原則を示すを得ず。苦と樂と互に相反せるの故をもて其の生理的條件を必しも神經組織の反對作用に歸するを要せず。古來快感を積極的、不快感を消極的、若しくは快感を消極的、不快感を積極的と見做したる者多しされど斯くの如き説明は心理學に何の益をかなさん徒に其の攻究に混雜を與ふるのみ。心理學者より見れば苦樂は共にこれ積極的なり相反せる調子を具へたる獨立の積極的感情なり何ぞ一を積極的とし他を消極的となすの要あらん。隨うて苦樂の生理的條件は必しも神經組織の反對作用な

りとはいふべからず。近世の生物學は進化論上苦樂の生起に關して多少有益なる説明を與へざるにあらず。曰はく生物の保存に有益なるが如き生理的狀態は快感を與へ然らざるものは不快感を與ふと。されど此等の説明は未だ苦樂の生理的條件を盡したりと言ふべからず且や其の言頗る漠として俄に承認しがたき箇所少なからず。試に此等生理的説明の二三を擧げんかペインは曰はく身體の活力の作用盛なれば快感を起し活力の作用衰ふれば不快感を與ふと。されど活力作用の衰へたる時に快感を覺え然らざる時に反りて不快感を覺ゆるとあるは何ぞや。グラント、アルレン(英國の學者)は曰はく脊髓感覺神經に關係ある機關の全體若しくは一部分が健全に活動して而も其の通常の營養力(消費を補ひ得る力)に超過せざる時は快感起ると。又佛國の一學者は曰はく無力の感覺は不快の感覺にして、有力の感覺は快なる感覺となると。生理的説明は概ね斯くの如し吾人は其の説明の甚だ漠たるを認めずんばあらず此等説明は假令單純なる感覺的苦樂の條件を説明し得たりとするも高上複雑なる情緒の條件を盡したりとは言ふべからず况や日常の實驗は此等説明に反すること多きを證するに於てをや。

前章にも説明せる如く感情の生理的條件は中樞機關の神經組織中に起る混沌たる作用なりされば苦樂の生理的條件の甚だ見分けがたき複雑のものなることは容易に察知し得べきなり。

刺激の強弱と苦樂との關係　刺激の強弱と之れに伴ふ苦樂の調子との關係に就きては頗る注意すべきものなり。生理的に考ふるに感覺又は想念アイデアを起させる腦作用が或一定の制限以上に強く活動する時は苦痛の感を與ふ。之れに反して腦作用甚だ緩漫にして明瞭に或感覺又は想念を浮ぶるに不適當なる時は亦同じく苦痛の感起る。例へば刻苦、奮勵、激昂、瘁盡等より起る苦痛は前者に屬し思想の散漫より起る苦痛又は不安の感の如きは後者に屬す。神經活動が苦痛の感を起さしめずして幾何大の刺激量に耐え得るか各個人の體質、習慣、現狀、腦中樞の狀態等に依るが故に一定しがたし。而して中樞機關に起る作用の強弱は半は刺激の施されたる末端機關の構成狀態等の如何に依りて變更す。定限以上若しくは以下の神經活動が不快の感を與ふるとは上の如し之れを心理的に言へば下の如し。曰はく感覺と想念と思想とを問はず之れに伴うて快感の

起こるや一定の心的量あり此の定量以上又は以下に感覺量又は思想量増減する時は不快の感起こると。餘りに強き感覺が苦痛を與へ餘りに劇烈なる心象が却りて不快を覺えしめ餘りに深刻なる考察が感情を害するとは皆人の經驗する所なり。彼の樂しき感情喜ばしき情緒すら其の度の強きに失する時は却りて苦痛の感を與ふること猶餘りに激しき寒暑が苦痛を與ふるが如きものあり。之れに反して餘りに弱き感覺又は餘りに散漫なる思想か不快の感を與ふること亦皆人の知る所例へば或事物を想起こさんと欲するも容易に想起こす能はざる場合の如き是れなり。

されば苦樂の感と感覺量又は想念量との關係は頗る不定にして一定の法則を以て推すべからず。試験の結果より推測するに苦樂の感と感覺量若しくは想念量との關係は彼の感覺量と其の刺激量との關係とは異なるが如し。即ち感覺量は其の刺激の強弱に應じて多少精密に之れを計算するを得べきも苦樂の感に至りては單に感覺量若しくは想念量の多少のみを以て之れを計算する能はず。前者の關係は比較的單純なれど後者の關係は甚だ複雑なるを認めずばならず。

苦樂の種類 前章に説明せる如く感情の種類は感覺的感情、知力的感情、道德的感情、審美的感情等に分かつを得べしとせば此等各種の感情には各々苦樂の色あり隨うて感覺的苦樂、知力的苦樂等の種類を造るを得べし。此の種々の苦樂に更に千差万別なる苦樂の強弱を配する時は苦樂の種類は如何に無量なるかを察し得べく吾人は到底其の種類を整然分別する能はざるべし。或は此等無量の苦樂を自然的、躰質的、習得的の三様に大別するを得べし自然的苦樂とは万人に普通自然なるもの、躰質的とは個人の殊なる躰質に基けるもの、習得的とは殊に習慣によりて得たる苦樂をいふ。されど此等三様の外に容易に命名すべからざる無量の苦樂あり其の變化の迅速なること電光石火に類するものあり吾人は到底此等を整然示舉するを得ず。單に感覺的苦樂のみに就きて言ふも其の強弱の度にまたがひて其の種類は甚だ多し知力的苦樂に就きていふも亦同じ。而して此等感覺的並びに知力的苦樂は其の人を異にすると事情を異にするによりて無量の種類となるを知らば苦樂の種類の如何に雜多なるかを察するに難からざるべし。單に量のみ就きて言へば知力的苦樂は概して感覺的苦樂より弱し蓋し感覺的

苦樂は神經組織を活動せしむること最も強く知力的苦樂は種々の概念と種々の概念との影響を受くること大なり隨ふて後者は前者に比して其の苦樂の量感覺的に劣ること大なりとす。種々の概念と概念とに影響せらるると謂ふは他なし吾人は徹頭徹尾苦樂の奴隸となる者にあらず却りて或目的のためには苦樂其のものをも排斥すること有るをいふ。彼の本能的に活動する下等動物すら唯快不快の感に支配さるゝにあらざる也。

一定の強さの神經活動と之れに伴ふ心的状態とを假に常態ノルマと稱するを得ば常態の神經活動に伴へる心的状態の概して快感なるべきは既に前に説明せり。然るに此の常規以外に一種特別の現象あり其を何ぞといふに他なし各人に普通なる感覺的作用若しくは知力的作用にして其の強弱の度の如何を問はず又其の條件の何たるを問はず常に不快感に伴はるゝもの是れなり。斯くの如き不快感は常態なる神經活動にも伴ふを常とす。依りて案ずるに吾人が意識中には自然に不快なる感覺又は想念あり斯くの如き想念若しくは感覺の不快感は其の想念又は感覺の強弱には拘らずして常に吾人の感ずるものと謂ふべきなり。之れに反し

て感情の刺激の度が常態以上に達して機關の安全を破り又は其の感情の質が道徳的ならざるが如き場合に於て却りて快感を覺ゆるが如きことは屢々これあり。彼の如何にしても身軀の健全のために不真なりと思はるゝもの若しくは道徳上非難すべきことにして却りて快感を覺ゆること有るは吾人の熟知する所なり。されば憤怒後悔復讐傲慢憎惡厭嫌等の感情すら却りて吾人に快樂なるものあり。常態以上の刺激力は必ずしも常に不快感のみを惹起すものとは斷ずべからざるなり。

種々の想念若しくは概念に伴はれたる複雑高上なる感情を情緒エモーションといふ。情緒は常に複雑なる知力的分子に伴はるゝが故に其の何が故に快感にして何が故に不快感なるかの理由を具ふ。此の理由を具へたることは是れ情緒の特質なり。此等情緒は殆ど常に苦樂の兩調を混交せり即ち一情緒にして快と不快との兩感を具ふるを常とす。志かるに情緒を指して或は快なるもの或は不快なるものと言ふは兩調の孰れか一方が重くして全軀に快又は不快の色を與ふればなり。苦樂の兩調が互に主位を占めんとして相争ふことあるは此の理に基けり。斯くの如

く情緒は甚だ複雑なるものなるが一般にいへば身体上の苦痛若しくは其の他の原因によりて不快感を引起すべき點に達せざる限は情緒の興奮は概ね快感を以て伴はる。情緒の強く動く時は神経組織の動搖活潑なるがために少くも其の當座は快感を覺ゆるものなり。故に如何なる種類の情緒にもあれ其の興奮の情態は多少の快調を帶ひざるはなし。憤怒の情の如きすら快感を與ふことは皆人の經驗する所なり。

格律と反復 リズムとレピテンション 一切の感情就中苦樂は格律と反復との法則に従ふ。格律とは譬へば音調の一上一下互に律をなすが如く心的作用が或は高く或は低く互に律をなして相交代するをいふ。殊に快不快の感に於て其の著きを看る。苦樂の兩調が特に格律の法則に従ふものなることは日常吾人の經驗する所苦極まれば樂來たり樂極まれば苦來たるは勿論平調の苦樂だに長く同一の状態に停止することなくして常に苦と樂と樂と苦と互に相往來交代するとは吾人の熟知する所なり。外界の刺激を受くべき末端機關と其を醇化すべき中樞機關との状態が苦樂の兩調に少なからざる關係あることは前に既に説明せり。苦樂の兩調が格律の法則

に従ふ所以は元來其が生理的條件なる神経活動其のものが格律の法則に支配せらるればなり。蓋し神経組織のエネルギーには一定の制限あり此の定限以上に活動すべき刺激を受くるか若しくは同一調子にて長く其の活動を續けんとする時はエネルギーは忽ち消盡せらる此に於てか神経作用は他の状態に移る而も亦長く此の状態に停止する能はずして他の状態に移る是れ神経活動其のものに格律ある所以なり。斯くの如くにして快感は長く快感の状態に停止する能はずして不快感に移り件の不快感はまだ長く不快感の状態に停止する能はずして快感に移ること猶左右の互に相交代するが如し。ヘフディング曰はく「物の極と極と相會ふこと感情を措きて何處にかまた更に恰好なる適例を見るを得ん」と。習慣により鍛錬により工夫により教育によりて如何に感情作用を強固にせんとすとも吾人は竟に格律的苦樂の影響を脱するを得ず。涙の裏に笑あり笑の裏に涙あるは詩人小説家の常に利用する所此等複雑なる現象に就きては後に更に詳説すべし。

次に反復とは其の語の示すが如く同一事を再三くりかへすをいふ。意識の現

象は其の智たると意たると情たるとを問はず同一事を反復する時は夫れ種々なる影響を受くるものなり。例へば智及び意の現象の如きは同一事を反復することによりて其の作用一層明瞭となり若しくは一層強固となるが如し。而して智及び意の現象に於ては反復の効果頗る明瞭なるが故に多少之れを精密に計算するを得べし。然るに反復の感情に及ぼす影響に至りては甚だ複雑にして定めがたし。彼の單純なる體感の如きは適當なる試験法によりて反復の効果を檢するを得べしされど複雑高上なる感情に至りては竟に其が反復の結果知るべからず。例へば智及意の現象に於ては再三注意力を用ひて同一事を反復すれば其作用いよゝ明瞭となり若しくは強固となるの効果あり。感情に至りては然らず若し其の如く注意力を用ひて同一事を反復せんとすれば忽ち苦樂調子を變ずべし即ち注意力其のものが苦樂の調子を或は變化し或は破壊するに至るべし。又感情の同一状態に停止する能はざるの特質は其が反復の結果に影響すること大なり。例へば同一事を餘り屢々反復せんとする時は爲に苦痛の感を引起すべしが如きは是れなり。要するに複雑高上の感情に至りては同一事を反復することに

よりて如何なる結果を來たすべきか豫定し難き所あり其の變化し易く且精微なる本質は吾人をして容易に其の活動の状態を承知せざらしむ。彼の感情の教育の如きは重に反復といふ法則を利用するにあれど其の結果上の如く不明瞭なるを知らば感情教育の至難なる推して知るべきなり。

プレニツシヨフ、アツシク、ヘーレン
彌蔓と聯關

苦樂の兩調は言ふまでもなし一切の感情は皆彌蔓と聯關との

則に従ふ。そもゝゝ感情の生理的條件たる神經組織の活動するや單に其の重なる一局處のみが活動するにあらず件の一局處の活動はやがて之れに近接せる部分を刺激し此の近接せる部分の活動はやがて亦他の部分を活動せしむ。故に一局處の活動は種々なる方面に其の作用を彌蔓せしむ。されば重に快なる情緒若しくは重に不快なる情緒は其の條件として殆ど腦の全面を活動せしむ隨うて斯くの如き感情は種々の方面に彌蔓すべきものなるを知るべし。

次に聯關といふことが苦樂の感に及ぼす影響を説明せんには知力分子又意力分子と感情分子との關係及び結合如何を論せざるべからず就中智と情との結合如何を説明せざるべからず。されどこれは尙後に説明すべきとなれば爰にては聯關

象は其の智たると意たると情たるとを問はず同一事を反復する時は夫れ一種々なる影響を受くるものなり。例へば智及び意の現象の如きは同一事を反復することによりて其の作用一層明瞭となり若しくは一層強固となるが如し。而して智及び意の現象に於ては反復の効果頗る明瞭なるが故に多少之れを精密に計算するを得べし。然るに反復の感情に及ぼす影響に至りては甚だ複雑にして定めがたし。彼の單純なる體感の如きは適當なる試験法によりて反復の結果を検するを得べしされど複雑高上なる感情に至りては竟に其が反復の結果知るべからず。例へば智及意の現象に於ては再三注意力を用ひて同一事を反復すれば其作用いよ／＼明瞭となり若しくは強固となるの效果あり。感情に至りては然らず若し其の如く注意力を用ひて同一事を反復せんとすれば忽ち苦樂調子を變ずべし即ち注意力其のものが苦樂の調子を或は變化し或は破壊するに至るべし。又感情の同一状態に停止する能はざるの特質は其が反復の結果に影響すること大なり。例へば同一事を餘り屢々反復せんとする時は爲に苦痛の感を引き起こすが如きは是れなり。要するに複雑高上の感情に至りては同一事を反復することに

よりて如何なる結果を來たすべきか豫定し難き所あり其の變化し易く且精微なる本質は吾人をして容易に其の活動の状態を承知せざらしむ。彼の感情の教育の如きは重に反復といふ法則を利用するにあれど其の結果上の如く不明瞭なるを知らば感情教育の至難なる推して知るべきなり。

グラニューコン アップルヘーゼン 彌蔓と聯關 苦樂の兩調は言ふまでもなし一切の感情は皆彌蔓と聯關との

則に従ふ。そも／＼感情の生理的條件たる神經組織の活動するや單に其の重なる一局處のみが活動するにあらず件の一局處の活動はやがて之れに近接せる部

分を刺激し此の近接せる部分の活動はやがて亦他の部分を活動せしむ。故に一局處の活動は種々なる方面に其の作用を彌蔓せしむ。されば重に快なる情緒若しくは重に不快なる情緒は其の條件として殆ど腦の全面を活動せしむ隨うて斯くの如き感情は種々の方面に彌蔓すべきものなるを知るべし。

次に聯關といふことが苦樂の感に及ぼす影響を説明せんには知力分子又意力分子と感情分子との關係及び結合如何を論せざるべからず就中智と情との結合如何を説明せざるべからず。されどこは尙後に説明すべきとなれば爰にては聯關

といふ語を極めて漠然たる意義に用ふべし。夫れ吾人は最も幼稚なる時に於てすら既に聯關作用によりて最も單純なる苦樂の感と感覺若しくは想念とを聯結す。吾人は其の聯結の次第を明らかに意識せずと雖も自然に聯關作用によりて不知不識の間に此等を結合するものなるや明らかなり。例へば嬰兒が種々の味感嗅感皮膚感等を或は快なりとし或は不快なりとして兩者(感覺と感情)を聯結するが如し菓子といふ念は常に一種の快感に聯結せらるゝを見るべし。斯くの如く吾人は幼時より不知不識の間に感情分子を知力分子に結合するが故に知力上に行はるゝ聯關作用はやがて感情上の聯關作用をも起すべし。吾人が心的生活は斯くの如き作用によりて發達すること大なるものなり。

第十一章 發意イニテンスと運動ムーヴメント

上來單純なる感覺と感情とを説明せり意識の現象中には件の感覺と感情との外に尙一種の殊なる現象あり感覺にもあらず又感情にもあらざる特殊の心的元素これなり。智と情とに對して通常之れを意イニテンスといふ。本章に於て研究せんとするは意の最も單純なるものなり假に之れを發意イニテンスと名く。正當に謂ふ意イニテンスとは發達せ

る複雑の意識中に現れたる者の名なり其の單純なる状態に於ては之れを發作又は發意といふ方可なるべし。且や意といふ語は倫理學上又は宗教上種々の意義に濫用せらる故に讀者を誤解せしむるの恐あり。吾人は感覺並びに感情と相對して意の單純なるものを假に發意と名く。

感覺又は感情は各全く獨立して存在するものにあらざるとは前に説明せり即ち感覺は感情又は發意と相混じ感情は感覺又は發意と相混ず全く感覺若しくは感情のみといふが如き心的現象なし。之れと同じく發意も亦他の心的元素と相混ず單に發意のみといふが如きは便宜上の抽象のみ實際は斯くの如き現象なし。故に此の點に於ては發意は感覺と感情とに相似たりされどまた全く兩者と異なる所あり。感覺並びに感情には雜多の種類あり故に吾人は其の種類を大別するを得べし。然るに發意には種類なし發意といふ心的事實は唯一種のみ是れ感覺並びに感情とは趣を異にする所なり。發意に種類あるが如く思はるゝは之れと結合せる感覺又は感情に種類あるが故のみ發意其のものには何等の種類もなし。吾人は唯發意の現はるゝ條件事情等を借りて假に之れを分類するのみ。

發意の性質　發意とは何ぞや平易に言はゞ發動、發作、決力なり。如何なる心的事實にも又心的生活の發達の如何なる階梯にも處として發意の共存せざるはなし。心的生命は活動す其の活動の根原は即ち發意なり發作し發動するが故に心的現象あり發意なくば心的現象も無かるべし。吾人に感覺あり又感情ありされど此の感覺又は感情を發動さすべき力吾人に具はらば感覺も感情も全く無きに等しかるべし。故に發意とは吾人が或事を爲さんとする其の發動力なり發作力なり努力なり意識の活動的要素これを發意といふ。心的生活の原初多少の感覺と多少の感情との存する處には必ず既に多少の發意あり。故に吾人は發意なくしては感覺するを得ず又感ずるを得ず感覺し若しくは感ずれば既に焉か發意せることを記せざるべからず。一切の知覺、記憶、想像、思想孰れか發意の混入せざるものあらん。されば發意は心的生命の活動的要素なりと謂ふべし。

發意に關係ある、重要な二事あり曰はく身軀、諸部の運動曰はく注意力の方向と其の多寡即ち或意識の版圖に心的エネルギーを集注し若しくは分配すること是れなり。詳言すれば或事を發意せんとする時は吾人は之れに應じて身軀の或部分

を運動せしめ又其の發意せる事柄に注意力を集注分配す。故に身軀諸部の運動と注意力とは發意に至密の關係あり。暫く發意を離れて單に身軀上の運動と注意力との關係のみに就きて考ふるに兩者は互に相俟ち相關するものゝ如し。即ち身軀上の運動とは彼の腦髓の自發的活動、外部諸運動機關の様々な活動若しくは活動の傾向若しくは活動の條件等此等一切を含むとせば運動と注意力とは互に離る可らざる關係あるに似たり。されば前にも原初の注意力は筋肉の運動と離る可らざる關係ある由を説明しつ或心理學者の如きは注意力は筋肉にのみ働き又筋肉にのみよりて起こると主張せり。試に注意力を或感覺に向けよ然らば直に件の感覺の條件たる機關は運動すべし。又試に注意力を或想念に向けよ然らば直に之れに應ずる中樞機關と末端機關とは活動すべし。之れに反して末端機關が運動するか若しくは腦の運動機關が活動する時は注意力を惹起す。されば注意力は身軀上の運動に關係あり身軀上の運動はまた注意力に關係すると明らかならん。さて斯くの如く身軀上の運動に至密の關係ある注意力はそもそも如何なるものなるか。前にも既に説明せる如く注意力は意の性質を具へたる

もの活動的要素として其の中に發意の性質を含めるもの否意其のものい作用なり。然り而して原初の注意力は意識の如何なる版圖にも存在し且一切の心的生活の最も普通なる状態なりとせば發意即ち注意力といふ形を取れるものは亦一切の心的生活に存在するものなるを知るべし。即ち注意力は一切の意識の現象に存在するが故に發意も亦一切の意識の現象に存在するものなるを知るべし。然り而して身軀上の運動は注意力に至密の關係あるが故に發意は乃ち身軀の中樞並びに末端運動に至密の關係あるを知るべし。是れ意の原初の状態なる發意が身軀上の運動並びに注意力に關係ある所以なり。

發意の生理的條件　發意の生理的條件は各細胞就中中樞神經組織の微分子の自發的活動にあるものゝ如し。そもく身軀内部即ち各細胞内に起こる活動は本來外部の刺激に基きて起こるものなるか將た外界の刺激を俟たずして純粹に内部より發するものなるか。こは生物學上の大問題なり。或生理學者は一切の運動即ち下はアミイバの最も單純なる運動より上は人類の最も複雑せる運動に至るまで悉皆之れを反射運動インレフクシブに歸す即ち一切内部の運動は皆外界の刺激に應じ

て發生するものとす。されど斯く斷ずるはむしろ大早計なるべし吾人は却りて純粹に内部より起こる不可思議の運動あることを認めずばならず。某生物學者曰はくアミイバは其れ自らの意を具ふと是れアミイバには内部の不可思議なる自發的活動あることを認むる者の言なり。顯微鏡を用ひて最も精密にアミイバの運動を研究したる者は之れに不可説不可思議の自發的活動あるを認むべし。此等の學者は容易に一切の運動を反射作用に歸するの說には同意せざるべし。若し夫れ最も公平の見を持し最も緻密なる顯微鏡的試験を遂げたるものはいよく單純なる反射運動說に満足し得ざるべく更に况や高等動物の複雑なる現象に至りては到底斯かる單純なる説明の能く悉くすべきにあらざるをや。生物學の示す所によれば高等動物に進むに従ひて腦の中樞神經は身軀並びに心的生活を制禦することいよく緊要なるを見る即ち中樞神經が身軀並びに心的生活を制禦するに緊要なるの度は高等動物に進むに従ひて大なるを見る。されば最高動物なる人類の中樞神經は其の組織最も複雑緻密にして其の身軀並びに心的生活を制禦するの力は尤最も複雑を極む。故に人類の腦の自發的作用は他

動物に比して最も複雑緻密なり隨うて其の心的生活を駕禦する力も亦た最も複雑緻密なり。果して然らば斯くの如く複雑緻密なる中樞神経の活動は單に反射運動といふ簡單なる説明のみを以て能く悉くし得べきや否や。

されば發意の生理的條件は細胞内の自發的活動即ち内部より起こる活動なること稍明らかなり。こは吾人の未だ充分正確に斷ずる能はざる所なれど畧々正確にしか斷言するを得べし。即ち神経組織の自發的活動と心的生活の自發的活動とは互に相關係して離るべからず。但し神経の自發的活動が發意を起こすものなるか發意が神経の活動を起すものなるか將たまた心の自發と腦(物)の自發とは或實躰の兩面に外ならざるものか此等の疑問は哲學の範圍に屬す敢て科學的心理學の議すべき問題にあらず。科學的心理學は唯腦の自發的活動は發意に缺くべからざる生理的條件なるを認むるのみ。腦の自發的活動即ち腦の組織作用、血液の供給、身躰に及ぼす心の影響は是れ發意といふ不可説なる心的事實の生理的條件なるを認むるのみ敢て其の以上の説明を要せじ。

發意の心理的説明　發意を心理的に説明すれば下の如し。曰はく我れは何事

をか爲す我れは何事をか爲せるを知る我れは實に之を見之れを聞き之れを感じ又之れを見聞し之れを感じざるを知ると。是れ發意の意識なり。故に發意は前にも言へる如く活動的意識にして之れを活動の意識と稱するも不可なし。吾人が何事をか爲し若しくは力むるの意識これ即ち發意なり。故に發意は心的現象の如何なる状態にも混入せり。

然るにこゝに説を爲す者あり曰はく發意は必ず腦の自發的作用に基きて起こる故に發意とは腦の自發的作用の意識なり自發的作用を意識することは是れ發意なりと。然るにこゝに注意すべきことあり他なし腦の自發的活動は單に腦の神経組織の活動のみにして止まらず延いて身躰の他の部分を活動せしむ。即ち其の場合の注意力に關係ある感覺機關並びに其の自發的活動を傳ふべき支肢を鞏固になすを常とす。而して腦の自發的活動の、身躰の他の部分に傳はりて之れを鞏固になすの作用を發動作用モーター・アクションと云ひ自發的活動の起これる腦の部面を發動的部面といふ。此に於てか説をなす者は復曰はく發意とは腦の中樞より起こりて身躰の他の部分を鞏固になす所の發動作用の意識なりと。

發意は腦の發動作用の意識なりや否や即ち活動の意識は單に腦の發動作用の意識に過ぎざるものなりや否や。これ屢々學者間に異論を生じたる疑問なり。されど活動の意識を單に腦の發動作用の意識に過ぎずと會するは腦の發動作用にのみ重きを置きて活動の意識其のものゝ重要なることを忘れたるの說なり。發意は意識其のものなり決して發動作用の意識にあらず。發動作用は屢々も言へる如く單に發意の條件たるに過ぎず發意の條件が發意其のものなりとは言ふべからず。要するに斯くの如き說は發意の正當なる心理的説明とはいふべからず。發意の心理的説明に尙一の緊要なる事あり其は發意が感覺若しくは感情に變化影響を及ぼして之れを一定の方向に決定せしむること是れなり。換言すれば發意は事物を決定するの力なること是れなり。こは發意が身體上の運動作用に係あることより推知するを得べし。其の故は發意は感覺機關と運動機關とを鞏固にするが故に鞏固にせられたる機關を條件として起る感覺若しくは感情は勢ひ發意の影響を受けて變化せざるを得ざればなり。斯くの如く感覺若しくは感情が發意の命によりて一定の方向に活動する之れを發意の決定力に影響せら

れたりといふ。發意は常に他の心的現象中に混入し常に其の活動の方向を決定するものにして是れ實に發意の第一特質なり。然り而して發意の此の決定力は積極的と消極的との兩方にはたらく即ち或は積極的に或事柄を興奮し或は消極的に之れを禁止す。こは發意の發達せる意の隨意的活動を見れば明らかならん。我れは此の事柄に注意せんと決定し或は彼の事柄に注意せざらんと決定し若しくは身體の彼の部分を運動せしめんと發意し或は此の部分を運動せしめざらんと發意す。心的生活愈々發達すれば意の隨意的活動も亦愈々顯著なり道德上若しくは審美上吾人が殊更に感覺的境界を脱して高遠の思想感情を養成するが如きは隨意的選擇の最も顯著なるものなり。

運動の分類　發意には種類なし故に之れを分類すべからず唯發意によりて引起こさるゝ運動の種類を大別すべきのみ。然るに運動の種類を分別することは頗る困難なり之れが分類法を規定せんこと甚だ難し。蓋し心的現象の發起と運動との關係は頗る複雑なり此の一種の運動は必ず彼の一種の意識に應じ此の一種の意識は必ず彼の一種の運動に應ずといふが如きものにあらざれば複雑なる一種

の意識が混合して雑多なる筋肉の運動を起こすのみ。即ち雑多なる運動に應ぜ
る雑多なる意識には必ず之れに主要なる元素あり吾人は此の主要なるものを取
りて件の意識に命名す。例へば感覺の元素主要ならば之れを感覺の意識と言ひ
感情の元素主要ならば之れを感情の意識と呼ぶが如し。されば吾人は此の筋肉
の運動は必ず斯くくの心的活動に應じ彼の筋肉の運動は必ず斯くくの心的
活動に應ずとは言ふを得ず是れ運動の種類カテゴリーの分別し難き所以なり。

運動の種類は頗る多く其の發生の様はた頗る區々たり。或は感覺の運動あり或
は感情の運動あり或は何等一定の感覺も無く將た何等一定の感情も無くして單
に殆ど無意識に發動するものあり。又之れに反して一定の想念によりて引起こ
さるゝ運動もあり吾人が日常一定の想念を想浮べて之れに従ひて身體を運動せ
しむるものは是れなり。此等種々なる運動は其の發動の様亦頗る區々たり。例へ
ば吾人が身體の或部分を活動せしむるも單に感覺分子の發生のみ多くして發意
若しくは感情分子の生起は甚だ少なきことあり。而も割合に強からざる感覺が
感情分子と結合せる場合には激しく身體に運動を起こさしむることあり。且や

身體の或一部分の運動は單に其の一部分の運動のみに止まらずして廣く他の部
分をも運動せしむるが常なり。日常吾人經驗するが如き割合に強からざる刺激
は他部分に影響を及ぼすこと甚しからずと雖も様々なる刺激が輻濺して來たる
か又は強大なる刺激を受くるときは當の部分の運動は延いて他部分をも運動せ
しむること大なるものなり。されば一見同一運動なりと思はるゝものも或時は
甲種の意識に應じ或時は乙種の意識に應ずることあり。即ち一見同一運動にし
て種々相異なる意識に應ず。是れ運動の種類カテゴリーのますく分類しがたき所以な
り。

さもあれ諸運動を引起こすべき意識の重なる現象に就きて其の種類を大別すれ
ば下の如し。

第一偶然自發的運動 ランダム・オートマチック・ムーブメント 一定の感覺、想念、感情によらずして殆ど無意識的に發
動するものをいふ。

第二感覺發動的運動 センソリ・モーター・ムーブメント 感覺によりて引起こされたる運動をいふ。或學者は
別コングニツトに之れを有意識的反射運動と名けたり蓋し此の種の運動は感覺によりて引

起こされたる單純のものなれば殆ど通常の反射運動に類せり而も一定の感覺によるが故に之れを有意識的といへるなり。

第三感情發動的運動 感情によりて引起こされたる運動をいふ。

以上三種の種々なる結合によりて下の如き運動あり。

第四衝動的運動 感覺と感情とによりて起こされたる運動なれど何等の思慮目的も無くして發動するものをいふ。

第五本能的運動 一種の衝動的運動なり唯異なる所は其の運動が自ら自衛の途に合ひ且知らず識らず遺傳的知識を基とせる點にあり。

第六想念發動的運動 想念によりて引起こされたる運動をいふ。たゞし想念は純粹に想念のみなることなし必ずや多少感情を交ふるが故に想念發動的

運動はまた多少感情發動的運動なりと知るべし。

第七模倣的運動 他人の身軀の運動するを見て我れの不知不識に之れを真似るをいふ。例へば嬰兒が母の微笑を見て共に微笑し母の涙を見て共に泣くが如し。

第十二章 想念

心的生活は如何にして發達するか。舊來の心理學者は曰はく心的生活は記憶力といふ一種の能力に頼りて漸次に發達すと。されど複雑なる心的生活の發達するには其の中の種々なる心念が確く意識に記憶せられて其の意識に屬するの心念として存すべきは言を俟たず特に記憶力に頼りて發達すといふの要なし。されば近代の心理學者中には記憶力といふ一種特別の能力を立つるを許さず心的生活は單に感覺の種々なる結合分離に過ぎずと説く者多し。そもく記憶力とは何ぞや又如何なる意味に於て記憶力といふ能力を立つるを得べきか。此等はすべて後に詳説すべし本章に於て研究せんとするは吾人の意識に記憶せらるる心念の性質並びに其の條件なり。語を換へて言へば吾人の意識に記憶せられて心的生活を構成する所以の心念の性質並びに其の條件これなり。斯くの如き心念を假にこゝには想念又は再現的心象又は單に心象と名く。蓋し心象とは意識に映りたる事物の象の義、意識に記憶せられ意識に印銘せられたる事物の象の義、之れを再現的といふは一たび感覺によりて意識に印銘せられたるものが後幾た

ひも意識の表面に出現すればなり。又之れを想念といふは心象は智に属する心念にして思想の基となるものなればなり。一言を以て蔽へば想念とは智を構成する所以の單純なる心的現象なり。心的生活の發達は實に雜多なる想念の發達に基けり一切の知覺、想像、思想其の他感情並びに意志の種々なる状態は皆種々なる想念の種々なる變化離合に基けり。故に先づ想念の性質並びに其の條件を明らかにし且其の變化の法則を究むる時は一層明らかに心的生活の如何なるものなるかを知るを得べし。想念の何たるかを知らずしては吾人は實に心的生活の何たるかを知る能はざるなり。

想念の性質　　想念とは元來感覺的機關によりて意識に印銘せられたる事物の念の義なり。其の感覺と異なるは感覺は直接外界の刺激に應じて意識内に起る現象なれど想念とは件の感覺の意識内に記憶せられて其の意識に屬する心念となりたるものをいふ。故に感覺は必ず外界の刺激に應じて起るものなれど想念は意識内に記憶せられたる感覺にして外界の刺激なくして意識の表面に再現するものをいふ。想念の性質を明らかにせんとせば吾人が一の感覺を受けた

る後やがて意識内に起るべき現象を觀察すべし。例へば我れは今蠟燭の火を見たりとせよ蠟燭の火といふ感覺は暫く意識に留まりて其の赫灼たる焔は眼を塞づるも尙明らかに之れを感ずべし。然るに暫時にして件の感覺は漸々消滅し容易に最初の赫灼たる状態を想浮ぶるを得ざるべし而も尙後象と稱する漠然たる象を眼前に感ず。此の後象は尙感覺に屬す。さて斯くの如き後象全く消滅せる後再び燭火の感覺を想浮べんとするも吾人は通常其の當初の感覺の儘には之れを想浮ぶるを得ざるべし其の複雑さに於ても其の明瞭さに於ても後に想浮ぶる所は當初の感覺に劣るが常なり。吾人は僅に當初の感覺を斯く／＼まか／＼のものなりきと想像して頗る漠然たる心象を想浮ぶるに過ぎず。此の想浮べられたる念は即ち想念なり。故に想念は外界の印象即ち意識内に留まれる感覺ともいふべく又は「最初の心象」ともいふを得べし。即ち感覺といふ作用を経て意識内に記せられたる事物の象はこれ即ち想念なり。

想念若しくは心象を意識内に記せられたる事物の象といふ時は想念とは單に眼にて見たる物の形若しくは感覺の方面にのみ限れる印象の如く聞こゆれど然ら

ず一切の感覺一切の感情並びに一切の意志に關する心象は皆ひとしく之れを想念と名く。即ち聽感より得たる想念あり筋肉感より得たる想念あり温度の感より得たる想念あり關節感より得たる想念あり必しも視感のみより得たる心象のみ指せるにあらず。又吾人は嘗て受けし感情若しくは嘗て經驗せし發意を記憶して能く之れに關する想念を再現するを得。即ち感情の想念あり意志の想念あり。斯るが故に想念は心的生活を構成し又實に之れを發達せしむる所以の重要な元素なり。心的生活が如何に想念を作用によりて變化し且發達するものなるかは尙後に詳しく説明すべし。

想念は斯く嘗て意識に印銘せられたる感覺感情若しくは發意なり斯るが故に之れに再現力あり。再現力とは一想念が其の原形なる感覺感情若しくは發意を代表し其の原形にまたがひて一定の心的現象を表出するの力をいふ。尙平易に言はば吾人は嘗て經驗せし感覺感情若しくは發意を再三想浮ぶるの力を具ふ即ち我は嘗て何事を感じしか又は何事をか考へしかを再び心中に想浮ぶるの力を具ふ。此の想浮ぶるの力は即ち再現力にして想浮べられたる者は即ち想念なり是

れ想念には再現力具はり想念は再三其の原形を取りて意識の表面に出現すといふ所以なり。さて想念は斯くの如く其の原形を再現するものなりとせば果して原形を其のまゝに再現するものなりや否や。こは各自の經驗によりて明らかなる如く其の原形なる感覺感情若しくは發意と其の代表者なる想念とは種々なる點に於て頗る異なり決して兩者想念と其の原形とを同一なりとはいふべからず。其の差の著き點を擧げんに例へば其の原形なる感覺は強弱の度に於ても複雑さの度に於ても將た靈活さの度に於ても想念の漠然たるに勝れるが常なり。想念は其の原形なる感覺を其のまゝには再現するを得ず其の再現する所は感覺よりは概ね薄弱に單純に且靈活を欠けるを常とす。志かのみならず最初感覺を受けし時より之れが想念を再現する時に至るまで其の間久しきを經過する時は又強弱の度に於ても複雑さの度に於ても將た靈活さの度に於ても想念は常に感覺に劣るが常なり。感覺を經驗せる時と想念を再現する時との間隙いよ／＼久しきにあたれば想念はいよ／＼薄弱に單純に且靈活さを欠くに至るべし。されば想念の性質は二の重要な事によりて變化すといふべし(第一)其の原形な

る感覺、感情若しくは意志に類似すると類似せざるにより(第二)當初の感覺、感情若しくは意志を経験せし時と之れが想念を再現する時との間の長短によりて其の性質に差を來たすものといふべし。

想念作用アイデーショウの生理的條件 上の説明によりて明らかなる如く想念作用は一たび經驗せし感覺、感情若しくは意志を我れの想念となして之れを意識に記憶しおき必要の場合に應じて幾度も之れを再現するの作用をいふ。即ち一旦印銘せられし心象は長く我が意識に記憶せられて我れの想念として幾度も再現せらるゝの作用をいふ。さて斯くの如き心的現象の行はるゝには必ずや之れに應ずる生理的條件なかるべからず。抑、生物學上の普通の法則によれば一般神經組織中の細胞は皆多少記憶作用を具へたり。其の意義は下の如し曰はく細胞の過去の活動は現在の活動に影響し現在の活動は又將來の活動に影響し決して箇々別々に活動するとなく皆前の活動の影響を受く。然り而して同一活動にして幾度も反復せられし者は件の活動が習慣となりて永く將來の全軀の活動に影響す。此に於てや新活動は常に舊活動を記憶し之れが習慣を襲うて同一活動を遂ぐるを得。

之れを細胞は記憶作用を具へたりといふ。更に詳に説明せんに彼の生命なき微分子の活動を見ても明らかなる如く過去の活動は皆現在並びに將來の活動に影響し必ず過去の歴史を現在に傳ふるものなり。生物に具はれる細胞の如きは時々刻々に新陳代謝すと雖も舊細胞は新細胞に影響し新細胞は舊細胞の一切の活動の状態を受けて永く其が歴史を滅するとなし。斯るが故に生物の發達には必ず連続あり其の間断續して支離滅裂なるものにあらず渾然ちのづから一軀となりて密に相連続せり。されば其の發達の次第は如何に千變万化なりとも現在の活動は常に過去の活動を遺襲して誤ることなし。これ先きに比喩的に細胞には記憶作用具はれりと謂ひし所以なり。新活動は常に舊活動を記憶して之れが習慣に老たがひて活動すればなり。

上の生理學的法則は孰れの神經組織をも支配せり。體軀の各處に散布せられたる神經組織も末端機關に具はれる神經組織も反射運動の機關なる脊髓神經も將た腦の下部なる神經組織も一として上の法則に支配せられざるはなし。就中心理的な神經組織と謂はれたる腦に至りては此の法則に支配せらるゝこと最も著し

其の神経細胞と纖維とを問はず皆嚴密に此の法則に従ふ。吾人は各々異なる歴史をもてる脳を具へたり脳を異にせるによりて其の歴史も異なり各人の脳は各々殊別の記憶作用を具へたりと謂ふべきなり。

想念作用は上の如き生理的條件によりて行はる。即ち有機的記憶作用は心理的記憶作用即ち想念作用の條件たるなり。

原形に對しての想念　　想念を其の原形に對比する時は一層明らかになり其の性質を學ぶを得べし。殊に上の生理的條件による時は想念と其の原形なる感覚との異同を一層明らかになり知るを得べし。蓋し感覚と想念とは同一の神経活動を生理的條件となすが故に此の點のみに於ては感覚と其の想念とは相似たり。而も感覚は重に末端機關の神経活動によりて惹起せられ其が想念は重に中樞機關の活動によりて惹起せらる故に此の點に於ては兩者は異なるなり。或點に於ては兩者は頗る相近く或點に於ては頗る相異なるなり。是れ吾人が屢々感覚と其の想念とを區別しがたき所以なり。素より兩極を取りて言はば一は末端機關によりて起こり一は中樞機關によりて起こるが故に兩者は全く異なるなり而も吾人は兩者の

間に截然たる區別を施すを得ず感覚の終は想念にして想念の初は感覚なればなり。

上は生理的條件に就きて感覚と想念との異同を見たるものなるが次に單に意識の現象を観察したるのみにても上の事實は明らかなり。即ち感覚と其の想念とを對比するに下の三點に於て兩者に異同あるが如し。曰はく(一)強弱の度曰はく(二)感性的内容の單複曰はく(三)客觀性の大小これなり。下に想念には此等三態の具はれる事を説明すべし。

此等三態の想念に具はれることを説明するに先だちて一の注意すべきことあり他なし想念が此等三態を具へたりと謂ふは第一想念は其が原形の強弱に應じて多少強弱の度を具へたりと先定し第二想念は單に感覚の漠然たる騰寫のみにあらずして量の差並びに質の差をも具へたりと先定せるものなること是れなり。蓋し學者によりては或は想念と感覚との差は單に量即ち強弱の度の大小のみに過ぎずと説く者あり或は又兩者の差は單に質の上のみに存すと説く者あり。古き英國の心理學者の如きは概ね前説を主張せり。されど兩説共に偏せり吾人は

感覺に就きて質の差並びに量の差を見るが如く想念にも同じく質の差並びに量の差の存するを認めずばならず。

想念に強弱の度あることは日常の経験によりて明らかなり。平易に言はば心象の活き／＼せることは是れなり。例へば最も眼の心象を浮ぶるに巧なる人の如きは己が欲するまゝの物象を最も靈活に心眼に想浮ぶるを得べし。或は風光明媚なる山水の景をあり／＼心眼に浮べ或は遠き朋友知己の面貌をさながらに眼前に想浮ぶるが如し。又例へば耳の心象を浮ぶるに巧なる者を見よ彼れは自在に音響を心耳に聞く。或は秋の夕暮未だ何等の音をも聞かざるに忽焉遠寺の晚鐘を聞き或は居ながら瀑流の直下するをさながらに聞くが如く感ずるは皆想念に靈活フレキシブルの具はる所以なり。又例へば激しく頭部を打撃せられし折の事を想ひ或は齒科醫に齒を抜かれし折の痛苦を回想する時の如き能く稟然たるを得ざる者幾人ぞ。されば想念其のものに或は多く或は少なく強弱の度の具はれることは明らかなり。假令人によりて其の度を異にすとも全く強弱の度なしとは言ふべからず。

次に想念は感覺とひとしく多少の感性的内容を具ふ。既に感覺の章にも説明せらる如く感覺は決して單一の元素のみより成るものにあらず必ず多少複雑せる諸元素より成る吾人が便宜のため最單純の感覺と稱するものだけに實は多少複雑せる諸元素より成らざるはなし。されば斯くの如き感覺の陰寫たる想念のものづから多少複雑せる内容を具ふべきは殊に説明を俟たずして明らかならん。吾人は嘗て經驗せる事物を想念に浮べて特に其の事物の詳細なる屬性を想像するを得。例へば一箇の林檎といふ想念を浮べたりとせよ啻に其の成熟せる色合を想浮べ得るのみならず其の肉の硬軟核の模様之れを口にせる時の感等を一々細密に想浮ぶるを得べし。即ち吾人は仔細に林檎の屬性を想像するを得べし。是れ吾人が嘗て感覺によりて經驗せし感性的内容をば再び意識に想浮ぶるものなり。之れを想念には感性的内容具はれりといふ。原形なる感覺のまゝに充分其の内容を想浮べ得たる想念は最も多く感性的内容を具へたりといふべく又斯くの如き想念は最も實物に類似せるものといふべし。

想念の感性的内容といふ事に就きて同一の注意すべきことあり他なし感覺が多

少苦樂の感に伴はるゝが如く想念も亦此等苦樂の感に伴はるゝことこれなり。然り而して最も屢々意識の表面に出現する想念は最も多く苦樂の感に伴はれたる想念にして此等の感情に伴はれたるものが最も注意せらるゝ想念たるなり。而してまた斯くの如き想念が最も感性的内容に富めるものと稱せらる蓋し苦樂の感に伴はれてこそ想念は其の感性的内容を完全し因りて最も生氣ある想念と稱せらるべければなり。嘗に想念は苦樂の感に伴はるゝこと有るのみならず亦發動作用に伴はる。發動作用とは前に説明せる如く感覺機關の活動より起る身軀各部の發動することなり。感覺が此等發動作用によりて其の作用を全うするが如く想念も亦此等發動作用に伴はれて始めて最も生氣ある想念と稱せらる。されば想念は其の原形なる感覺の内容に應じて或は多く或は少なく感性的内容を具へ且苦樂の感と身軀の發動作用とに伴はれて或は多く或は少なく生氣あるものとなる。以て想念の單に感覺の漠然たる謄寫のみにあらざるを知るべし。斯くの如く想念は強弱の度を具へ且感性的内容を具ふるが故にあのづから亦多少の客觀性を帶ぶ。客觀性を帶ぶとは外物の客觀的に存在するが如く例へば林

檜といふ想念がさながら客觀的に存在するが如く心眼に見ゆるをいふ。想念の量いよ／＼多くして其の質いよ／＼精ければ其の客觀性を帶ぶることも亦いよ／＼大なりとす。

さて以上の諸點に就きて想念と其の原形なる感覺とを比較するに孰れの點より見るも想念は概して感覺到劣れり。即ち強弱の度より言ふも想念は概して感覺より弱く又内容の單複といふ點より言ふも想念は概して感覺ほどに精密ならず苦樂の感と發動作用とに伴はるゝの度も亦少なし隨うて感覺は想念に比して其の客觀的なるの度一層大なり。以て想念と感覺とを混同するの虞なし。想念と感覺とは全く異なれりといふを得べし。但し前にも言へる如く兩者は互に相接觸せり其の間に截然たる區劃を施すべからざるは言ふまでもなし。

想念の範圍　以上説明せし所は想念の原形を重に感覺到限れり即ち想念は單に感覺のみの想念なるかの如く説明せり。心的生活の幼稚なる時に於ては想念は重に感覺より成るが故に去か説明するも強ち非なるにはあらず。されど仔細に意識の現象を觀察する時は想念は決して感覺のみより成るものに非るを發見

すべし。即ち吾人は嘗て直覺せる事物を想念となすのみならず嘗て考へし事、想像せし事、行ひし事、記憶せし事、推理せし事、談論せし事等を想念として之れを再現するを得。語を換へて言へば、一切智力上の現象をば之れを想念として意識に再現するを得べし。是れ想念は單に感覺のみより成るものにあらず其の範圍は一切の智力上の現象にわたると言ふ所以なり。されば意識には單に感覺の想念あるのみならず又實に想念の想念あるなり。吾人は嘗て想念となせし事柄を記憶して更に之れを意識に再現するを得。而して斯く吾人が嘗て経験せし想念作用を肥臆して更に之れを想念となし得るは其の理頗る知り難きに似たれど實は之れを解説すること難きにあらず。蓋しこは感覺を想念として肥臆すると一般同一の想念作用に外ならざればなり。而して此の種の想念が具ふる強弱の度、感性的内容の單複、並びに客觀性の多少等は其の原形なる想念の質量に應ずべきと論を俟たず。

又想念の範圍はひとり智力上の現象のみに止まらず更に感情の想念あり。素より感情と想念とは其の質全く異なり感情はたゞ感じてのみ知らるべきものなれば想念が感情を再現するとは甚だ難きに似たり。感情ならざる想念が感情を再現するの理なければなり。然るに日常の經驗によれば吾人は嘗て経験せし愉快なる感情若しくは苦痛の感情を肥臆して多少之れを想念に浮ぶるを得。此の理を知るは難きにあらず。蓋し感情の章にも説明せる如く感情は感覺に伴ふものなり感覺と結合して共存するものなり。故に快なる感覺あり不快なる感覺あり。此等快又は不快の感覺が一旦想念となりて意識に記せらるれば其の再現せらるゝや吾人は直に之れに應ずる苦樂を感ずべし。想念の上に起これる感情は實際の感情に比して薄弱なるを常とすれど激烈なる感情に伴はれたる感覺は之れを想念に浮べてすら頗る激烈の感情に伴はるゝものなり。知るべし感情は元來再現せらるゝを得ざるものなるも智の元素に附隨して想念の上に再現せらるるものなるを。

想念の範圍はひとり智と情との現象に止まらず亦意の上に及ぶ。即ち意志の想念あり。意志の想念とは何ぞや他なし吾人が嘗て發意せし事、決定せし事、選擇せし事を想念の上に浮ぶることを是れなり。意志も亦感情と同じく其れのみにては

再現せらるべきものにあらざるも智の元素と結合して存するが故に強き意志を伴へる感覺が再現する時は之れを意志の想念の再現と稱す。素より意志には種類なし而も種々なる智の元素が之れと結合して種々なる意志を造る。是れ意志の想念に諸の種類ある所以なり。

以上説明し來たれる如く想念の範圍は智情意の三方面にわたる。心的生活の大部分は實に想念の種々なる變化離合に外ならずといふを得べし。感覺せる事柄は勿論或は感じ或は選擇せることは一切想念として之れを意識に記憶しよ。意識は實に無數の想念を蓄藏せる藏庫ともいふべし。此の蓄藏せられたる想念が種々雜多の方向に活動する是れ即ち意識の智力作用なり。意識の三方面中智力分子の活動とは重に件の想念の種々なる活動に外ならず。

第十三章 想念作用の次第

前章説明せし如く想念は心的生活の最も重要な元素なり此等想念の蓄積によりて心的生活は富贍となり此等想念の千差万別なる離合によりて種々なる心的生活と稱するもの構成せらる。果して然らば此等想念作用の次第は如何。換言

すれば此等雜多無數の想念は如何なる次第を経て結合し若しくは分離するか如何なる順序によりて意識の表面に再現し若しくは其の裏面に消滅し去るか。一言を以て蔽へば諸の想念の再現せらるゝ根本法則は如何。是れ心的生活の發達を記するに當たりて最も重要な問題なり。蓋し意識の三方面なる智情意のうち想念作用といふ智的要素の結合は心的生活中最重要の現象なり此の現象の依りて以て變化する根本法則を知るにあらざば全く心的生活を理解し得ずといはんも不可なければなり。

多數の心理學者は想念作用の根本法則を會して聯關法アソシエーションとなす。聯關といふ語は古くはアリストートル以來慣用せられて今日尙多數の學者の是認する所なり。就中或英國派の心理學者の如きは聯關法を以て一切の心的現象を説明せんとし爲に聯關學派の名を博するに至れり。想念作用の次第を研究するに當たりて聯關といふ一事の如何に多數學者に重要視せらるゝかを知るに足らん。吾人が本章に於て研究せんとする所も亦件の聯關法に外ならず。想念が互に相聯關すとは如何なる意義か何が故に想念は互に相聯關するか其の聯關の根本理は如何。

此等は主として本章に研究せんとする所なり。たゞし此等聯關作用を説明せんとするに先だちて注意すべき事あり其は或聯關學派の説の如く一切の心界は單に「想念の聯關」といふ一事のみを以て説盡し得べきにあらざる事これなり。心界は單に想念のみより成れるものにあらざる情の作用あり意の作用あり此等は皆想念作用に重要な關係あり。單に「想念の聯關」のみをもて一切の心界を説盡し得べしとなすが如きは心界の半面を遺却せるものと首ふべし。故に吾人が想念の聯關を研究するは其の旨之れによりて一切の心的現象を説明せんとするにあらざる現象を知るを得ざればなり。斯くの如く想念の聯關といふ事に至當の價値を置きてさて吾人は徐に聯關法の何たるかを説明せん。

想念の聯關とは其の語の示すが如く一の想念が他の想念と結合して一躰をなすとなり。語を換へて言へば諸の想念は互に相結合するの力あり彼れは此れに影響し此れは彼れに影響して互に相聯關す即ち諸の想念は個々獨立する殊別のものにあらざして恰も連鎖の如く互に相結合して種々の圓躰を造る。此の圓躰中

の殊別の一想念が意識の表面に再現するときは之れに伴ひて他の殊別の想念も亦意識の表面に再現す。例へば秋の夕暮といふ想念が遠寺の鐘といふ想念と互に相結合して一躰をなせりとせよ秋の夕暮といふ想念再現せば之れに伴ふて遠寺の鐘といふ想念も亦再現すべし。彼れは此れを喚起し此れは彼れを喚起す。之れを想念の聯關といふ。

上の如き聯關作用は二の事實に基きて成る。曰はく意識の各版圖は意識の全現象中の一分なること曰はく想念は關係的の者なること是れなり。(第一)意識の各版圖は意識の全現象中の一分なりとは一定の時間内に意識の表面に再現する想念は意識全分の現象にはあらざして其の一分に過ぎざるとなり。如何に注意力を強めて一時に多數の想念を再現せんとすとも心的エネルギーには自づから一定の制限あり其の再現せらるべきは無數現象中の一分に過ぎじ。勿論其の再現せられたるもの裏面には幾多無數の元素は潜伏すべし而も吾人に意識せらるる現象は到底無限現象中の一分に過ぎざるなり。(第二)想念は關係的の者なりとは想念は個々獨立のものにあらざして皆互に相關係するものと言ふの義なり。

既に感覺の章に於ても感覺は互に相關係するものなることを説明せしが想念に至りては殊に其の著きを見る。彼の想念は此の想念に影響し此の想念は彼の想念に影響す相互の間に和合あり離反あり決して互に孤立して存在するものにあらず。想念の「引力」想念の「混和」想念の「排除」などいふは皆諸の想念の間に種々の關係あるに基けり。

斯くの如く想念には互に相關係し得るの作用あり斯るが故に一の想念と他の想念とは互に相結合し若しくは分離す。又吾人は一時に多數の想念を再現するを得ず甲の想念の後に乙の想念を、乙の想念の後に丙の想念を再現すといはんが如く順次に一分づゝを再現す。斯るが故に嘗て一躰に連結せる諸の想念を時を費して漸次に再現す例へば秋の夕暮の後に遠寺の晚鐘を再現し晚鐘の後に亡友の葬儀を再現し更に亡友の容貌等を順次に再現するが如し。即ち元來一瞬時に印銘せられし諸の想念をば或時間を費して漸次に再現す。是れ想念の聯關作用の起る所以なり。一方に於ては互に親和し得る諸想念が結合して一躰となり他方に於ては件の結合せられたる諸想念が其の中の一想念に喚起せられて漸次意

識の表面に再現す。故に意識の各版圖が意識の全現象の一分なること並びに各想念の關係的なることは聯關作用の因りて起る所以なり。

想念の連続 以上聯關作用の成る基を説明せり因りて之れより更に聯關作用といふことを詳説すべし。吾人は通常一の想念は他の想念に頼りて喚起せられたりと言ひ又は一の想念は他の想念に伴ひて再現すといふ。即ち一の想念と他の想念との間には多少因果の關係に類せるものゝ存立せるが如く理會す。果して一の想念は原因にして之れに伴へる他の想念は其の結果なりや否やは哲學上の問題なり吾人科學的心理學者はたゞ一想念の後に他の想念が隨伴し來たるといふ事實を認めれば足れり。即ち聯關想念は一時に悉皆再現するものにあらずして甲想念が乙想念を喚起し乙想念が丙想念を再現すと言はんが如く時を追うて漸次に再現す。時間といふことは聯關作用に缺くべからざる條件なり。而してこは前に記せる意識の各版圖は意識の全現象の一分に過ぎざることより起る必然の結果なり。然り聯關作用は或時間内に行はる斯るが故に聯關想念は互に相連續して再現す。例へば春といふ想念の後に花來たり秋といふ想念の

後に月來たると云はんが如し。然るに茲に重要なる疑問あり其は何故に春の後に月來たるとなく秋の後に花來たるとなく春といへば必ず花秋といへば必ず月が再現するか換言すれば何故に一定の想念の後に他的一定の想念が來たるか何故に甲想念の後に乙想念の之れに伴はずして特に乙想念が伴ふか是れなり。上の疑問に對する解答は下の如し。曰はく嘗て一眸に結合せられし想念の連続と同一なる條件が再び起こる時は此の場合の想念の連続は嘗て一眸に結合せられし想念の連続に同じかるべしと。換言すればひとり想念の簡單なる連続のみならず最も複雑せる連続と雖も皆原形なる印象の連続のまゝに再現せんとする傾あるものなり。例へば一旦強く春の後に花を結合しおかば想念も亦其の順序にしたがひて再現し又秋の後に月を結合しおかば想念も亦之れに應じて再現するが如し。さもあれ心界は複雑なり想念の連続は常に其の原形の連続のみに應ずるものにあらず否其の印象の連続のまゝなるは實際極めて少なし。其のをりくの事情にしたがひて印象のまゝなる連続に變化を及ぼすと極めて多し。たゞ強く印銘せられたるものゝみ能く其の原形にしたがひて再現するに過ぎず。」

古來聯關作用の法則に就きて説を立てたる者頗る多し吾人は此等諸説を評するに先だちて確實に斷言し得ること下の如し。曰はく共存の法則は一切の聯關作用の根本法則なりと。そもく共存の法則とは何ぞや又其の根本法則なる所以は如何。下に之れを詳説すべし。

共存の聯關 アソシエーション、バインディング、コネクション 所謂共存法は一切の聯關作用の根本法則と謂ふべし。共存の聯關とは時間上並びに空間上一旦共に連結せられし諸想念は其の中の一想念の再現するに伴ふて他の想念も亦再現するをいふ。語を換へて言へば一旦共に連結せられし諸想念は其の後も常に相聯關して再現するの傾あることをいふ。而して斯くの如き心的作用を概括して心的生活は共存法に支配せらるるといふ。蓋し時間上若しくは空間上曾て共に存立せし諸想念は其の後も相聯關して再現せらるゝの傾向あればなり。例へば吾人は春といへば花を想浮べ花といへば上野向島を想浮ぶるは何ぞや是れ吾人は曾て春花、上野等の諸想念を共に連結して意識に記憶しおきたればなり。若し一旦曾て共存せし諸想念が其の後も相聯關して再現すること無しとせんか吾人は如何にして事物を想像し思想するを得べき。

些も互に關係なき雜多の想念みだりに再現せば吾人は殆ど一事だに明瞭に思想するを得ざるべければなり。

故に共存的聯關の特質を明かにせんとせば實際意識の表面に再現する諸想念の皆群をなし團をなし列をなせるを見るに如くはなし。心的生活は或は大なる或は小なる群をなし列をなせる想念作用の層々連続せるものと謂ふも不可なし。

而して此等群をなし列をなせる諸想念は皆曾て時間上若しくは空間上共に連結せられしものにして其の中の一想念再現すれば他の想念も亦之れに聯關して再現せらるゝものなり。若し諸の想念は些も群をなさず列をなさず箇々分離して存在せんか樹木に聯關して枝葉を想浮ぶるを得ず枝葉に聯關して花實を想浮ぶるを得ず心界は極めて雜多豹斑なるものとなりて何等の事物をも思想する能はざるべし。然るに吾人が能く想像し思想し得る所以は曾て一體に結合せられし諸想念が皆群となり列となりて存在し其の中の一想念の再現せらるゝにつれて之れに關係ある他の諸想念も亦再現せらるればなり。此の故に共存の聯關といふことは心的生活の發達に大なる關係あり若し斯くの如き聯關なしとせば心的

生活は殆ど成立せずといふも不可なし。教育上同一事を丁寧反復して教授し以て強く共存の諸想念を造るは此の理に基けり。

曾て共存せし諸想念が其の原列のまゝに再現することは吾人が日常の作業に大なる便宜を與ふ。例へば食事、歩行、談話等の定まりたる作業をなすに當たりて一諸想念の連續を熟考するが如くば其の煩瑣なることは意外なるべし。然るに一定の想念の連續が殆ど習慣となりて常に原列のまゝに再現するが故に殆ど意を用ひずして或は食事し或は歩行し或は談話するを得。而して斯くの如き一定の想念の連續は人によりて異なり人を異にするによりて想念の連續を異にする人によりて其の心を異にする所以なり。試に心界に起伏する諸想念を觀察せよ甲なる一群の諸想念は乙なる一群の諸想念を喚起し乙は又丙なる他の一群の諸想念を喚起す。斯の如くして心界には群をなし列をなせる諸想念の連續の絶ゆることなし。而して此等諸想念の連續中には原列のまゝなるもの甚だ多し。

此等は皆吾人が日常の作業に至大の便宜を與ふるものと知るべし。然りと雖も共存的聯關には單に原列のまゝなるものゝみならず別に原列のまゝ

ならざるもの甚だ多し。原列のまゝならざるものに就きて注意すべきこと二あり。

(第一) 共存的聯關の諸想念は互に相影響す。互に相影響すとは甲は必ず乙を乙は必ず丙を丙は必ず丁を喚起すといふにあらざりて或は乙が甲を喚起し或は丙が乙を喚起するといふが如く原列を破りて相互に聯關するをいふ。尙詳言すれば共存的聯關には原列のまゝなるもの又は直接に結合せられたるもの、再現を多しとすれど又別に曾て直接に結合せられざるもの又は原列のまゝならざるものあり。即ち或は連續の位置を轉じ或は間接に結合せられたる想念を喚起するものあり。こは皆群をなし列をなせる諸想念が互に相影響するに基けり。(第二) 共存的聯關作用の中には收縮コンクンクションと名くべき作用あり。再現の際一群の全想念が再現せられずして或は其の中の二三の想念が省察せられ或は其の中の少數なる想念が他の諸想念を代表するをいふ。例へば甲乙丙丁戊己は原列のまゝなる想念の一群なりとせよ甲の再現する後直に乙が喚起せられずして急に戊己が再現せられて丙丁は全く再現せられざるが如き是れなり。蓋し吾人は通常一群の全想念の列を悉皆再現せんと努むる者にあらず時々の場合に應じて其の中の一想念を再現せんを目的となす。故に一群中の他の想念は之れを省察して再現せず直に其の目的とする想念のみを再現せしむ。尙換言すれば省略せられたる諸想念は或は其の中に一想念によりて代表せられ或は漠然たる一躰の想念となりて之れを代表し以て目的の想念を喚起す。而して斯くの如く必要なる想念のみ再現せられて不必要なる想念の省略せらるゝことは吾人に大なる便益を與ふ。若し吾人が一想念を再現せんと欲する毎に曾て共存せる全想念が悉皆再現せんか無用なる雜多の想念に壓倒せられて吾人は能く目的とする想念のみを想浮ぶる能はざるべし。集縮作用の要以て見るべし。

聯關法に關する諸説 以上共存聯關法を説明したるが此の外に尙數種の聯關法を説く者あり。曰はく類似聯關曰はく對照聯關曰はく因果等。類似聯關とは類似せる想念は互に相聯關して再現することをいふ。例へば我れに二人の朋友あり其の容貌互に相似たりとせよ甲を想ふ時に之れに附隨して乙を想ひ乙を想ふ時に之れに附隨して甲をも想浮ぶ。是れ甲乙といふ二の想念は互に相類似せ

るが故に一方再現せらるれば他方も亦之れに聯關して再現せらるゝなり。晚秋の荒寥たる景を眺めては西行法師が「心なき身にも」と咏みたりし鴨立澤を想出し、皚々たる白雪を眺めては或は香爐峯を想浮べ或は富嶽を想浮ぶるが如きは皆これ「さみしさ」「雪」などいふ類似の想念が互に相聯關して他の諸の想念を再現せしむればなり。次に對照聯關とは反對せる想念が互に相聯關して再現せらるゝをいふ。黒によりて白を想出だし明によりて暗を想出だし大によりて小を、東によりて西を想浮ぶるが如し。此の外因果又は方法と目的等の聯關法を數ふる者ありれど此等は特に聯關法として枚擧すべきものにあらず。

上の如く心理學者は古來數種の聯關法を指示したりされど吾人は敢て下の如く斷言するを得べし。曰はく共存聯關は一切の聯關作用の根本なり所謂類似聯關も將たまた對照聯關も皆共存聯關の一部を換言したるものに外ならず類似聯關若しくは對照聯關を獨立の聯關法となすは未だ聯關作用の本質を知らざる者なりと。屢も言へる如く元來想念の再現は過去の心的状態によりて限定せらるるもの、過去の心的状態の如何によりて種々なる想念が再現せらるゝなり。故に

如何なる想念が互に相聯關して再現せらるゝかは一に過去の心的活動の如何によりて定まる。然り而して聯關に關する過去の心的活動は上に説明せる共存聯關といふ一法則のもとに蔽ふを得。是れ共存聯關は一切の聯關作用の根本なりといふ所以なり。

諸學者が枚擧せる聯關法は多しと雖も就中類似聯關は古來屢々一切の聯關作用の根本なりと稱せられたり否今日尙此の説を主張する者少なからず。されどこれは誤れり。蓋し類似の想念が互に相聯關して再現せらるゝは曾て此等の想念が同一に結合せられしが爲のみ即ち共存聯關によりて曾て空間的若しくは時間的に共存せしが爲のみ單に類似せるが故のみにて互に相影響するにあらざるなり。語を換へて言へば類似の想念が互に相聯關して再現せらるゝは其の最初既に共存聯關の作用を経たるものにして特に類似聯關といふ一法のみ支配せられしにあらざるなり。尙精密に類似聯關を評せんか(第一)類似聯關論者は想念作用といふことを誤解せり。其の故は彼等は類似の想念は互に相聯關すといふげに類似の想念は類似の想念を再現せしむべしされど想念作用は論者の解するが如く

單純なるものにあらず。彼等は類似の想念又は不類似の想念がさながら個々に存在するが如く會すされど實は諸の想念は互に相關係し結合し影響して有機體をなせり是れ吾人が心的活動なり。故に若し類似は類似を再現すと言はゞ單に一個の想念が他の一個の想念を再現せしむるにあらずして一の群をなし列をなせる類似の想念團が他の類似の想念團を再現せしむといふ事となるべし。されど斯くの如き現象いづこに有らんや。(第二)彼等は新に想念を得る時の心的作用と後に之れを再現する時の心的作用とを混同せり。例へば我れは甲友人といふ一の想念を具へたるに新に之れに類似せる乙友人といふ想念を得たりとせよ。我れは直に乙友といふ想念を甲友といふ想念に連結して其の異同を判別しおくべし。是れ新に想念を得たる時の心的状態なり。此の後或は甲友を想浮ぶるにつき或は乙友を想浮ぶるにつき二の想念が互に相聯關して再現せらるゝは是れ曾て既に同一に連結せられたる想念が再現せられたるに過ぎずして此の時始めて一方が他方を喚起せしにあらざるなり。而して前なるは共存聯關作用にして後なるは其の聯關せられたるものゝ再現のみ。然るに類似聯關論者は兩者を混

同して別に類似聯關法を立て其の作用の根本に共存聯關あるを遺却せり。是れ類似聯關法を獨立の法則となすの非なる所以なり。

げにや類似の想念は類似の想念を喚起す是れ實に心的事實なり吾人焉ぞ之れを拒まん。否吾人に斯くの如き作用あればこそ心的生活は種々なる方面に發進するを得若し斯くの如き作用なからんか或は同不同を判別し或は種々なる想像をなすの力は殆ど全く缺乏すべし類似が類似を喚起すといふ事實は吾人焉ぞ之れを拒まん。たゞ吾人が非とする點は所謂類似聯關を以て聯關法の一となすにあり。所謂類似聯關は共存聯關を他面より見たるものなるを知らざるの點にあり。次に對照聯關といふも亦同じ。全く互に相反せる想念は類似のものと同じく互に相結合せらるゝを常とす即ち對照聯關の行はるゝ前に既に相反せる兩想念は共存聯關によりて同一に結合せらる。故に共存聯關の外に別に對照聯關あるにあらずして所謂對照聯關は共存聯關の一部を換言せるに外ならざるを知るべし。各個の聯關 如何なる場合に如何なる聯關起こるか。如何なる條件のもとに如何なる種類の聯關起こるか。即ち種々なる聯關の起こる種々なる條件は如何。

是れ頗る緊要の問題なり。されど聯關の起こる一々の場合に就きて一々の條件を擧げんは難し。よりて各種の聯關に通ぜざる大體の條件即ち聯關の起こる一々の場合を支配すべき普通の原因を擧ぐれば略下の如し。曰はく如何なる種類の聯關が起こるべきかは(第一)想念作用の行はるべき生理的條件の種類の如何により(第二)或一種の想念に關して新に之れを得し時より後に之れを再現するに至るまでの心的生活の來歴の如何により(第三)再現作用の行はるゝ時の事情如何によりて異なり、此等の條件の種々に異なるによりて種々なる聯關ありと知るべし。想念の自在作用フレイ、イ、ン、ク 聯關作用が如何に心的生活の發達に大なる關係を有するかを知らんとせば想念の自在作用といふことを會得せざるべからず。想念の自在作用を知らんとせば先づ前章に説明せる原形に比較しての想念の性質を肥臆しおくを要す。元來想念は其の原形に關係せしめて言はゞ強弱の度又は靈活さの度等によりて種々に異なり而して此等の差は下の如き結果を來たす。曰はく想念愈強くして愈靈活ならば其の特殊の想念のみを強く且明らかに再現すること、は愈容易なりされど之れと共に他の數多の想念を再現せんことは愈難し。之れ

に反して想念愈薄弱にして且靈活ならずば特に或想念のみを明らかに再現することは愈難かるべしされど件の想念と共に之れに類似せる數多の想念を再現せんことは愈容易なるべし。さて斯くの如き現象あるが爲に下の如き緊要なること起こる。曰はく薄弱にして且靈活ならざる想念は之れに附隨せる諸の想念より自在に離れて他の類似せる數多の想念と結合し因りて所謂抽象想念アブストラクト、イ、ン、クを構成す。下に之れを詳説せん。

第一に注意すべきは同一又は類似の心的活動の反復これなり語を換へて言へば同一なる想念作用を幾度も反復することは意識の現象に少なからざる影響を及ぼすことは是れなり。蓋し此の種の反復は互に異なる二の影響を與ふ。即ち吾人が常に注意力を集めて或想念を幾度も反復再現せしむる時は件の想念は益々強く且靈活となり因りて之れと共に數多の他の想念を再現する能はざらしむることあり。之れに反してさまで注意を用ひずして幾度か類似の數多の想念を反復再現せしむる時は件の想念は漸次薄弱となり且其の靈活さを失ふに至ることあり。而して其の薄弱となり且靈活さを失へる想念は是れ殊別なる個々の印象を

脱離して時に其の想念に固有なる部分のみを具へたるものなり。換言すれば類似せる諸の想念のうちなる大體の内容のみを具へたるものなり。孰れにも共通せるが如き大體の部分のみは残りて他の殊別なる個々の印象は漸次消滅すべし而して其の残れる輪廓の如き想念は是れ諸の類似せる想念を代表せるものなり。殊別なる個々の印象愈減滅して共通の輪廓的印象愈構成せられなば件の想念は愈薄弱に愈其の靈活さを失ふに至るべし。而して斯く個々の印象を脱離して形式的想念(輪廓的想念)を構成する心的作用を稱して想念の自在作用といひ其の構成せられたる形式的想念を抽象想念又は概念といふ。蓋し斯くの如き想念は殊別なる個々の想念にあらずして類似せる諸想念を代表せる共通の想念なればなり。

隨意的再現 以上聯關作用の大要を説明し了りたるが尙注意すべき一事あり他なし想念の再現は悉皆聯關作用によるものなりや否や語を換へて言へば聯關作用によらずして隨意に再現せらるゝ想念ありや否やは是れなり。全く想念の隨意的再現を拒む者は曰はく諸の想念は互に相關係して存在するが故に一も隨意

に再現せらるゝものなし必ずや何等かの想念に聯關して不隨意に再現せらるゝと。吾人は思へらく全く想念の隨意的再現を拒むは非なり蓋し斯くするは想念の活潑自在なる活動を知らざるものなりと。夫れ想念の再現には二種あり直接再現と間接再現と是れなり。直接再現とは單に前なる心的活動の餘力によりて起るものにして他の想念に聯關して再現するにあらざるをいふ。間接再現とは他の想念に聯關して起るもの即ち媒を経て起る再現をいふ。吾人がこゝに隨意的再現といふは即ち直接再現を指すに外ならず。隨意的再現を拒む者或は曰はん所謂直接再現も實は何等かの想念に聯關せるものなり唯其の聯關せる想念の吾人に知れざるがために假に之れを直接再現といふのみ本來全く媒介想念なくして起るが如き想念なしと。されどこれは事實に反せり吾人は實際何等の想念をも媒とせずして屢々隨意的に種々の想念を想浮ぶることあり。之れを生理的條件に照らして考ふるに突然中樞機關に神經活動の起ることあり斯くの如き場合には之れに應ずる想念活動は必しも聯關作用を経とはいふべからざるなり。されば想念の再現には聯關作用によるものゝみにあらずして隨意的なるも

の亦多きを知るべし。

想念作用の有意的發達 以上説明せし如く想念には隨意的再現ありと雖も尙
聯關作用によりて器械的に再現せらるゝもの多しとせば人或は心的生活は殆ど
器械的に活動するものなりと思ふ者あらん。されど實は然らず。一切の想念活
動は心的生活の目的に従ひて有機的組織をなして發達す。有機的組織をなして
發達すとは一切の想念は何等の意味もなく器械的に離合するものにあらずして
一定の目的に従ひて之れに應ずる組織と發達とをなすをいふ。此の傾向は心的
生活の最も幼稚なる時にだに明らかに見ゆ。夫れ物の活動が一定の本意に従ふ
といふ事は廣く生物の發育を見ても知るべし。生物の身軀を構成する細胞は皆
一定の目的に適合して或は集合し或は變化す其の集合や變化や一々其の何の故
なるかを知る能はずと雖も要するに其の生存の目的に適合せるものなることは
明らかなり。之れと同じく無數の想念の活動は皆一定の本意に適合せるもの、一
定の本意に適合して以て種々雜多に集合し聯關す。即ち想念の活動は有意的に
發達するもの、一定の本意に適合して有機的組織を遂ぐるものなり。

單に聯關作用の一面のみを考ふれば想念活動は殆ど全く器械的なるかの觀あら
ん。されど聯關作用は單に器械的に何等の意味もなく行はるゝものにあらず。
感情と意志とは少なからざる影響を聯關作用に及びす否苦樂の情や諸の願望や
注意力や皆これ聯關作用其のものを支配する動力なり。故に聯關作用其のもの
は既に心的生活の本意にまたかひて行はるゝものなり。况や聯關作用の外に種
種なる隨意的作用あるに於てをや。因之觀是一切想念の活動は吾人が心的生活
の本意にまたかひて有機的組織を遂げ因りて有意的に發達するものなりと知る
べし。

第十四章 原初の知識作用

判別的意識 ことに原初の知識作用と稱するは事物を判別する單純の作用を
いふ。事物を判別するとは事物の異同を意識するをいふ。故に原初の知識作用
をば別に判別的意識ともいふ。そもく判別的意識は發達せる心的生活に
のみ具はれる現象にあらずして最も幼稚なる心的生活にだに具はれる意識なり。
件の判別的意識が心的生活の最初より吾人に具はるにあらずば吾人は何等の事

物をも知識する能はざるべく隨うて竟に心的生活を構成する能はざるべし。判別的意識は實に一切の知力作用の根本にして他の一切の知力作用は此の判別的意識に伴はれて始めて始めて其の作用を全うす。

故に判別的意識に就きて注意すべきこと二あり(第一)此の意識は他の特殊の心的作用と異なりて之れを一種の能力とは稱すべからず蓋し判別的意識は他の能力の如く截然他の心的作用より區別せらるべきものにあらず否他の心的作用の根底に横はりて此等心的作用を行はしむるものなればなり。尙詳言すれば一切の心的元素は判別的意識によりて構成せらるる其の故は吾人は假令幾多の印象を外界より收受すとも件の印象を一々判別して之れを我が想念となすにあらずば我れは何等の知識をも構成する能はざるべければなり。換言すれば一切の心的元素が我が知識の對象となるにあらずば我れは何等の知識をも具ふる能はざるべし而して一切の心的元素を我が知識の對象となすは即ち判別的意識の作用たるなり。知覺、記憶、想像等其の他一切の心的作用と心的發達とは皆此の判別的意識に伴はれて始めて始めて其の作用を全うする者といふべし。(第二)故に單に心的元素の

數を擧げて此等元素の離合を示したるのみにては未だ充分に心理を悉したりとはいふべからず。其の故は意識の各状態は單に消極的に心的元素が離合するのみのものにあらずして其の裡にものづから積極的作用これあり判別的意識といふ積極的作用これ有ればなり。故に心界を説明するに當たりては單に心的元素の消極的離合を示すのみに止まらずして之れと同時に其の積極的方面をも考究するを要す。

知識作用の生理的條件 原初の知識作用の生理的條件は何ぞや。是れ頗る緊要の問題なりされど吾人は之れに就きて何等の解説をも與ふるを得ず。知識作用といふ心的活動より推せば様々に聯關せる腦神經組織の複雑なる興奮が知識作用の生理的條件なることは明らかなり。蓋し知識作用は二種以上の感覺、感情若しくは想念を唯一に統括して以て其の間の同不同類不類を判別するものなり。而して斯くの如く複雑なる心的作用には亦之れに應ずる複雑なる生理的條件なかるべからず。即ち腦の種々なる部面の二種以上の神經作用が相互の聯關によりて一に統括せらるるを要す。是れ吾人に知られたる生理的條件なり。されど

かばかりの生理的説明は心理を究むるに益なし。吾人は智識作用の條件に關しては未だ何事をも知り得ずといふべきなり。

類同の意識 レイン 原初の知識作用即ち判別的意識といふ作用を分析すれば吾人は其の中に種々なる作用を發見す。其の最も幼稚なる時に於ては判別的意識は單に一の漠然たる活動作用に過ぎざるが如しされど仔細に其の作用を検する時は其の中に種々なる小作用の含有せらるゝを發見す。此等種々の作用の中最も著きは類同の意識なり。そもく類同の意識とは彼れと此れとを類似せり又は同一なりと意識することにして此の以外に説明を加へがたし。彼れと此れとを同一なり若しくは類似せりと意識すとは吾人が事物を知覺し又は想念を比較する際例へば鳥は鳥なり花は花なりと意識すること即ち眞實に此の事物を此の事物とし彼の想念を彼の想念と意識することをいふ。若し斯くの如き意識吾人に無しとせんか鳥を鳥と知るを得ず花を花となすを得ず此の想念は彼の想念に類似せり若しくは同じと意識するを得ざるべし。故に類同の意識は事物を認識するに缺くべからざるもの之れなくしては全く事物を認識する能はざるものなり。

たゞし類同の意識といふとも吾人が毎に彼れと此れと類似せり同一なりと意識するを謂ふにあらず此れを此れとし彼れを彼れとし甲は乙に似たりと思ひ乙は丙に同じと思ふ其のうち既に類同の意識具はれりとはいふなり。吾人が斯く意識するにあらずば事物を判別すべき理由なければなり。故に曰はく類同の意識は一切の經驗と一切の心的構成とに缺くべからざる根本作用なりと。

類同の意識といふとも必しも類似せる又は同一なる意識の状態のみか比較せらるゝにあらず唯類似せり又は同一なりと意識せらるれば即ち類同の意識成る。語を換へて言へば相比較せらるゝ感覺感情若しくは想念は必しも類似せずとも唯類似せりと想ひつかれば其れにて類同の識意は成る。蓋し意識の各状態は皆異なれり其の比較せられたる者も仔細に檢すれば數多の異なる點あるべきは勿論なり而も吾人は其の類似せる點のみに注意して之れを同一のもの又は類似せるものとす。これ通常の類同の意識なり。斯るが故に曾て同一なりと認識せられしものも後には不同なりと認識せらるゝことあり或は此の人の同一なりとする所を彼の人は不同なりと意識することあり。要するに唯類似せり同一

なりと想ひつかば其れにて類同の意識は成れりと謂ふべきなり。さればまた類似せる若しくは同一なる意識の状態が必しも類同の意識を起すものにあらず。語を換へて言へば類似せる若しくは同一なる意識の或状態が現れたりとして單に其れのみにて類同の意識は起るものにあらず此の意識の起るには類似せる意識の状態の外に件の状態を類似せりと意識する積極的作用なかるべからず意識の各状態を對象として以て之れが關係を看取する主觀的作用なかるべからず。蓋し類同の意識といふことには單に類似せる意識の或状態といふことの外に重要な意義あり類同の意識の起るには必ず意識の或状態を類似せり若しくは同一なりと意識するを要すればなり。

ディフェレンス 不同の意識 判別的意識を細別する時は上の類同の意識と相並びて別に不同の意識といふ重要な作用を發見すべし。不同の意識とは類同の意識と相反して彼の事物と此の事物とは互に相異なれり若しくは互に相同しからずと意識することなり。元來或事物を指して互に相同じといふは此の事物は彼の事物に同じからざるが故なり即ち一方に於て不同なるが故に他方に於て相同じといふを得るなり。同なからんか不同なく不同なからんか同はた無かるべし。故に不同の意識は類同の意識と相並びて判別的意識作用の根本なり類同の意識は之れによりて成り一切の心的作用は之なくしては行はれずといふべし。吾人が事物を判別すといふは其の同不同を辨別する謂にして不同を不同となすは即ち不同の意識に外ならざればなり。然り而して此の場合に於ても類同の意識と一般不同なる若しくは類似せざる意識の或状態が必しも不同の意識を起すにあらず又不同なる若しくは類似せざる意識の或状態のみが不同の意識を起すにあらずること前の類同の意識に同じと知るべし。

類同の意識と不同の意識とは上の如く相並びて判別的意識の中に存するものなれどこゝにて注意すべきは件の兩意識は精密には對等のものなりと謂ふべからざることは是れなり。兩意識のうち孰れか根本にして孰れか必須なりと言はゞ吾人は不同の意識よりはむしろ類同の意識が一層根本的にして又一層必須なりと答へん。蓋し種々の試験によりて見るも又は智力作用の解剖によりて見るも類同の意識は必ず不同の意識と共存するを要すといふの理由なきが如し。案ずる

に不同の意識は類同の意識に何等かの障礙を受けたる場合に起こるが多し即ち類同作用に何等かの障礙起こる時はこゝに不同の意識生ず。故に不同の意識は必ずしも類同の意識と對立して共存するものにあらずむしろ第二段の意識なりと謂はざるを得ず。即ち類同の意識は最も根本的なるもの又最も必須のものにして不同の意識は之れに次ぎて根本的なるものと言ふべきなり。

原初の知識作用の性質 吾人が幼稚なりし折の知識作用の性質は如何。是れ頗る困難なる問題なり。吾人は唯發達せる心的生活の狀態より推して此の問題を攻究し得るのみ。即ち此の問題を細別すればほゞ下の如くなるべし。曰はく知識作用に必須なる資料は何ぞや。曰はく事物を認識するに當たりて必須なりと言はるゝ同化作用アサミレーションと分化作用ディフレーション若しくは總合作用コンセンサスと分析作用アナリシスとは何ぞや。曰はく原初の判断力の性質は如何。此等は本章に於て攻究すべき重なる問題なり。下に其の各項に就きて大要を畧叙せん。

知識作用には注意力と想念作用とを要す 類同を類同と意識し不同を不同と意識するは是れ知識作用の本質なるが斯くの如き作用の行はるゝには注意力と

種々なる想念作用とを要す。注意力を要すとは判別作用の行はるゝ際多少の注意力が之れに集注せらるゝにあらずば同を同となし不同を不同と意識する能はざるをいふ。注意力の集注に二種あり不隨意的にして自然なるものと隨意的にして積極的なるものと是れなり。不隨意的なるものとは注意せんと欲して起こる注意力にあらずしておのづから發動するものをいふ。斯くの如き場合には判別作用は、おのづから行はれ我れは努めずして事物を知識するを得。次に隨意的のものとは我れより注意せんと欲して起こる積極的意志の力をいふ。斯くの如き場合は努めて事物を判別する時にして判別せらるゝ材料と判別する意識とはさながら別存するが如く見ゆべし。要するに隨意的若しくは不隨意的注意力なくしては吾人は事物を判別し認識する能はずと知るべし。

智識作用に想念作用の必須なることは言を俟たず想念は判別的意識の資料にして之れなくば判別といふことこの行はるべき理由なからん。唯こゝに注意すべきは諸の想念の流轉と智識作用との關係これなり。人或は思へらく諸の想念は何等の意識もなく流轉する際判別的意識は別に其の間に現れて以て其の異同を辨

別するものならん。想念作用と判別的意識とを便宜のため抽象して區別せんは可なりされど此の兩者は互に相離れて存立し得べきものにあらざ兩者は共に意識の一版圖に屬する一作用なることを記せざるべからず。即ち判別作用は想念作用を條件として其の裡に起こるものと謂ふべし。

同化作用と分化作用並びに比較作用　知識作用のうちにはまた同化作用と分化作用と稱するものあり又解剖作用と總合作用とを含める比較作用と稱するものあり。同化作用とは類同の意識に伴はれて類同の想念若しくは類同の意識の或状態を堅く聯關せしむるの作用をいふ。詳言すれば類同の意識によりて同一若しくは類似と意識せる想念又は其の他の心的状態を互に相聯關せしめて一に合化するの作用これを同化作用といふ。次に分化作用は同化作用と全く相反せり即ち不同の意識によりて不同なる想念若しくは他の心的状態を同一なるものより分別するの作用をいふ。既に前にも言へる如く類同の意識は不同の意識に比すれば一層根本的にして又一層原初のものなると一般同化作用と分化作用との場合に於ても前者は後者に比して更に根本的にして又更に必須のものなるを

見る。幼稚なる心界の中には最初より分化作用に類せるものありと雖も其は甚だ漠然たるものにして未だ正當に分化作用と稱すべきものにあらむ。之れに反して同化作用は最も單純なる心界にだに既にこれ有り之れを最根本のものと稱するも敢て不可なし。

次に比較作用とは一物と他物とを比較して其の同じき部分を同じとし異なる部分を異なれりと意識するをいふ。而して單に一物に就きて其の中より同不同を辨別する時は之れを解剖といひ之れに反して諸の同じきものと同じからざるものを總括して新に一物をつくる時は之れを總合といふ。解剖と總合とは比較作用の兩面にして兩者もど全く異なりたるにあらざるなり。一物より同不同を判別し出だす時は之れを解剖といひ其の判別せられたるものを一物に合括する時は之れを總合と稱するのみ。而して此等解剖並びに總合作用は幼稚なる心的生活に於ては頗る漠然たるものなりと雖も之れによりて漸次心的生活の發達すること甚だ大なるものなり。

原初の判断力　原初の知識作用のうちには亦單純なる判断力あり。通常論理

學者は判断とは二の概念を主客の兩位に結合せるものなりと説く。これ或は論理的眞理なるべきも心理上の眞理なりとはいふべからず。其の故は判断力は概念の結合を俟ちて後に現るべきものにあらず却りて判断力が概念を造出だすに外ならざればなり。語を換へて言へば思想の精髓は判断にして概念は思想によりて造出ださるゝものなり故に判断力は概念の後に現るゝにあらずして其の以前に既に斯くの如き作用はあるべきなり。下に判断力に就きて注意すべきこと二三を列記すべし。

(一)判断力は突如として意識に現はるゝものにあらず心的生活には最初より斯くの如き力具はれり。智識作用の發達や其の間に些の斷絶なし判断力と雖も初より何等の用意もなく何等の準備も無くして突然現るべきものにあらず。既に最初より斯くの如き作用心に具はりて漸次發達し行くものなること明らかなり。(二)然りと雖も判断力は單に諸の想念の聯關のみより成るものにあらず單なる想念の聯關以上に正に一地步を占むる作用とも稱すべし。詳言すれば單に諸の想念が種々なる状態に聯關することのみがやがて判断力を起す所以なりとは言

ふべからず。判断力は此の外に想念と想念との間には何等の關係あるかを意識するの作用なり。(三)二の心的元素又は心的状態の間に行はれたる解剖又は總合は其の裡に原初の判断力を含む。語を換へて言へば様々なる意識の状態に就きて其の類同を類同とし不同を不同となして之れを總合する作用は是れやがて判断力なりと謂ふを得べし。即ち單純なる判断力は原初の判別作用の中に既に業に含具せられたりと謂ふべきなり。

因之觀是意識の諸の内容に就きて其の類同若しくは不同の關係を明らかに意識することは是れ即ち原初の判断力なり。斯くの如き作用は同化作用にも分化作用にも將た總合作用にも解剖作用にも常に含具せられたり。一切の思想は皆此の判断力を基として發達すと謂ふべきなり。

時間の意識 時間の意識は一切の知識作用に伴ふ必須の條件にして此の意識なくば知識作用は殆ど成立せずといふも不可なし。何故に去か言ふか。答へて曰はく知識作用は必ず或時間のうちに行はるゝもの、諸の想念の流轉並びに判別作用は或時間内に行はるゝもの、即ち多少の時間を費すにあらずば何等の知識作

用と雖も行はれざるが故に時間といふ意識は知識作用に必須の條件とはいふなり。哲學上時間といふ意識の價值如何は頗る重要な問題なり即ち知識論上時間には果して先天的に存在せるものなりや否やは頗る重要な問題なり。されど吾人科學的心理學者は敢て斯くの如き哲學的疑問を攻究するの要なし唯斯くの如き意識の發達し來たれる順序を記述せば足りぬべし。其の生起の根本に關しては到底科學的心理學の能く到達し得べきにあらざればなり。

時間といふ意識は本來我が心に具はれるものなりや否や。是れ從來諸説の因りて起る疑問なり。英國派の多數の心理學者は時間の意識は本來我れに具はれるものなりといふ説を難じて曰はく幼稚なる心は曾て斯くの如き意識を具ふることなし漸々發達せる後始めて斯かる意識を造出だすに過ぎざるなりと。されど此の非難は誤れり。其の故は假令明らかに時間といふ念を意識せざるも實際時間といふものが心的活動の必須條件にして之れなくば心的活動成りがたしとせば吾人は既に初より此の意識を具へたりと言はざるを得ず。假令幼稚なる我れは之れを意識せずとも無意識的に之れを意識せりと言はざるを得ず。尙他の

方面より説明せんか時間の意識は單に諸の心的活動が或時間内に行はれたりといふ事實のみより來たるにあらず此の事實を基として新に主觀が發見すべき意識なり。換言すれば或知識作用が或時間内に行はれたりとて其れがやがて時間の意識となるにあらず否吾人は斯くの如き現象を見て之れを熟考するに及びて始めて明らかに時間といふ意識を具ふるに至るなり。

斯くの如く時間の形式は心的生涯の最初より我れに具はれるものなりと雖も其の明らかなる意識として吾人に現るゝには幾段の成長と發達とを遂げざるべからず。即ち時間の意識は漸々に成長し發達すべきものなるを知る。然らば此の意識は實際如何にして發達するかと言はゞ日常吾人が經驗する心的活動は實に或時間内に連続して行はるればなりと答ふべし。其の初や漠として頗る不確實なりと雖も漸々發達せる後遂には明晰にして確實なる意識となるに至る。

以上心的生活の單純にして普通なる状態を説明し終りたり。心的生活は素より複雑多様なるものなり其の單純なる状態と稱するものも實は甚だ複雑多様なる

ものなり。上來吾人が記述せし所は僅に其の概要を示せしに過ぎずと知るべし。以下吾人は更に進みて此等單純なる状態の發達して一層複雑となれるものを攻究せん。

第三篇

心的生活の發達

第十五章 知覺

知覺の本質を研究するに先だちて豫め知覺の何たるを畧説せんか。知覺とは聯關せる諸想念の一團若しくは數團が其の中の一想念又は數想念に應ずる外界の刺激によりて意識の表面に出現する現象なりと謂ふべし。詞を換へて言へば曾て一團に連結せられし諸想念が其の中の或想念に應ずる感覺に賴りて惹起せられ因りて直接に件の一團に應ずる事物を覺する是れを知覺といふ。例へば花といふ者は紅又は白といふ色と楕圓形又は其の他の形せる瓣と其の外花冠又蕊などかまぐの位置に具はりて斯くくの枝上に懸かるといふ一團の諸想念より成れりとせよ吾人が直接耳目に訴へて或は其の色のみを見或は其の蕊のみに觸るゝ時はやがて其の他の諸想念も之れに聯關して再現せらるべし即ち吾人は此の際花といふ一物を知覺す。故に知覺とは感覺に賴り想念の補助を得て事物を認識することなりと謂ふを得べし。